# 山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告

筑紫郡那珂川町大字中原所在深原遺跡の調査

第8集

1 9 7 8

福岡県教育委員会

## 山陽新幹線関係 埋蔵文化財調査報告

筑紫郡那珂川町大字中原所在 深原遺跡の調査

第 8 集

この報告書は、福岡県教育委員会が日本国有鉄道の委託を受けて、昭和46年度から実施している、山陽新幹線建設路線内および博多総合車輌基地内の埋蔵文化財発掘調査の記録の一部であります。

今回の報告は,筑紫郡那珂川町所在の縄文時代の遺跡である深原遺跡についてのもので『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第8集として刊行することになりました。

発掘調査の記録としては決して満足のゆくものではありませんが、本報告書を通して文化財に対する関心を深める方が一人でも増えれば、望外の喜びとするものであります。

なお,地元那珂川町・春日市の方々をはじめ,関係各位の御援助と御配慮により本書を発刊するはこびになりましたことを心から感謝を申し上げます。

昭和53年11月30日

福岡県教育委員会 教育長 浦 山 太 郎

#### 例 言

- 1 本書は、昭和48年度と昭和52年度に福岡県教育委員会が、日本国有鉄道下関 工事局から委託されて、山陽新幹線建設のため破壊される埋蔵文化財を発掘 調査した8冊目の報告書である。
- 2 発掘調査については別府大学賀川光夫教授,橘昌信助教授の参加を得た。
- 3 本書の執筆はⅢ-3及びⅣ-1-(4)を別府大学橘昌信助教授,他を木下修が 行なった。
- 4 掲載写真の撮影は一部柳田康雄氏の協力を得た。また、遺物の実測については一部山口譲治・織笠昭・荒武麗子氏、遺物写真は九州歴史資料館岡紀久夫・前田次郎氏の協力を得た。
- 5 本書の編集は木下修があたった。

## 本 文 目 次

#### 深原遺跡の調査

I	序					
	1.	はじ	め	と…	1	Ĺ
	2.	調査の	経	過…		2
п	立	地と	環:	境		3
Ш	調	査の	概 :	要…		3
	1.	区割の	)設	定…		3
	2.	圕		序…	(	9
	3.	遺物の出	出土地	犬態…	12	2
IV	縄				遺物	
	1.				18	
					跡18	
					₫構······3-	
					1構3	
					構3	
	2.	包含層品	出土の	の遺物	勿3:	
		(1) 土			器3	
		(2) 石			器	0
v	そ	の他のi	貴構	と遺	ː物······ 14	0
	1.	先土器	時代の	の遺物	勿	0
	2.	古墳時何	<b>七と</b>	その包	<b>炎の遺構 14</b>	2
		(1) 溝	状	遺	構 14	2
		(2) 石	積	遺	構 14	2
		(3) 石	畳	遺	構	2
VI	ま	٤		め…	14	3

## 図 版 目 次

				頁照校文本
図	版	1		深原遺跡遠景(北東から) 1
		2		観音山古墳群中原支群と深原遺跡(南東上空から) 1
		3	(1)	観音山古墳群と深原遺跡(東側上空から) 1
			(2)	調査前の遺跡(北東側)2
		4	(1)	調査前の遺跡(南側)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
			(2)	予備調査中の 2 号墳(昭和46年度) 2
		5	(1)	深原遺跡全景(北から) 4
			(2)	深原遺跡北側全景(東から) … 4
		6	(1)	深原遺跡北側全景(南から) 4
			(2)	深原遺跡中央部全景(東から) 4
		7	(1)	深原遺跡全景 (調査終了時) 4
			(2)	深原遺跡全景(調査終了時) 4
		8		破壊される深原遺跡 5
		9	(1)	第43-2 地点全景 5
			(2)	第43-2 地点南北トレンチ全景 5
		10	(1)	第46-1 地点西側全景 5
			(2)	第46-1 地点南側全景 5
		11	(1)	発掘調査風景
			(2)	発掘調査風景
		12	(1)	土層断面9
			(2)	土層断面9
		13	(1)	土層断面
			(2)	土層断面
		14	(1)	E 4 ・ F 4 区全景······18
			(2)	竪穴遺構
		15	(1)	1 号石組炉跡
			(2)	1号石組炉跡と土器出土状態

16	(1)	2 号石組炉跡19
	(2)	3 号石組炉跡21
17	(1)	4 号石組炉跡21
	(2)	4 号石組炉跡近景21
18	(1)	5 号石組炉跡24
	(2)	5 号石組炉跡床石24
19	(1)	6 号石組炉跡24
	(2)	7 • 6 号石組炉跡24
20	(1)	8 号石組炉跡24
	(2)	9 • 8 号石組炉跡24
21	(1)	11号石組炉跡と遺物出土状態25
	(2)	11号石組炉跡25
22	(1)	11号石組炉跡とピット状遺構26
	(2)	11号石組炉跡内押型文土器出土状態26
23	(1)	11号石組炉跡26
	(2)	11号石組炉跡床石26
24	(1)	12号石組炉跡26
	(2)	13号石組炉跡26
25	(1)	14号石組炉跡26
	(2)	16号石組炉跡26
26	(1)	17号石組炉跡26
	(2)	18号石組炉跡30
27	(1)	19号石組炉跡30
	(2)	20号石組炉跡31
28	(1)	21号石組炉跡31
	(2)	22号石組炉跡31
29	(1)	23号石組炉跡31
	(2)	25号石組炉跡32
30	(1)	25・27・26・22号石組炉跡(東から)32
	(2)	25・27・26・22号石組炉跡(南から)32
31	(1)	27 • 26号石組炉跡33
	(2)	28号石組炉跡33
` 32	(1)	29号石組炉跡34

	(2)	30 • 29号石組炉跡34
33	(1)	31号石組炉跡34
	(2)	32号石組炉跡34
34	(1)	円形竪穴遺構全景(東から)34
	(2)	円形竪穴遺構内遺物出土状態34
35	(1)	円形竪穴遺構内石組34
	(2)	円形竪穴遺構付近の剝片出土状態35
36	(1)	山形押型文土器出土状態39
	(2)	楕円押型文土器出土状態(裏面)39
37	(1)	遺物出土状態39
	(2)	遺物出土状態39
38		各種遺物出土状態39
39	(1)	環状石斧出土状態39
	(2)	9号石組炉跡付近石器出土状態39
40		出土土器 139
41		出土土器 239
42		押型文土器文様拡大写真39
43	(1)	山形押型文土器(外面)40
	(2)	山形押型文土器(内面)40
44	(1)	格子目押型文土器49
	(2)	
<b>4</b> 5	(1)	楕円押型文土器 2 (外面)51
	(2)	精円押型文土器 2 (内面) ·······51
46	(1)	楕円押型文土器 3 (外面)61
	(2)	楕円押型文土器 3 (内面)
47	(1)	精円押型文土器 4 (外面)·······64
	(2)	楕円押型文土器 4 (内面)64
48	(1)	楕円押型文土器 5 (外面)
	(2)	楕円押型文土器 5 (内面) ·······64
49	(1)	精円押型文土器 6 ·······80
	(2)	無文土器······82
50	(1)	燃糸文・縄文・条痕文土器·······86
	(2)	前・中期の土器・・・・・・・89
	. ,	

•

			51	(1)	後期の土器						94
				(2)	後・晩期の	土器					97
			52	(1)	出土石鏃1						· 102
				(2)	出土石鏃2						· 102
			53	(1)	出土尖頭状	石器	••••••				· 108
				(2)	出土異形局	部磨製石器	器				· 108
			54	(1)	出土石匙…						• 111
				(2)		•					
			55	(1)							
				(2)							
			56	(1)							
				(2)							
			57	(1)							
				(2)							
			58	(1)							
				(2)							
			59	(1)							
				(2)							
			60	(1)							
				(2)							
			61	(1)	石畳遺構く	さび痕…					• 142
				(2)	石積遺構…						· 142
						挿	図	自	次		
	第										
	第	2	図							······································	
-	第	3	図							······································	
	第	4	図							b	
	第	5	図							······································	
	第	6	図								
	第	7	図								
	第	8	図	F 6-	- 6 区土層断	面図					10

第	9	図	G 9 • 10区,第43-2 地点土層断面図 ······11
第	10	図	グリッド別遺物出土量・・・・・・12
第	11	図	F 6 -16区土層断面と分層発掘の関係図12
第	12	図	F 6-11・16・21区遺物垂直分布図折込み
第	13	図	F 6-11·16·21区,3 a · 3 b 層遺物出土状態 ······14
第	14	図	F 6-11・16・21区,3 c・3 d 層遺物出土状態15
第	15	図	F 6-11 • 16 • 21区,3 e • 3 f 層遺物出土状態 ······16
第	16	図	F 6-11・16・21区, 3 g・ 3 h 層遺物出土状態17
第	17	図	1 • 2 号石組炉跡実測図
第	18	図	1 · 4 · 11 · 18 · 19号石組炉跡出土土器拓影······20
第	19	図	3 • 4 号石組炉跡実測図21
第	20	図	5~7号石組炉跡実測図22
第	21	図	8~10・12号石組炉跡実測図23
第	22	図	9号石組炉跡出土石器実測図24
第	23	図	11号石組炉跡実測図25
第	24	図	13~16号石組炉跡実測図27
第	25	図	17~20号石組炉跡実測図28
第	26	図	21~23 • 25号石組炉跡実測図29
第	27	図	24号石組炉跡実測図30
第	28	図	26 • 27号石組炉跡実測図31
第	29	図	32号石組炉跡実測図32
第	30	図	28~31号石組炉跡実測図折込み
第	31	図	円形竪穴遺構実測図・・・・・35
第	32	図	円形竪穴遺構出土土器・石器実測図36
第	33	図	ピット状遺構実測図37
第	34	図	竪穴遺構実測図38
第	35	図	山形押型文土器拓影 141
第	36	図	山形押型文土器拓影 242
第	37	図	山形押型文土器拓影 3 ······43
第	38	図	山形押型文土器拓影 4 · · · · · · 44
第	39	図	山形押型文土器拓影 545
第	40	図	山形押型文土器拓影 6
第	41	図	山形押型文土器拓影 747

`

•

42 図 山形押型文土器拓影 848	42 図	第
	43 図	第
44 図 格子目押型文土器拓影 251	44 図	第
45 図 楕円押型文土器拓影 152	45 図	第
50	46 図	第
47 図 楕円押型文土器拓影 3	47 図	第
48 図 楕円押型文土器拓影 4	48 図	第
49 図 楕円押型文土器拓影 556	49 図	第
50 図 楕円押型文土器拓影 657	50 図	第
51 図 楕円押型文土器拓影 7	51 図	第
52 図 楕円押型文土器拓影 859	52 図	第
53 図 楕円押型文土器拓影 960	53 図	第
54 図 楕円押型文土器拓影 1062	54 図	第
55 図 楕円押型文土器拓影 1165	55 図	第
56 図 楕円押型文土器拓影 1266	56 図	第
57 図 楕円押型文土器拓影 1367	57 図	第
58 図 楕円押型文土器拓影 1468	58 図	第
59 図 楕円押型文土器拓影 1569	59 図	第
60 図 楕円押型文土器拓影 1670	60 図	第
61 図 楕円押型文土器拓影 1771	61 図	第
62 図 楕円押型文土器拓影 1872	62 🗵	第
63 図 楕円押型文土器拓影 1973	63 🗵	第
64 図 楕円押型文土器拓影 2074	64 図	第
65 図 楕円押型文土器拓影 2175	65 図	第
66 図 楕円押型文土器拓影 2276	66 図	第
• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	67 図	第
	68 図	71-
69 図 楕円押型文土器拓影 2579		
70 図 楕円押型文・沈線文土器拓影80		第
72 図 無文土器拓影 1	72 図	第
	73 🗵	
74 図 無文土器拓影 385	74 図	第

第	75	図	無文土器底部実測図86
第	76	図	燃糸文土器拓影
第	77	図	燃糸文・縄文・条痕文土器拓影·····88
第	78	図	曾畑式土器実測図·····89
第	79	図	沈線文土器実測図90
第	80	図	手向山式・轟式・その他土器拓影91
第	81	図	塞ノ神式土器拓影92
第	82	図	阿高式土器拓影93
第	83	図	後期土器拓影 1 · · · · · · 95
第	84	図	後期土器拓影 296
第	85	図	後期土器実測図97
第	86	図	後・晩期土器拓影 198
第	87	図	後・晩期土器拓影 299
第	88	図	晚期土器拓影
第	89	図	石鏃グリッド別出土量・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第	90	図	石鏃実測図 1
第	91	図	石鏃実測図 2
第	92	図	石鏃実測図 3
第	93	図	石鏃実測図 4
第	94	図	石鏃実測図 5
第	95	図	尖頭石器実測図 1
第	96	図	尖頭石器実測図 2
第	97	図	異形局部磨製石器実測図
第	98	図	石匙実測図
第	99	図	搔・削器グリッド別出土 <u>量</u>
第	100	図	削器実測図 1
第	101	図	削器実測図 2
	102		削器実測図 3 115
第	103	図	削器実測図 4
第	104	図	削器実測図 5 117
第	105	図	<u> </u>
	106		搔器実測図 2 ······ 120
			磨製石斧実測図

第108	12 打製石斧実測図	22
第 109	③ 礫器グリッド別出土量	23
第 110 [	☑ 礫器実測図 1	<u>}</u> 4
第 111 [	☑ 礫器実測図 2 ····· 12	25
第 112 [	3 磨石・敲石グリッド別出土量	26
第113	③ 磨石実測図	27
第114]	図 磨石・敲石・凹石実測図	28
第 115	<ul><li>る 石皿・砥石実測図</li></ul>	30
第 116	☑ 石錐・彫器実測図	32
第 117	☑ 石核実測図 1 ······ 1:	33
第 118	図 石核実測図 2 ······ 13	34
第 119	☑ 石核実測図 3 ······· 1:	35
第 120	图 剝片実測図	36
第 121	図 刃器・つまみ形石器グリッド別出土量	37
第 122	図 刃器実測図	38
第 123	図 つまみ形石器実測図	39
第 124	図 石錘・石包丁・玉石実測図	40
第 125	図 先土器時代の石器	40
第 126	図 溝状遺構実測図	41
第 127	図 石積遺構実測図	42
第 128	図 石畳遺構実測図折込	み
	主 口 炒	
•	表 目 次	
表 1		
表 2	春日•那珂川地区先土器•縄文時代遺跡地名表	
表 3	石組炉跡一覧表	
表 4	層位別早期土器出土量・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
表 5	山形押型文文様別土器出土量	
表 6	楕円押型文文様別土器出土量	
表 7	グリッド別石器出土量	
表 8	出土石器一覧表折込	み

## 付 図 目 次

付 図 1 深原遺跡土層断面図1

付 図 2 深原遺跡土層断面図2

### 深原遺跡の調査

#### 1. 序

#### 1. は じ め に

本書は、山陽新幹線博多総合車輛基地建設により破壊された深原遺跡の報告書である。当遺 跡は山陽新幹線関係埋蔵文化財地点番号43-1地点,43-2地点,46-1地点の総称で,調査は, 43-1 地点が47・48年度, 43-2 地点が48年度, 46-1 地点が51年度と3次実施し, 総面積は 5,505m² に及ぶ。

遺跡は山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第5集に報告した観音山古墳群と同一の台地上、 下層に確認された縄文時代早期を主とするもので、行政上では福岡県筑紫郡那珂川町大字中原 字深原を中心に一部、井手ノ原と大字松ノ木字ツタガ尻にまたがる。

調査期間及び調査担当者は下記の通りであり、 昭和47年度には別府大学賀川光夫教授・橘昌 信講師の参加と同大学生の助力を得た。

第43-1 地点, 4,380 m², 昭和48年3月1日~同8月15日

第43-2 地点,104 m², 昭和49年3月1日~同3月8日

第46-1 地点, 1,021 m², 昭和51年7月12日~同9月6日

#### 福岡県教育委員会

#### 総 括

Ą	教育長(前)	森田	實	教育長(現)	浦山	太郎
,	<b>教育次長</b>	西村	太郎	文化課課長	古川	善久
-	文化課課長	森	英俊	文化課課長	藤井	功
-	文化課課長補佐	菅	隆	文化課課長補佐	今井	岩男
-	文化課課長補佐	川崎	隆夫	文化課課長補佐	野上	保
-	文化課課長補佐	武久	耕作	文化課参事補佐	松岡	史
庶	務					
J.	庶務係長	姫野	博	庶務係長	前田	栄一

庶務位	系長	大淵	幸夫		主	事	小川清	5一郎
主	事	植村	實		主	事	大神	新
嘱	託	吉村	源七					
発掘調3	<u>*</u>							
別府	大学教授	賀川	光夫		別府ス	大学講師	橘	昌信
文化記	<b>果技術主査</b>	靍久	嗣郎	i	文化詞	<b>果技術主査</b>	宮小路	格賀宏
文化記	前川	威洋		文化詞	果主任技師	柳田	康雄	
文化記	井上	裕弘		文化記	果技師	木下	修	
九州區	副島	邦弘		遺物類	<b></b> と理嘱託	岩瀬	正信	

他に調査補助員として、山口譲治(現福岡市文化課),宮崎貴夫(現長崎県文化課),藤瀬禎博(現鳥栖市教育委員会),小田雅文(現久留米市嘱託),高田一弘氏,ならびに,大城慧・坂本嘉弘・中島哲郎・森永弘太・和田利徳・安部保代・飯田直子・梅山朋子・松本ひとみ(別府大学),河野真知郎(上智大学),佐藤晴久,駒木洋子(明治大学),元井茂,今井正晴,清水澄,女屋和志雄(国学院大学),高橋龍三郎(早稲田大学),桑田和義,渡辺和子,三津井知廣,高田弘信氏,整理補助員として織笠昭,荒武麗子,松村明子氏の協力を得た。また,遺物復原作業には下記の人々が当った。

富永安代・田代チズ子・坂本君子・笹淵 チズ子・大追文子・持永ナツ子・穴井栄子・中村良 枝・中村良子・勝野ユタカ・金堂仁枝・藤野和代・八尋恵美子・河鍋美智子・西フジェ・金堂 融子・江藤千賀子・山下幸子・植村典子・勝野素子・勝野準子・手嶋道子・川上ヨシノ・河鍋 洋子・白水千賀子・金堂早苗

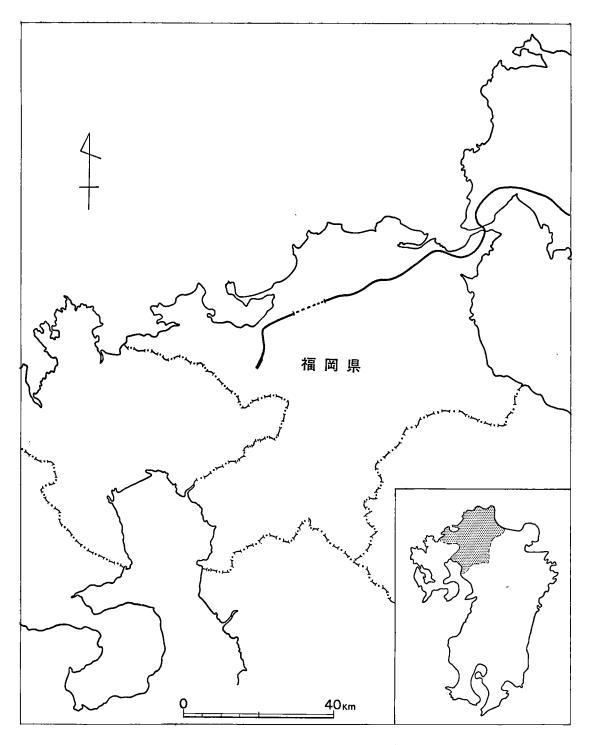
以上の方々の他にも、日本国有鉄道下関工事事務所、同南福岡工事事務所、地元那珂川町、 春日市在住各位の協力を得た事を記し、感謝の意を表したい。

なお、国鉄関係者は「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第1・2集に示す通りである。

#### 2. 調査の経過

遺跡は当初, 古墳のみが対象地としてあげられていた(第38・40~43・45~49・49-1~4・51地点)。 終末期の群集墳である観音山古墳群中原第Ⅲ支群の調査が開始されたのは昭和 46年8月(第38・55地点)で、古墳群全掘のため表土剝ぎの最中に押型文土器の出土を見たのが最初であった。

古墳群の調査が南側へ拡がると共に、古墳遺構の掘込面下に縄文土器及び石器が出土し、大 規模な遺跡である事が推測され、追加調査地点として古墳群の調査終了を待って下部の調査を



第 1 図 山陽新幹線の路線と博多車輛基地の位置 (1/1,000,000)

実施した。調査は車輛基地建設に伴い、 3次にわたって行なった。以下、地点毎の調査経過について記す。

#### 第43-1地点(昭和48年3月1日~8月15日)

再述するが、観音山古墳群の調査時点で、下部に縄文時代早期の良好な包含層が予想され、 追加調査地点となった。遺跡の範囲は扇状台地の西南半全域にわたり、古墳群が形成された地 区とほとんど重複する。石組炉跡・円形竪穴遺構を始め、多量の土器・石器が出土し、3次に わたる調査結果でも、遺跡の主要部分である事が判った。

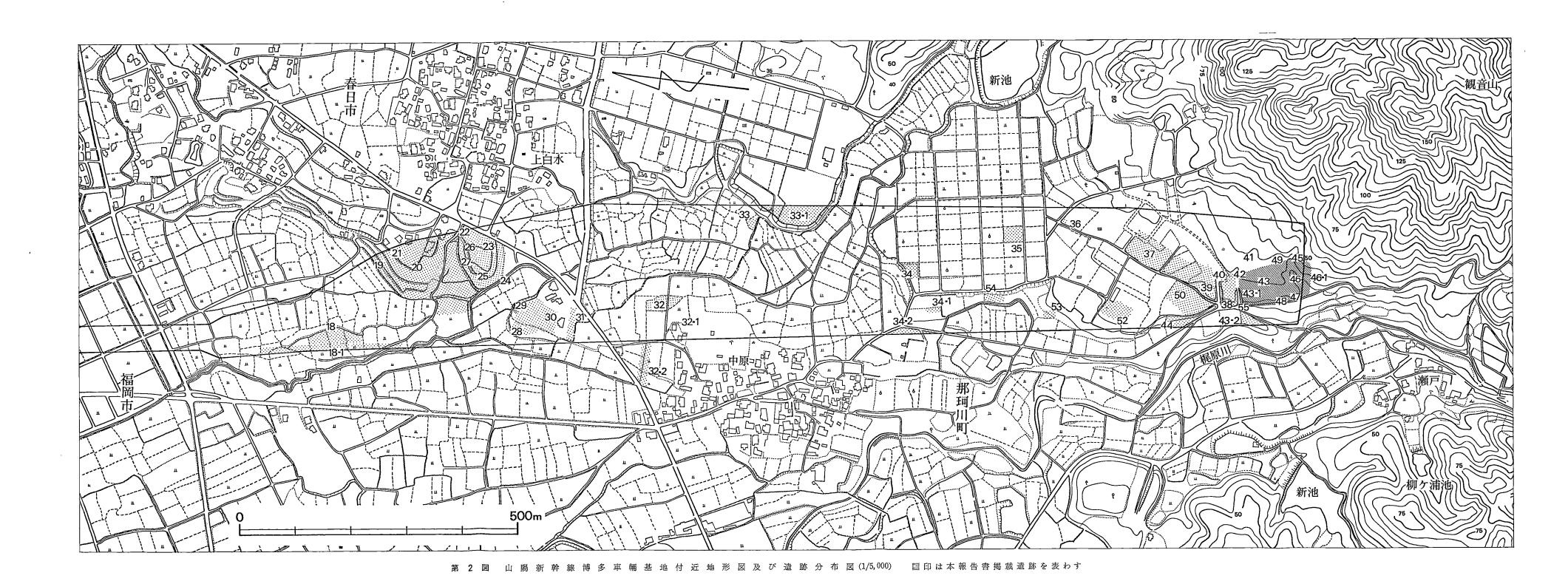
調査はE 4 区から開始したが、当時は古墳群関係の調査の方に主力がそそがれていたので、3 月16日 $\sim$ 31 日まで別府大学賀川光夫教授・橘昌信講師に参加していただき、D 5 区、E 5 区 E 5 区

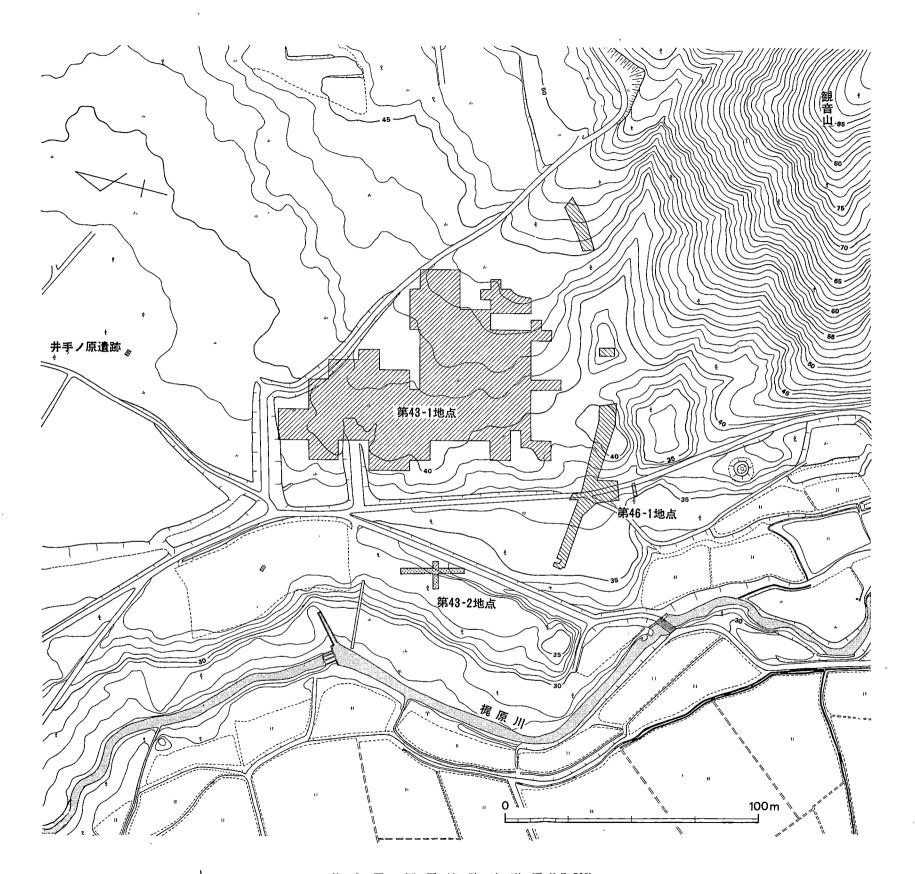
- 3月1日 E4区から3層の黄褐色土を掘り下げる。
- 3月16日 本日より別府大学の助力を得る。 D 5-21・22区, E 5-1・2 区に入り, 5 cm の分層発掘を開始。
  - 3月24日 D5・E5区とも包含層が薄く、遺物出土量が少ない。
  - 3月25日 F5-11・16区は3層上部からかなり良好な状態で押型文土器・石器が出土。
  - 3月28日 F 5-14・18区の調査終了。
  - 3月29日 各調査区の土層図を作成する。
- 3月31日 F5-11・16区に検出された竪穴遺構の調査を続けた。 遺物の出土は なかったが、縄文時代早期の包含層から切り込んでいる点は確実である。 本日で別府大学の調査を終了した。
  - 4月14日 F4-1・2区の3層上部で大型の押型文土器片が出土する。
- 4月20日 E5-17・22区を中心に土器が集中して出土し、掘り下げた所、石組炉跡と思われる遺構を検出した。
  - 4月29日 5号石組炉跡の実測。
  - 5月9日 F6-6区の3層下部で多量の押型文土器が出土し、全体を写真撮影する。
  - 5月23日 手向山式,塞ノ神式の土器が出土。
- 6月2日 E6-24区の4層上部で環状石斧の半欠品が出土し、層位的に押型文土器に共伴する。
- 6月8日 11号石組炉付近の遺物写真をとる。なお当石組炉の西側に炭化物,焼土のつまったピットを検出した。
  - 6月29日 雨で作業中止。
  - 7月10日 F4-1~4区の深層掘りを行なう。

#### 表 1 山陽新幹線関係遺跡一覧表

						調る	在 終	7 [	面 積				
地点番号	遗跡名	所 在 地	内 容	46年度	47年度	48年度	49年度	50年度	51年度	52年度	53年度	備 考	報告書
3	小田山墓地	鞍手郡鞍手町中山	近世墓地	m <sup>z</sup>	_m²	m²	m²	m²	mt	m¹	m¹		1 集
4	下松尾墓地	н н н	近世墓地		_								"
5	京 尾 遺 跡	" " 室木	中世配石遺構		_								"
6	若宮条里	" 若宮町	条里遺構		229								"
6 - 0		" " 金丸	近世墓地			_						調査前に工事のため改葬	"
6 – 1	田尻遺跡	" " 金丸・水原	古墳、歴史時代:住居跡		2,035		3,000						"
6 – 2	別当塚	" " 竹原	古墳		146							遺構、遺物なし	n
6 - 3	八幡塚	n 11 11	古墳		16			300					
7	杉園遺跡	" " 稲光	土師: 散布地	-								遺構なし	1集
8	-	粕屋郡久山町山田	条里遺構		100							調査の結果,条里ではなかった	"
18		atomata toric to	先土器~歴史時代:住居跡8軒,円形遺			790							4 集
18-1	柏田遺跡	春日市上白水	構,溝状遺構				2,100	1,000				昭和49年度は、別府大学に一部調査委嘱	"
18-2	辻 田 遺 跡	11 11	弥生, 古墳時代:住居跡, 木器							2,375	1,882		
18-3	井手ノ元遺跡	福岡市南区上日佐								720			
19~27 及び周辺	門田遺跡	春日市上白水	先土器~歷史時代:住居跡、貯蔵穴、褒 棺墓、石棺墓、土壤墓、古墳5基		予備調査 (4,500)	7,170	9,700	4,570		_		昭和48年度に門田 2 号墳の調査を平安 博物館に委嘱	1·3·6 7集
28-31	下原遺跡	11 11	古墳時代:住居跡	2,784									3 集
32	油田遺跡	筑紫郡那珂川町中原	古墳時代:散布地		690								n
32-1	n	, 11 11 11	古墳時代:藝棺墓				300						"
32-2	久 保 遺 跡		<b>繩文,歷史時代:溝状遺構</b>	,					700				
33		春日市上白水	古墳時代:散布地			197							2 集
22 1	原古墳群		円墳3基, 周溝墓8基, 土壙墓4基			1,725	900	1 510		ı			"
33 – 1	原遺跡	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	繩文時代早期,弥生時代甕棺墓				800	1,510				一部保存	
34		筑紫郡那珂川町中原	弥生時代:散布地		135							遺構、遺物なし	
34-1	ala a ser sate mala		#- 1.00 (40 dents)   #4-4-44		267								
34 – 2	、鳥 ノ 巣 遺 跡 !		大土器, 繩文時代: 散布地 	-		288						別府大学に調査委嘱	
35		11 11 11	中世:散布地			200							
36		11 11 11	近世:道標(かんのん道)			_				-			
37, 39 50, 55	井手ノ原遺跡	11 11 11	中世:方形区画遺構,溝状遺構	1,814	1,515	1,500			-			-	2 集
38, 40~43	観音山古墳群 中 原 支 群	11 11 11	古墳31基	707	6,400	220							5 集
43-1					1,840	2,540							
43 – 2	深原遺跡		繩文時代:石組炉跡32基,円形堅穴遺構			104						昭和47年度は別府大学に一部調査委嘱	8集
46-1		••							1,021				
44		11 11 H	中世:散布地		271		-		_				
52		H H H	中世:散布地	-	452								
53		11 11 11	古墳時代:散布地		123						-	遺構なし	
54		11 B H	弥生, 古墳時代: 散布地		150					_			<u> </u>
54-1		11 11 11	古墳時代:散布地			95							_
	L 合		<u> </u>	5,305	14,369	14,829	15,900	7,380	1,721	3,095	1,882		+

- 注 1. 地点番号1,2は北九州市教育委員会、9~17は福岡市教育委員会が調査を担当した。
  2. 路線以外の付帯施設にかかわる調査地点は上表に含めてある。
  3. 面積欄に(一)で示したものは調査面積としてはあげないが当該年度に調査したことを示す。





第 3 図 深 原 遺 跡 地 形 図(1/1,500)

7月18日 午前中は 井手ノ原遺跡の 航空写真撮影のため 清掃 を行なう。 F7・F8区に入る。3層直上より後期の精・粗製土器が多く出土する。

7月22日 古墳群の調査の進行と相まって、D7・D8区を掘り始める。当地区は古墳の密集地で石室・周溝間の調査となった。

7月23日 九州大学の浦田英夫教授に当地域一帯ならびに遺跡の立地に関して地質学的な調査をしていただく。

7月24日 23・26・27号石組炉跡の図面をとる。

7月27日 E8-18区で曽畑式土器が一括出土した。

8月8日 D8-16区周辺に花崗岩の集石がみられたが、遺構とは考えられず、雨水等による流れ込みと考えられた。

8月10日 C8-21区付近4層の遺物密集地を精査した所、円形の竪穴遺構を検出した。北側の一部は23号墳により切られていた。

8月12日 遺跡の全景写真をとる。

8月13日 土層断面図をとる。

8月14日 各遺構の最後の実測・点検を行なう。

8月15日 図面を点検した後、器材の徹収を行ない、調査を終了した。

#### 第43-2地点(昭和49年3月1日~3月8日)

調査地点は深原遺跡をのせる扇状台地が梶原川に接する西端部で、地区はI6区にあたる。

- 3月1日 東西に11m,南北26mで幅2mの直交するトレンチを設定する。
- 3月3日 2・3層の境から縄文時代晩期の遺物出土。
- 3月7日 南北トレンチの北端に時期不明の溝状遺構を検出。遺物は当トレンチの南側にややまとまるが、全体に希薄である。
- 3月8日 全景写真及び全体図・土層断面図を作成し調査を終了する。 遺物の出土状態から して、南側一帯に包含層の可能性が考えられた。

#### 第46-1地点(昭和51年7月12日~9月6日)

当地点は深原遺跡の南端を占めると考えられたもので、車輛基地建設により通行不可能となった林道の回復工事に伴うものである。調査の結果、縄文時代晩期の包含層及び、古墳時代の 溝状遺構、石積遺構と近世の石畳遺構が検出された。

7月12日 調査開始。

7月15日 深原遺跡調査時の方眼杭を設定する。調査区が道路幅に限定され、かつ彎曲しているため、西側から全掘をし始める。

7月27日 H9区で晩期中葉頃の土器が出土する。また、南北に走る溝状遺構を検出した。 8月9日 調査区を東側に拡げる。G9区で蛇絞岩製の石斧出土。

- 8月12日 F9区の4層で縄文後期の遺物出土。G9区では南北走する石畳遺構が検出された。この遺構は丁度、林道に当っており、近世の所産であろう。
  - 8月23日 B9区・D9区にグリッドを設定する。
- 8月25日 B9区で石積遺構が検出されたが層位から古墳時代以降のものである。F9区の 5層から押型文土器が出土し、縄文時代早期の遺跡の拡がりが予想外に台地南端まで延びている事が判明した。
  - 9月1日 石積遺構の実測。当地点では縄文時代の遺物はまったく出土しない。
  - 9月10日 G9区に幅1m, 長さ8mの深層掘りのトレンチを設定し、掘り下げる。
  - 9月11日 G9区で細石刃核出土。
  - 9月13日 先土器時代の包含層は確認できず、土層断面図、全景写真をとる。
  - 9月15日 深原遺跡の南端部を確認する成果をあげ、すべての調査を終了した。

#### Ⅱ 立地と環境

遺跡は筑紫郡那珂川町大字中原字深原に所在する。福岡平野を貫流する那珂川は背振山に源 を発する。

その那珂川の支流である梶原川は炭焼台地と観音山(標高169m)山塊の間に幅500m前後の沖積地を形成する。

一方、花崗岩からなる観音山山塊は長い間の雨水等による侵蝕作用により、北・西麓に土砂を押し出し小規模で、傾斜のある扇状台地を形成していく(註1)。遺跡はこの扇状台地上に立地し、前述した観音山古墳群中原第Ⅲ支群もまた同じ台地上に形成されていた。遺跡全体は当初雑木繁茂し、辛うじて古墳の存在が知られるのみであったが、調査の結果、縄文時代早期~晩期にわたる包含圏の確認と遺構を検出し得た。

標高は観音山の裾部で46m前後、梶原川に接する第43-2 地点側で35mで約10%の勾配度を有している。遺物の出土地点は、標高38m~44mの間に主体的に見られ、特に39.5m~41mの、台地上で最も傾斜のゆるくなる範囲に密集し、石組炉跡等の遺構も検出される。遺跡の限界は北側で中世建物跡が検出された井手ノ原遺跡に接する2列から、南側は観音山北西麓の10列までである。また、時期的には3列から8列の北半で縄文時代早期の遺物が主に出土し、それより南側、及び、道路を狭んだ第43-2 地点では縄文時代後~晩期の遺物が主体になる事が判明し、時期的な占地の有り方が注意される。

新幹線車輛基地建設に伴う埋蔵文化財の調査により, 当春日・那珂川地域の縄文時代の様相

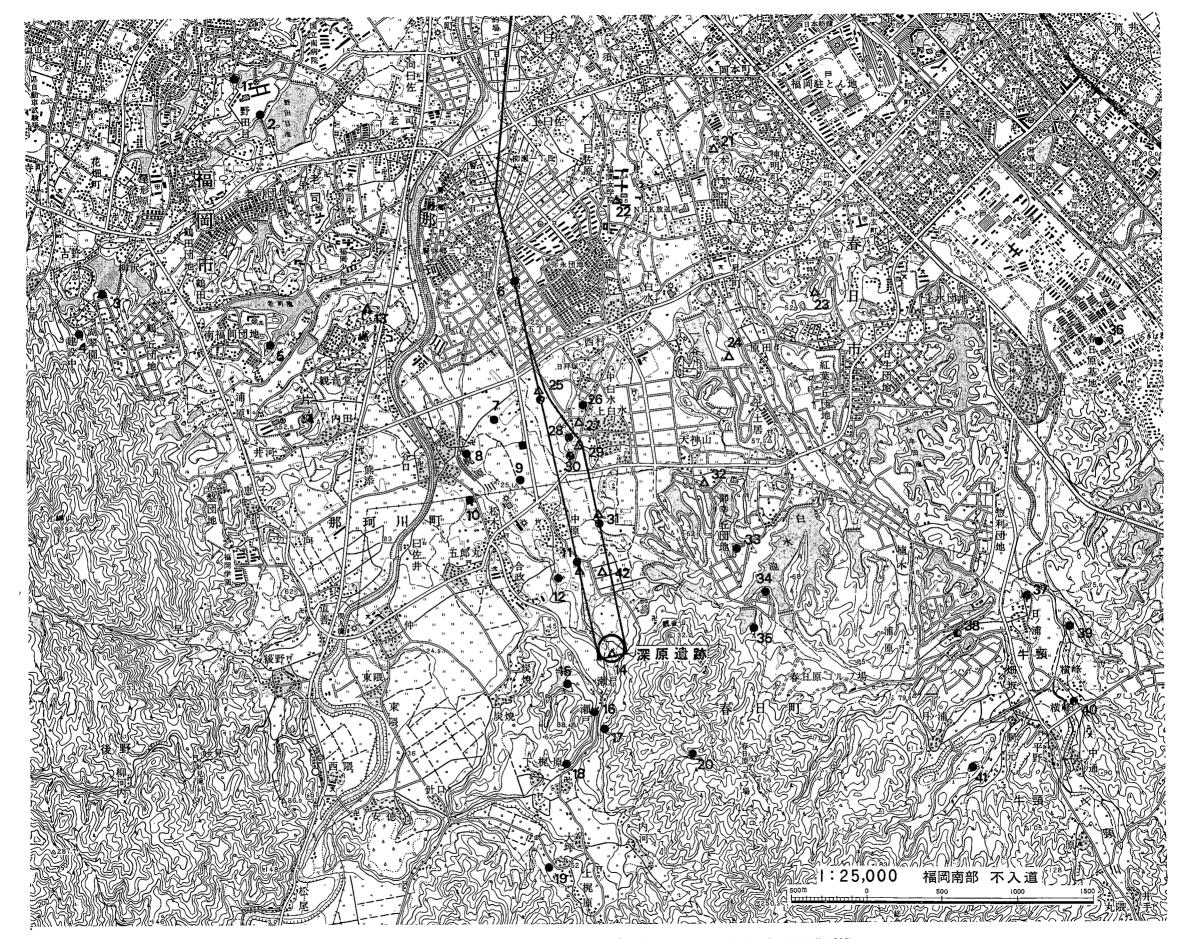


表 2 春日・那珂川地区 先土器・繩文時代遺跡地名表

番号	遺跡名	所 在 地	立地	時期	决 #	山土塘駅。	24-
					遺構	出土遺物	註
$\begin{bmatrix} 1 \\ 2 \end{bmatrix}$	浦 の 池	福岡市南区野多目浦ノ池	池 畔	後期	包含層	土器	3
1	野多目池	男多目池	"	<i>II</i> ⊟ 44.₩0	" "	〃 ・石鏃・石斧・搔器	3
3	箱 の 池  上 を E	ル 柏原・古野	<i>II</i>	早・後期	#/	" " " " ・石匙	3
4	大车田	// 大牟田	丘陵谷	前・晩期	散布地	土器 	3
5	老司池	" 老司・老司池	池畔	前期	"	〃・石鏃	3
6	弥 永	別 弥永町4丁目	微高地	後・晩期	包含地	""・搔器・石錘	4
7	地 余	那珂川町今光・地余	段丘	晚期	"	夜臼式土器	
8	宗 石	"・宗石	微高地	後期	n,	三万田式土器	5
9	中 原	" 中原	段丘	晚 期	"	晚期精製土器	6
10	松ノ木	" 松ノ木・瀬戸口	"	後・晩期	n	南福寺式・黒川式土器	
11	鳥ノ巣第2地点	" 中原・鳥ノ巣	丘 陵	先土器 早・後晩期	pit 群	ナイフ・押型文・土器・ 石匙	7
12	〃 第3地点	" " "	"		散布地	#	
13	野 口	"片繩	"	先土器		ナイフ	8
14	深 原	" 中原・深原	扇状地	早~晚期	石組炉・円 形堅穴遺構	押型文・石器多数	
15	瀬戸第1地点	" 松ノ木・瀬戸	丘 陵	後・晩期	散布地	条痕文土器	9
16	# 第2地点	" " "	"	"	"	11	9
17	〃 第3地点	" " "	"	早 期	包含地	押型文土器	9
18	〃 第4地点	11 11 11	"	"	n	"	9
19	大 坪	" 上梶原・大坪	"		散布地	石鏃	9
20	内 河	" " · 内河	"		"	土器・黒曜石製石鏃	9
21	赤井手	春日市小倉・赤井手	台 地	先 土 器		ナイフ・マイクロブレイド	10
22	曰 佐 原	福岡市南区・日佐原	"	"		ナイフ	3
23	大 谷	春日市小倉・大谷	n	"		マイクロブレイド・フレイク	10
24	一 の 谷	" 下白水・一の谷	"	"		ナイフ・マイクロブレイド	10
25	柏 田	" 上白水・柏田	微高地	先 土 器 後・晩期	住居跡 6 軒 円形遺構	北久根山・夜臼式土器・ 石鏃・石斧・つまみ形石器	11
26	辻 田	" " · 辻田	水 田	晚期	1711/1944	Haw MAIN 2 & 18 MAIN HAIR	12
27	"	11 11 11	n	先 土 器		ナイフ	12
28	門田	" 大字上白水・門田	谷	早·前·後期	包含地	爪形文土器・石鏃・石斧 スクレイパー	13
29	n	n n	台 地	先土器	"	ナイフ・マイクロコア・ マイクロブレイド	13
30	下 原	" " · 下原	段丘			曽畑式土器	13
31	原	" " · 原	台 地	先 土 器 早 期	石組炉	トラピーズ・マイクロブレ イド・押型文土器	14
32	天 神 池 前	" "・天神木	丘 陵	先土器		マイクロコア	9
33	ヒシャテガ池	リ リ	池 畔		散布地	石匙	15
34	白 水 池	・ヒシャテガ池   " ・大堤	"	早·前·後期	"	押型文・曽畑・西平式土 器・石匙	15
35	東 浦 池	" "・東浦池	"	早 期	,,	押型文土器	15
36	春日原基地内	大野城市春日原基地内	台 地	晩 期	,,	土器・石器	16
37	日ノ浦	"牛頸・日ノ浦	丘 陵		,,	石鏃	17
38	下ノ原	" "・下ノ原	微高地		"	"	17
39	花 無 尾	" "・花無尾	丘陵		"	" "	17
40	横 峰	大野城市牛頸・横峰	丘陵		散布地		17
41	胴ノ尤	八野城市十頭・領庫	止 [效		11 11 11		17
42	立石	那珂川町中原・立石	" 台 地	先 土 器	"	ナイフ	18
-14	41	からい 山町 工 小 ・ 五 石	ᆸᄱ	ル上帝		, , ,	10

がある程度判明してきた。その概要については『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第4集にくわしいので反復しないが、立地条件等により小池史哲氏により整理されている(註2)。これらの遺跡のうち、当深原遺跡を始め、門田遺跡、原遺跡、柏田遺跡等主要な遺跡群は、基地建設に伴う調査により破壊を前提とした成果という皮肉な側面を有している。

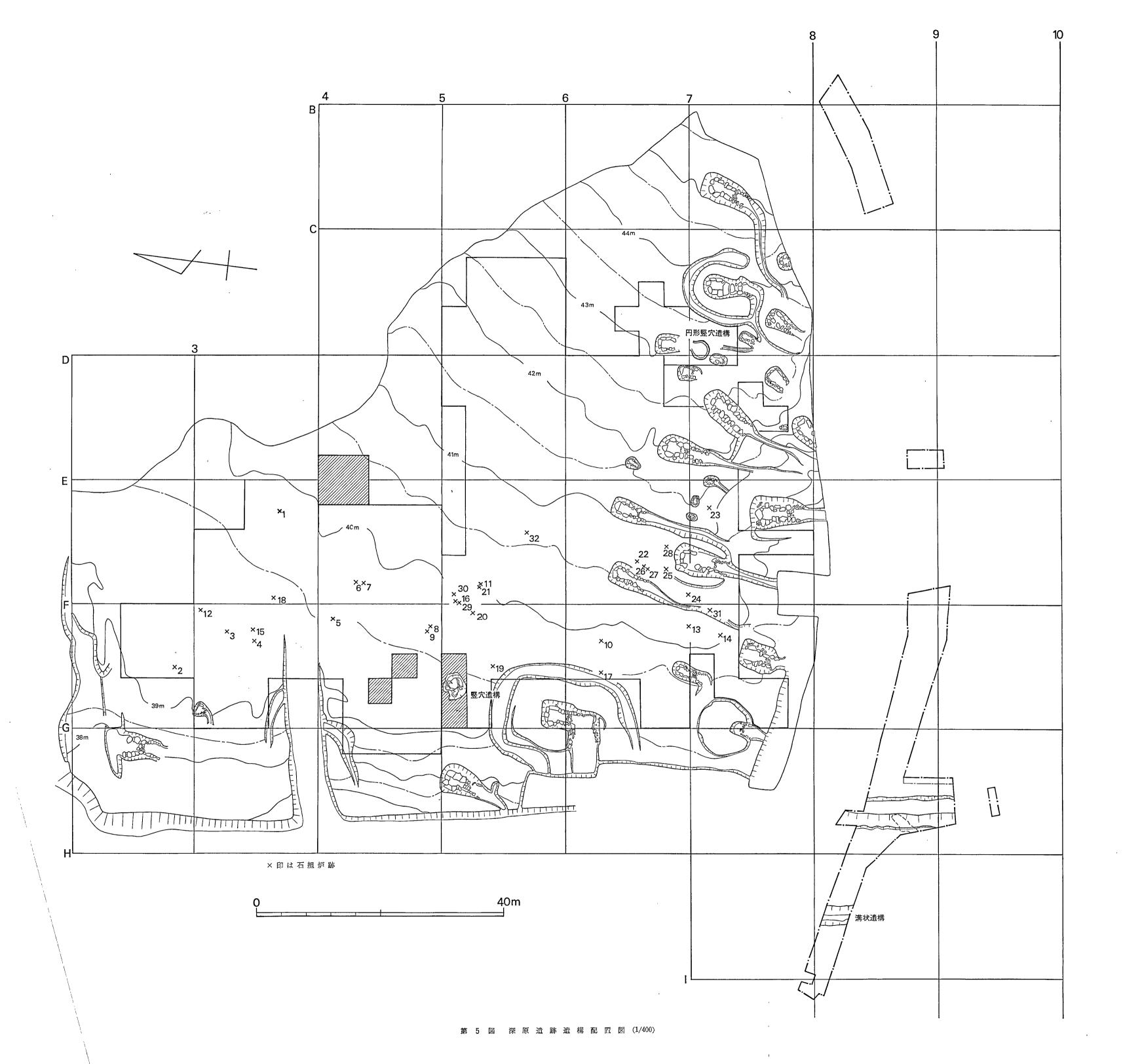
いずれにせよ、 県内でも縄文時代遺跡の密度の高い地域である点から今後の縄文研究の内で 重要な位置を占めよう。

- 註1 九州大学地質学 浦田英夫教授の御教示による。1975年
- 註2 小池史哲「春日市・柏田遺跡の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』4 福岡県教育委員会 1977
- 註 3 福岡市教育委員会編「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表総集編」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』 12 1971
- 註 4 塩屋勝利・折尾学編「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』 32 1973
- 註 5 森田勉氏教示
- 註 6 新原正典氏教示
- 註7 柳田康雄編「昭和48年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」福岡県教育委員会 1975
- 註8 那珂川町教育委員会調査 1978年
- 註 9 獨久嗣郎他編「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」 1 福岡県教育委員会 1976
- 註10 春日市教育委員会調査 1977年
- 註11 小池史哲編「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」 4 福岡県教育委員会 1977
- 註12 木下修編「昭和50,51年度山陽新幹線関係埋蔵文化財関係調査概報」福岡県教育委員会 1978
- 註13 井上裕弘編「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」3 福岡県教育委員会 1977
- 註14 木下修編「昭和49年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」福岡県教育委員会 1975
- 註15 亀井勇氏教示
- 註16 中原志外顕 渡辺正気「福岡県筑紫郡春日町米軍板付基地内出土の縄文土器」『九州考古学』 10 1960
- 註17 福岡県教育委員会編「大野城市遺跡分布図」1973
- 註18 1973年 採集

#### ■調査の概要

#### 1. 区割の設定

前述した通り、当遺跡は観音山古墳群が上部にあり、古墳の調査終了をまって下部調査を行なった。従って、調査区の設定は古墳群の調査方眼杭を援用した。本線センターと平行に20m



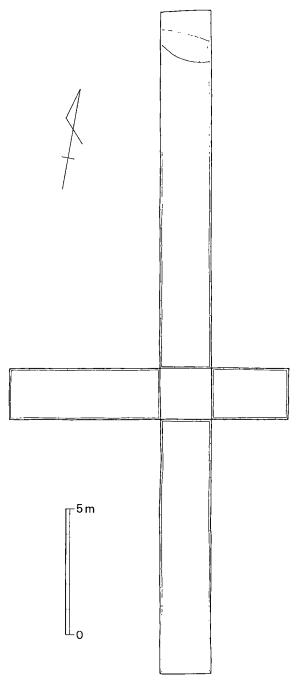
のグリッドを設定し、その内に各 4m の小グリッドを設け、 $1\sim25$ 区に分けた。従って、出土した遺跡遺物については、例えば E4-9 区という様に表現している。

第46-1地点については、このグリッドを延長して調査を行なったが、48年度に行なった第43-2地点については、調査が遺跡の確認という性格を有していたので、当グリッドを用いず、トレンチ掘りを行なっている。

第5図は第43-1地点の遺構配置図で、斜線は別府大学調査地点である。調査区の北端はF3区で遺物の出土状態から、遺跡の北限に近いと考えられ、深原遺跡の北に連なる中世期を主にした井手ノ原遺跡の調査からも裏付けられよう。東側のC6・7区は比較的急な傾斜面で、包含層の状態もあまり良好と言えない。南側は古墳群が密集し、その間を調査している。南東側に後期の遺物の出土が目立った。調査は破壊される地区のほぼ全域に及び、遺跡の大半を調査した事になる。

#### 2. 層 序

古墳群の調査のため、耕作土、黒褐 色土は除去され、存在していないが40 ~50cm程の堆積があった。第8図はF 6-6区の土層図で最も安定した 堆積 状態を示している。第3層は黄褐色土



第6回 第43-2 地点全体図 (1/150)

層で、厚さは30㎝内外。遺跡の南側はバイラン土壌になる。また東側のC6区でも砂粒分を多

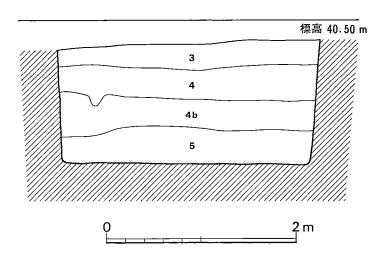
く含み、不安定 な堆積をしてい る。第4層は粘 質を帯び,良く 締った茶褐色土 層で30~40cmの 厚みをもつ。4 b層は部分的に みられる暗黄褐 色土でバイラン F 土を含む。第5 層は,北端F3 区と南端のF G 6・7区にみら れる灰白色の花 崗岩バイラン土 H で当遺跡の成因

C<sup>4</sup> 5 6 7 8

第7図 土層断面位置図(1/1,200)

とも係わり合った土層である。第6層は灰白色粘質土,第7層は鉄分を含んだ黄褐色土でG6区のみにみられる。第8層は暗黄褐色バイラン土層である(付図1)。

第7図は当遺跡の土 層断面図の作成位置を 示し、土層図は付図1 ・2に示した。台地の 成因が観音山山塊への



第 8 図 F 6-6 区土層断面図 (1/40)

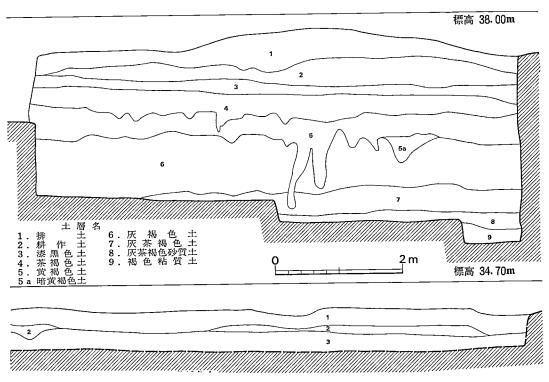
侵蝕作用による扇状台地である点は、第5層以下、第8層からも明らかで、第6、第7層は侵 蝕による土砂の堆積が弱い所、すなわち、「澱」となった所であろう。

遺構及び遺物は3・4層で、3層直上は7・8列を中心に後期の遺物が、9列では(第46-2

地点)晩期の遺物が出土した。 3層の上部~下部にかけては縄文早期後半の押型文土器を主として他に轟・曽畑・手向山・塞ノ神・阿高式等の土器, 黒曜石・安山岩製石器が出土した。遺構としては石組炉跡を検出している。 4層は縄文早期の単純層をなしており, やはり石組炉跡や円形竪穴遺構が検出された。5層以下はまったくの無遺物層であった。3・4層に先土器時代の所産であるナイフ形石器や細石刃核が粉れ込んでいたが下層に生活面は確認出来なかった。

第9図上は遺跡南端にあたるG9・10区にまたがる土層堆積を示している。層序は9枚まで観察された。5層で後期及び晩期の土器が出土し、それ以下9層までは曽畑式土器・押型文土器が出土した。土層の堆積は不安定で遺物の混在する事もあった。土層の色調は第7図F6-6区と比べまったく異なっており、押型文土器を出土した $6\sim9$ 層が、第7図の3層すべてに対比出来る。なお、5層上部で、半舟底型の細石刃核が出土している。

一方, 第9図下は遺跡の西端, 第43-2地点の土層断面図で3枚の層序が確認出来た。3層の黄褐色土が遺物包含層で,後期~晩期の土器が若干出土した。土層は第7図の3層に比べ,やや灰色がかり,また粘質である。同種の遺物を出土する7・8列の3層直上とされる土層は,E・F区ではバイラン土壌であり,3層出土の遺物に大きな時間差があるのに層位的には明確



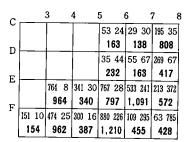
土層名 1. 耕 作 土 2. 黄褐色土 3. 黄褐色土 第 9 図 G 9・10区, 第43-2 図地点土層断面図 (1/60)

に分離されていない。扇状台地という遺跡立地の土層堆積の複雑さを示している。

#### 3. 遺物の出土状態

調査は各グリッド毎に分層発掘を行なった。縄文時代の包含層は $3\cdot4$ 層の2枚で, $7\cdot8$ 列の2層の暗茶褐色土からも後期の遺物が出土している。調査当初は各グリッド別に遺物の出土状態を1/50で記録していたが,遺跡の規模がきわめて広く,かつ,調査期間の関係で挫折せざるを得なかった。

出土した 土器片は グリッド内総数 9,237 点の 多くを 数 え, これに第43-2, 第46-2 地点の分を合せると優に 1 万 点を越える。また, 石器も 10,461点を数える。地区別の出土量は第10図に示した。 土器では早期~前期が E 6 区 767 点, F 6 区 880 点, E 4 区 764 点と他地点と比べてきわだって多い。 E 4 区では早・前期764点に対し, 後期の土器が 8 点, 同様に E 5 区で341-30, E 6 区で767-28, F 列では 3 区で151-10, 4 区で474-25, 5 区で300-16点と早・前期の土器が大部分を占めている。一方, E 7 区にな



※左が早~中期,右が後・晩期, 土器破片数 ゴジックは石器出土量

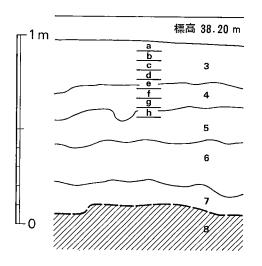
第10図 グリッド別遺物出土量

ると241点,同 8 区で372点, F 7 区で295点,同 8 区で785点と後・晩期の土器が早期の土器を圧倒する出土量を占める様になる。 特に F 8 区で63—785 ときわだっている。 また,中期に編年される阿高式土器は E 7 区の 3 層上部からまとまって出土している。 従って, 7 列を境にし

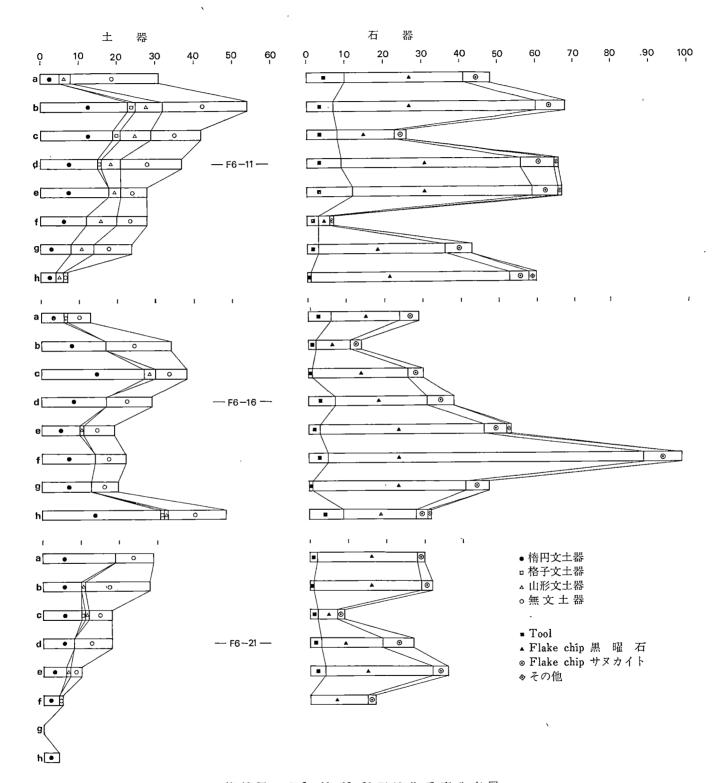
て北側が早期・南側に後期の居住の中心があった事は疑いなく、時期的な占地の有り方が注目される。この点は後期にその出土の中心をもつ、刃器・つまみ形石器の出土状態(第99図)からも是定されよう。

## F 6-11・16・21区の 遺物出土状態 について

この調査区では 1・2 層が既に 削平されて おり、第3 層の黄褐色土層が全面に拡がり、 しかも遺物の一部が表面に露出していた。 3 層の上面から5 cm毎に分層発掘を実施し、出 土遺物の全てを平面図に記録して遺物の平面 分布および垂直分布を観察することにした。



第11図 F 6 -16区土層断面と分層発掘の関係図 (1/20)



第 12 図 F 6-11·16·21 区 遺 物 垂 直 分 布 図

5cmの厚さで全面を均等に掘り進めるため、 $4m^2$ の1グリッド内の四隅 および中央で常にレベルを計りながらできるだけ正確に5cm毎の深さを確保するように努めた。

3層の厚さは25cm前後をほぼ保っており、 $3a\sim3$ e と 5層に区分され、幾分浅い個所では 3e の途中で、やや茶色味をおびる 4層へと漸次移行している。そこで 3f • 3g • 3h は土層堆積の層序区分からすれば、4層のほぼ上半部に相当することになる。

F  $6-11\cdot 16\cdot 21$ の三グリッド内より出土した遺物の総数は土器片が約600点、石器・剝片が950点余である。

3層内の5cm毎の垂直分布では、土器は3b層が量的に最も多く、次いで3c層、3d層、3a層、3e層の順となっており、 $3f \cdot 3g \cdot 3h$ の各層はいずれも3b層のほぼ半分の量である。一方、石器類は3e層にピークが見られ、 $3d \cdot 3f$  層と続いており、土器とは異なった出土頻度を示している。

土器文様別での各層における出土状態では、各層とも楕円文の押型文土器が優位を保っており、当調査区の文化層の土器は無文土器よりも有文がまさり、しかも楕円押型文が主体を占めていることになる。山形の押型文土器は F 6-11では 3 a 層より 3 h 層まで僅少ながらほぼ一定の割合で認められる。一方、F 6-16はさらに少量で、3 c・3 e・3 h 層においてのみ出土している。調査面積や土器の出土数が限られているため全体的な傾向にとどまるが、層位による文様別出土数やその間の頻度に変化は抽出されないようである。ただ楕円押型文土器の口縁部では、内面に沈線文の施されたものが、相対的に 3 層の上部により顕著に認められる。また楕円・山形などの押型文土器と無文土器の量的な関係は先に述べる通り、3 a 層をのぞき押型文土器が勝っており、このあり方は全体的に下層になるほど若干であるが増加の傾向をたどっている。

石器と剝片の割合は各層において必ずしも一様でなく,両者の出土数もグリッドによって,また層によって変化が見られる。 F 6 –11 の石器は 3 a 層より 3 e 層までほぼ同じ数出土しているが, 3 f 層以下では減少している。 しかし, F 6 –16では 3 f 層に最も多く出土しているのである。

F6 –11		21
Α	· Δ Δ <sub>Δ3</sub>	△ 土器 △ □ 石器
$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	Φ4	Δ9
B	. Δ	$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$

	F 6	- 11	F 6 -16	F 6 - 21						
а	P1 楕円口線近 474 2 n 胴部 3 n 底部近 4 山形胴部 5 楕円胴部 6 n 口縁	S1 刃 器 ob 2 石 鏃 " 3 刃 器 " 4 スクレイバー an 5 二次加工 ob 6 彫 器 an 7 石 鏃 ob 8 U. F "	P1 楕円胴部 2 格子 n 3 楕円口緑近 4 n 胴部 5 無文 S1 石 鏃 ob 2 U. F n 3 スクレイパー an 4 石 鏃 ob 164 5 m n	P1 楕円 口縁近 2 無文 口緑 3 川 胴部 4 楕円 川 5 川 川 6 川 川 7 川 川 8 川 川 9 塞ノ神(?) 川						
Ъ	P1 格子 胴部 2 山形 口緑 165 3 楕円 胴部 4 山形 " 5 楕円 "	S1 U.F ob 2 スクレイパー an 3 石 鏃 ob 4 U.F n 5 石 鏃 n 6 n n 7 n n	P1 楕円 胴部 S1 F. L ob 2 無文 " 2 U. F " 3 " "	P1 楕円 胴部 2 無文 " 3 " " 4 " 口禄 5 楕円 " 476 6 " 胴部 7 無文 "						

※一番最後に記してある番号は掲載した遺物番号に等しい。

第 13 図 F 6 —11·16·21区, 3 a · 3 b 層遺物出土状態 (1/80)

F6 -11	16	21
C <sup>Δ1</sup> . <sup>Δ9</sup> Δ. Δ8	48	•
Δ2 •4	<u>.</u>	Δ 3ΔΔ Δ2 ΔΔ .
Δ3	Δ <sub>3</sub> <sup>Δ</sup> Δ2 Δ1 Δ1	. Δ Δ Δ Δ Δ Δ Δ Δ Δ Δ Δ Δ Δ Δ Δ Δ Δ Δ Δ
Δ Δ11 •8 Δ Δ Δ10 Δ Δ Δ5 Δ10	ΔΕ , Δ10 , Δ3	•
•3	Δ11 Δ4	Δ
D	•3  •4 2401  •4 4 40	· •
· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	Δ	Δ Δ • • • • • • • • • • • • • • • • • •
Δ7 Δ Δ Φ5 . Δ 1		Δ •3
Δ Δ4 .	Δ <sub>97</sub> <sup>98</sup>	
Δ Δ Δ1 .	•6	Δ

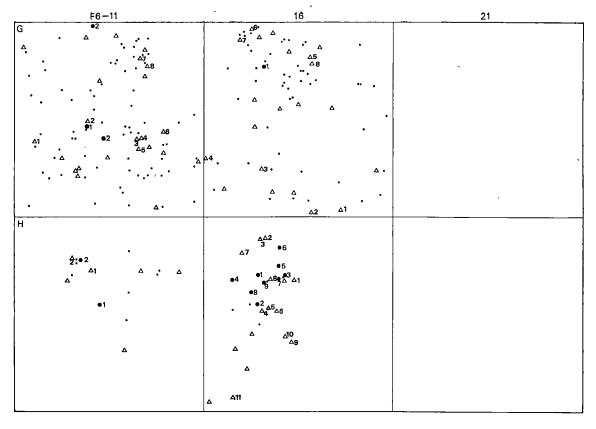
	F 6 - 11	F 6 - 16	F 6 - 21
c	P1 楕円口線     S1 スクレイパー an       2 山形胴部     3	P1 楕円胴部 2 " " 3 " " 4 " " 5 " 口縁近 6 無文 " 7 " " 8 " " 9 格子 " 10 楕円 " 11 " "	P1 格子状胴部 の洗線 2 楕円胴部 3 無文底部 4 楕円胴部
đ	P1 格子胴部     S1 U. F     ob       2 楕円 "     3 " "     an       4 " "     4 " "       5 " 口縁 222     5 二次加工 ob       6 " 胴部     6 " "       7 " " "     7 石 錐 "       8 山形 "	P1 楕円胴部 414     S1 F. L ob       2 n 口縁近     2 U. F n       3 無文底部近     3 刃 器 n       4 楕円口縁     4 二次加工 n       5 n     n       6 U. F n     7 石 錐 n       8 石 鏃 n	P1 格子状胴部 の沈線 2 楕円胴部 3 " " 101 3 " " 4 スクレイパー an 5 石 鏃 ob 91 6 U. F ob

第 14 図 F 6-11·16·21区, 3 c · 3 d 層遺物出土状態 (1/80)

F6-11	16	21
Ε Δ2 . Δ3	Δ1 Δ5 Δ5 Δ3	
•11 . Δ•3 •Δ Δ Δ . Δ Δ6 Δ	Δ	Δ Δ •1 ΔΔ Δ · · · · · · · · · · · · · · · · ·
•9 Δ Δ Δ5 · Δ4 · Δ4 · Δ4 · Δ4 · Δ4 · Δ4 ·		<u>.</u>
· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		<sup>1</sup> · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
	Δ· <sub>Δ</sub>	·
· ·	Δ	•

	F 6 - 11									F 6 - 16								F 6 - 21				
е		楕円		2	石	器 鏃 レイパー	ob "		2	楕円 条痕(		2	U. 石	鏃	ob "					2	石鏃 "	"
	4	))  }	)) ]]	1			"	368	4	無文	" "	3	411	1(?)7	匕岡名	6				3 4	" "	"
	5 6	n n	11	6 7 8 9 10 11 12	先えび石二ス石	, 状パF 鉄加パ 鉄L器ー	an ob "		5	n	n											
f	2 3	楕円 第 無 大 精円	口縁 胴部	2	石 /		ob # #		2	山形」 無文 パ 楕円	"	2 3 4	ħ	, マカロコ ,	"	英	2 3	無文 精円 塞ノ 精円	"			

第 15 図 F 6-11·16·21区, 3 e · 3 f 層遺物出土状態 (1/80)



	F 6 - 11	F 6 - 16	F 6 - 21
g	P1 楕円 胴部 2 山形 " 3 " " 3 別 " 3 別 器 an 4 楕円 " 5 " " 6 山形 " 7 楕円 " 8 " 口縁 9 山形 胴部	P1 椿円 口縁 S1 原 石 ob 2 n 胴部 3 n 口縁 4 n 底部近 5 n 胴部 6 n n 7 n 口縁 214 8 n (?)口縁近	
h	P1 楕円 胴部 2 楕円 口緑 2 石 鉄 ob	P1 楕円 胴部 S1 石 鏃 ob 2 n n an 3 格子 n ob 4 楕円 n	

第 16 図 F 6-11·16·21区, 3 g·3 h 層遺物出土状態

一方、石器・剝片の各層毎の出土総数は、F6-11では $3a\cdot3b$ 、 $3d\cdot3e$ 、 $3g\cdot3h$  層の三つにピークが見られるのに対し、F6-16は3f 層に最大値が認められる。

以上の様に、  $F6-11\cdot 16\cdot 21$ における 5cm 毎の遺物の垂直分布を眺めた時、 土器・石器類共に各グリッドにおける垂直分布の最大値は一様でなく、 その曲線のカーブも異なっている。 垂直分布のあり方から生活面を推定する一つの方法が旧石器時代の研究で試みられており、 今後縄文時代の調査においても一つの問題として行なわれる必要があろう。

平面的な遺物の分布状態では  $4m^2$  の各グリッドとも 3 a 層から 3 e 層までは ほぼ全体的な拡がりをみせ、特に集中する地点や逆に希薄な地点は見られないようである。 ただ 3 f 層から 3 h 層では、 F 6 -11 と F 6 -16 の境において出土遺物の希薄な部分が認められ、 この地点は竪穴遺構の中央部に 位置している。 また西側のグリッドである F 6 -21 の 3 f 層以下では極端に散発的になり、 1 点も出土していない層もみられる。

# Ⅳ 縄文時代の遺構と遺物

# 1. 遺構と遺物

検出された遺構は石組炉跡32,円形竪穴遺構1,竪穴遺構1,ピット状遺構1である。時期は竪穴遺構を除いていずれも押型文土器を出土するところから縄文時代早期後半であり、層位に上下関係がある。

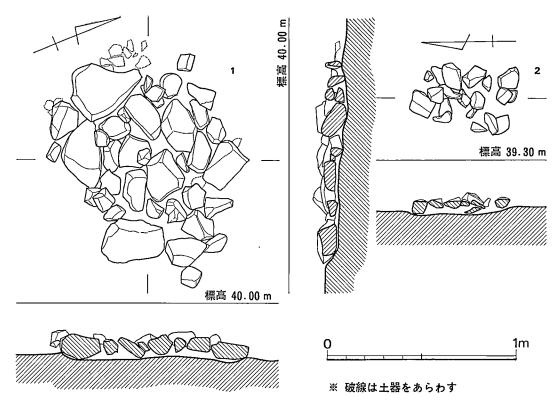
石組炉跡は32基検出された。地点ではE6・E7区が最も多く6基,次いでF4区の4基でこの3地点で16基と半数を占める。層位的には3層に24基,4層に6基である。これら石組炉には層位的な形態差が認められる。また,石組炉跡の分布状態を見ると,標高で39m~41m間に納まる。第5図をみると,この間が当該遺跡をのせる扇状台地上で最も緩斜面を有している事が判る。この炉跡周囲の遺物出土状態からして,当然炉を中心とした居住が考えられるが,住居跡の掘り込み面,柱穴等の存在は確認できなかった。

一方, C8区で検出された円形竪穴遺構, F5区の竪穴遺構は明瞭に掘り込み面を有しており, E6区のピット状遺構には焼土・炭化物が認められた。

土器の出土状態から台地南半部の3層直上は後期の遺物が多量に出土したが、遺構は認められなかった。なお、当遺跡の西端側(車輛基地外だが地形的には当遺跡に包含される。)にて後期後半頃の住居跡1軒が確認された(註1)。

#### (1) 石 組 炉 跡

**1号石組炉跡(**図版15,第17図) E 4 -9区の3層上部に検出された。東西1.2m,南北0.9



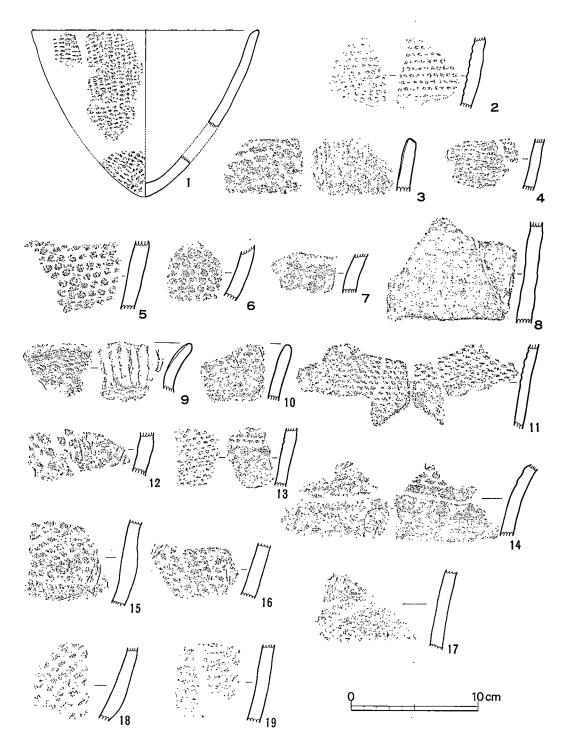
第 17 図 1 · 2 号石組炉跡実測図 (1/20)

mの長円形を呈す。周囲に30cm前後の他に比して大形の花崗岩を配し、内側は一回り小さく、ややかどのある石材を用いる。炉跡の掘り込みはほとんどなく、平面状に石を配した状況である。石材は若干焼けて、赤く脆くなっている。底面のレベルは39.70m。

炉跡の周囲及び炉内に押型文土器(第17図1), 石鏃が出土した。 この炉跡の周囲には黒色 土の入ったピットが存在するが,当遺構には伴なわず,古墳時代以降のものである。

土 器(第18図1~8) 楕円押型文土器と無文土器が出土した。 1 は胴部を欠損するが復原すると口径18cm, 器高13.1cmを測る。尖った底部から胴部やや内彎ぎみに立ちあがり,口縁部の直口する小型の深鉢形土器で,口唇部は内面に斜行する。原体の楕円粒は長さ5 mmと細かく端正に全外面に施文されている。内外面とも灰褐色を呈し硬質の土器である。 2 は内面にも同一原体を施文し,3 は外面に径1 cm以上と粗大な楕円文を,内面には口唇部から縦方向への沈線がみられる。 4~6 は胴部破片である。 7・8 は器肉1 cm内外と厚手の無文土器の胴部破片で,8 の外面は指あてによる調整が著しい。

**2号石組炉跡**(図版16-1, 第17図) F 3-15区, 3層中部に検出された。石組炉跡では最も北側に位置する。炉底面のレベルは 39.05m を測る。20数個の挙大の石を配したもので, 東

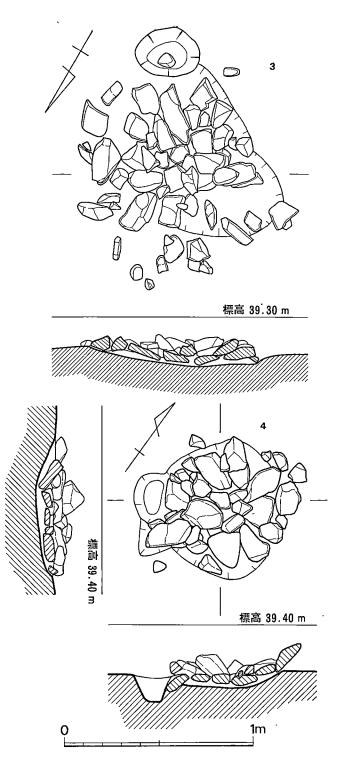


第 18 図 1・4・11・18・19号石組炉跡出土土器拓影 (1/3)

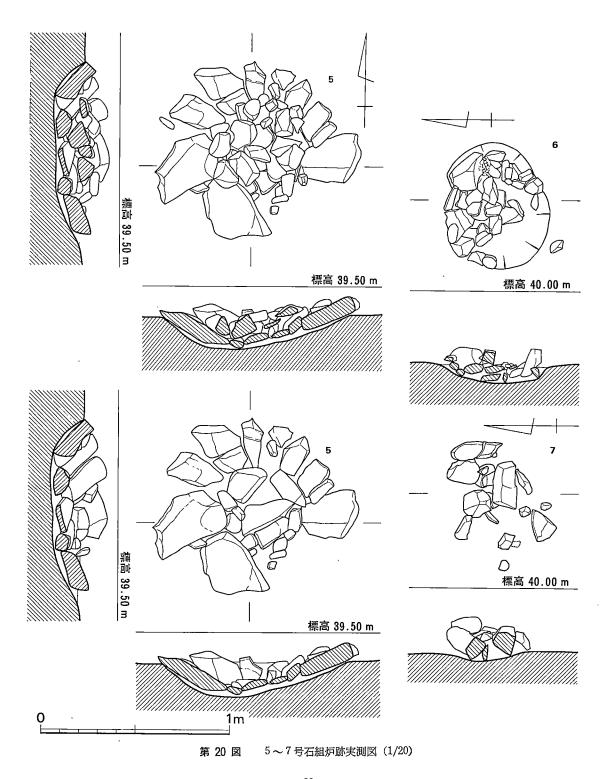
西55cm,南北35cmの不整形で掘り込みは浅く,平坦に並べた状態である。礫は火を受けて脆いものもある。

3号石組炉跡(図版16-2、第19図) F4-7区、3層下部に検出された。南側は完存しているが、北側は礫がかなり乱れており破壊されていると思われる。径90㎝前後の円形を呈し、浅いU字状の掘り込みを持ち、扁平な石材を底面に配す。形態的には5号石組炉に類似する。炉跡の南側にピットがあるが、この炉跡には伴なわない。礫はあまり熱を受けていない。

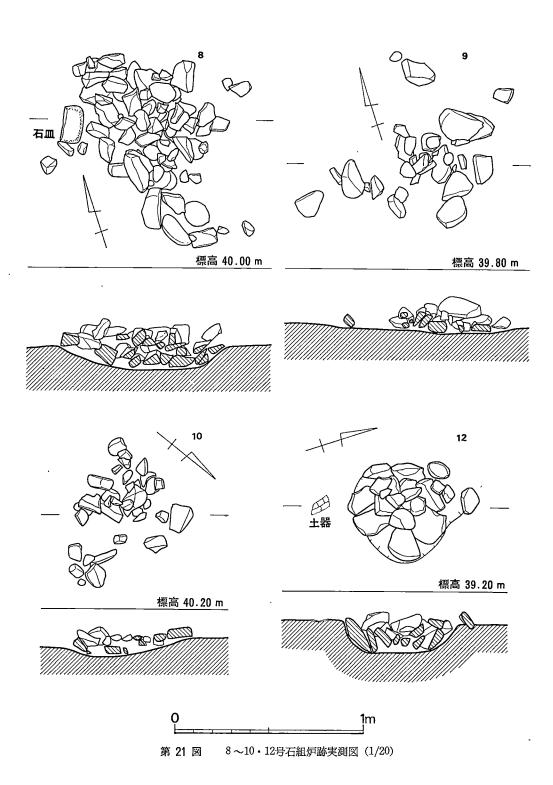
4号石組炉跡(図版17,第 19図) F 4-8区, 3層中部 で検出された炉跡で南西側の 一部が後世のピットにより破 壊されているが径75cmとほぼ 円形を呈す。浅い皿状の掘り 方に沿って扁平な石材を配し, 内側には周囲より若干小さく, 角のある石がつまっている。 炉内の石は焼けているものが 多い。底面は平坦で断面では 5 石認められ、炉深は16cmを 測る。調査の初期にあって石 組の性格付けの目安となった もので, 炉内には炭化物・焼 土は認められなかった。



第 19 図 3・4号石組炉跡実測図 (1/20)



**—** 22 —



— 23 —

土 器 (第18図 9・10) 9 は山形押型文の口縁部破片で、大きく外反する。外面は 波長 1.2cm の山形押型文が横方向に口唇部直下から施文され、内面には縦方向の沈線が走る。 10は 粒の大きな楕円押型文で、胎土に小礫を多く含み脆い。

**5号石組炉跡**(図版18, 第20図) F 5-1区, 3 層上部で検出された炉跡である。形態的に最も優れた遺構で,調査当初は墓の可能性も捨て切れなかった。炉内には挙大の石が全体に投げ込まれた状態で堆積している。石は4号炉と同様に角のあるものが多い。

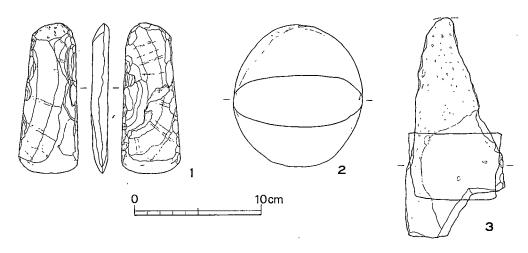
炉は東西1.1m, 南北0.9mの花弁状を呈し, 南側の一部を欠くが, 両隣の石からして30cm前後の一石と考えられる。 周壁石より小振り石を用いた底面は, 東側に高く, 地山の傾斜に沿っている。底面から周壁への傾斜は約20~30度で炉深は20cm内外である。

**6号石組炉跡**(図版19-1,第20図) E 5-22区,3 層中部に検出された小型の炉跡である。 南半部,全体の1/3を欠損し,径は60cm前後を測る。炉石は挙大の石をうまく浅いU字状に配 す。炉内の石は熱を受け,赤く脆い。炉内及び周辺に楕円・山形押型文土器の出土を見る。

**7号石組炉跡**(図版19-2, 第20図) 6号石組炉の南に接して、3層中部に検出された。破壊された炉跡で、形態は不明である。楕円押型文土器が出土している。

**8号石組炉跡**(図版20,第21図) F5-5区,3層下部に検出された。不整形の炉跡で,用いられた石は挙大のものが大部分である。炉底面は東側は整っているが西側は不揃いである。炉の西側に硬砂岩製の石皿(第115図463)が出土した。

**9号石組炉跡**(図版20-2, 第21図) F 5-10区, 3層下部に検出された遺構で, 破壊された炉跡であろう。この炉跡の東側にも花崗岩の石材が散乱しており, 炉跡の可能性がある。なお, 炉南側に, 石斧(第22図1), 磨石(同, 2), 石皿(同, 3)が纏まって出土した。

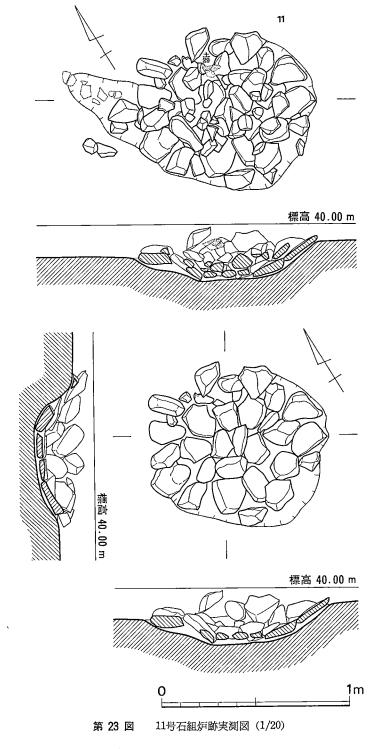


第22図 9号石組炉跡出土石器実測図(1/3)

石 器 (第22図1~ 3) 3点まとまって 出土した。1は硬砂岩 製の刃部磨製石斧の完 形品。全長11.8cm, 頭 部幅3.1cm, 刃部幅4.5 cm, 厚さ1.3cmを測る。 全体のプロポーション は短冊型を呈す。研磨 は刃部の他に体部及び 側面、頭部にみられる。 類例が389にみられる。 2はほぼ円形を呈す完 形品の磨石で,厚さ 4.4cm と比較的薄手で ある。全面に磨痕をと どめる。硬砂岩製。3 は花崗岩質の石皿片と 考えられる。破片で, 中央部のみが磨かれて おり、若干へこんでい る。厚さ5.1cm。

10号石組炉跡 (第21 図) F7-7区, 3層 上部に検出された。浅 い掘り込みに挙より小 さめの石が認められた もので、破壊され炉内 の石だけが残ったもっ と思われる。北半の二 石は熱を受けた痕跡を 有す。

11号石組炉跡(図版



 $(21\sim23)$ 、第23図)  $(21\sim23)$   $(21\sim23$ 

この炉跡の西側に径30cm, 深さ41cmのピット(第33図)が見られ,周囲は焼け,内には焼土と炭化物の堆積がみられた。また,周囲は押型文土器,無文土器,その他石鏃,スクレイパー,フレイク,チップ類が多量に出土(図版21)し,地山も他に比べ固く締まる点,炉跡を中心とした生活の痕跡が確認出来たが、住居の掘り込み、柱穴等は判らなかった。この点は当遺跡全体に言える事であるが、遺跡が扇状台地上にあり、雨水等による土層の流出が激しい事と無関係ではない。なお、炉内より押型文土器が出土した。

土 器 (第18図11) 内外面とも同一原体を用いて、横方向に施文した楕円押型文土器で、口縁部直下の破片。口縁部で軽く外反する深鉢であろう。外面黄褐色、内面は灰赤褐色を呈し、器面は風化している。

**12号石組炉跡**(図版24-1,第21図) F 4-1区,3 層下部に検出された。北側に浅いピットを有するもので,径55cmと小振りで,ほぼ円形の炉内に,石が投げ込まれた状態を呈す。炉は 周壁を $50\sim60$ 度近く立てており,形態的に前出の $5\cdot11$ 号等とは異なる。また底面に石を配さない点も相違している。炉高は22cmを測る。炉石はあまり熱を受けた痕跡は見られない。南側に押型文土器(900)が出土している。

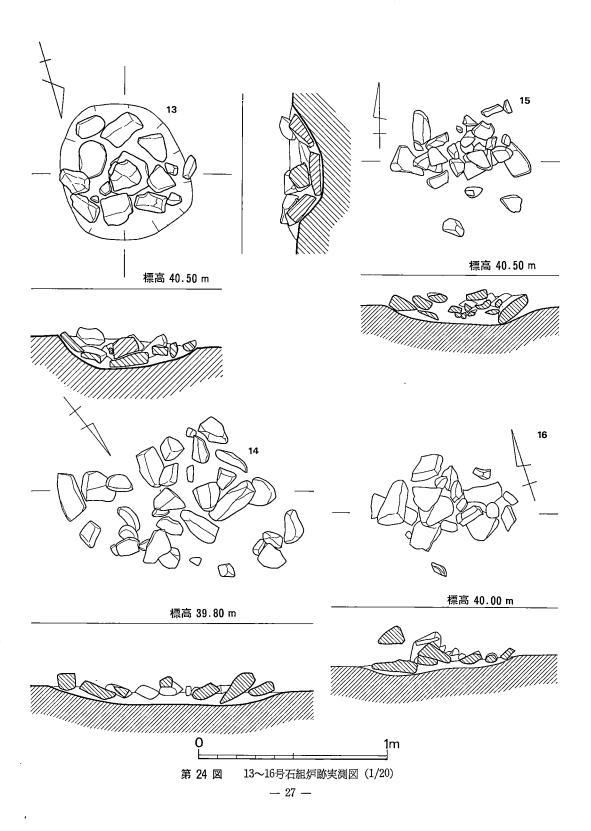
**13号石組炉跡**(図版24-2、第24図) F7-5区、3 層上部中に検出された。浅い掘り込み内に築かれた炉跡で東南側の一石を欠くものと思われる。 周壁をゆるく傾斜させ、 形態的には $4\cdot5$  号炉に近いが小型である。炉内には石がほとんど見られない。長径65cm程である。

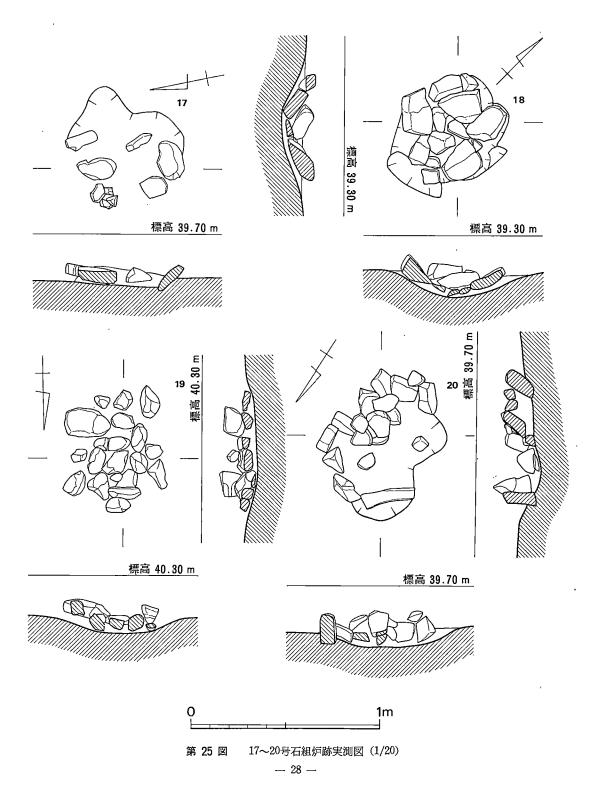
**14号石組炉跡**(図版25-1,第24図) F 8-7区と石組炉群では最も南端に位置し, 3 層上部で検出された。 $1.3m \times 0.8m$  間に石が不揃いに並んだもので,周壁と考えられる石が傾斜しているので炉跡とした。時期的には後期の遺物が早期より多く出土しており,前号までの炉跡とは異なる可能性を持っているが,後期という決め手もない。

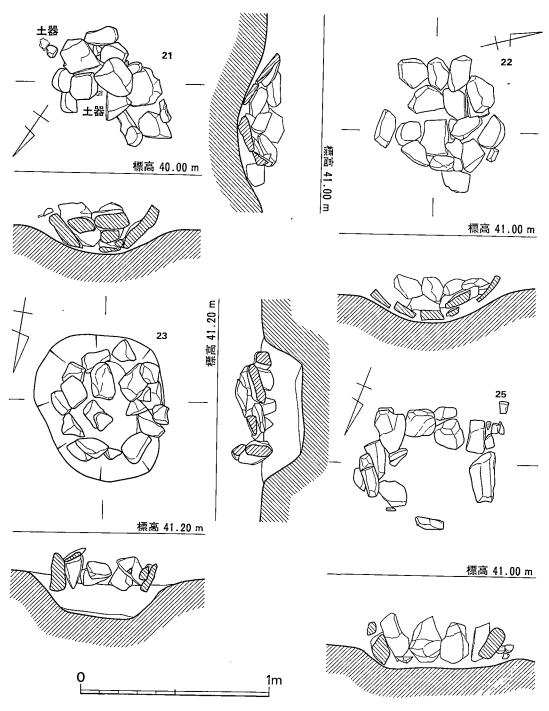
15号石組炉跡(第24図) 4号炉の東側でF4-8区、3層下部に検出された。東西の比較的大がらな石を切った断面からして、この二石が炉の周壁になると考えられる。現状では横に長いものであるが、東西二石間約75㎝の円形を呈するものであろう。底面石がない点、5号炉等と異なる。

**16号石組炉跡**(図版25-2, 第24図)  $\to$  6-21区, 3層面中に検出された。  $\to$  1・9号炉と同様に掘り込みをもたない炉で、平坦に石を配している。炉底面は標高39.70mを測る。

**17号石組炉跡**(図版26-1,第25図) F 7 -12区, 観音山古墳群 6 号墳の 東側周溝によって







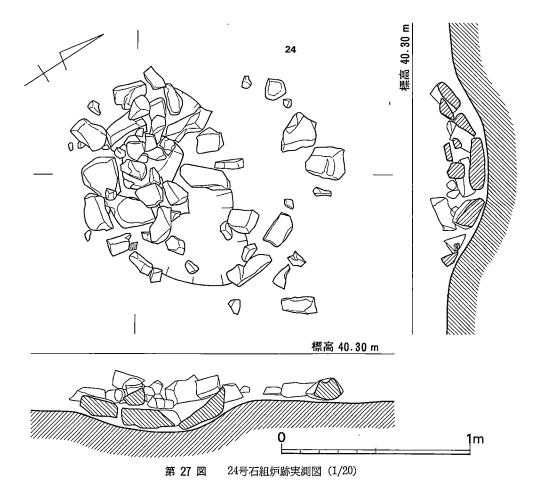
第 26 図 21~23・25号石組炉跡実測図 (1/20)

破壊された炉跡で、3層上部に検出された。南側の一石から、ゆるく周壁の立つ形態の炉であるが、規模については不明。

**18号石組炉跡** (図版26-2, 第25図)  $\to$   $\to$  4 層中に検出された。  $\to$  5 -1  $\to$  5 号炉を半分に縮めたような炉で、花弁状の美しいものである。径55cm の円形を呈し、周壁は厚さ 5 ~10cm程で、20cm 前後の石を 4 枚配し、その間及び底面には小振りの石を置いて築く。炉内には他の炉で観察されたように挙大の熱を受けた石があった。

土 器 (第18図12~18) 12は粒の大きな楕円押型文の胴部破片。13・14は内・外面とも同一原体を施文したもので口縁部近くの破片である。15・18 は楕円押型文の 底部付近にあたろう。

**19号石組炉跡**(図版27-1,第25図)  $F_6$ -13区, 3 層下部に検出された。 当遺跡の炉内では最も顕著に熱を受けた事が判る遺構である。ほぼ平坦に断面石が並んだ状態であるが,この



**— 30 —** 

周囲には炉石と思われる石材が散乱していた所から破壊を受けていると考えられる。 なお, この炉底石間に少量の炭化物が認められた。

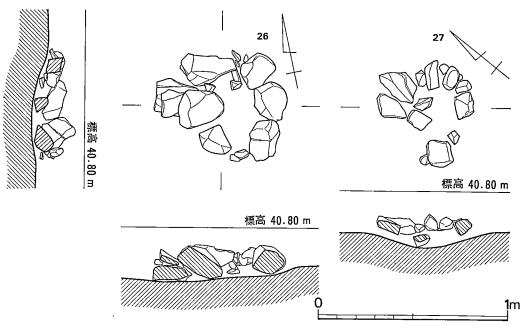
土 器 (第18図19) 施文のくずれた楕円押型文土器の胴部破片で、赤褐色を呈し、胎土に 多くの砂粒を含む。

**20号石組炉跡**(図版27-2, 第25図) F6-2区, 4層中部に検出された。西過半に石を欠き,一見すると西方向に開いた炉の感じを受ける。周壁の石がほぼ直に近く立っ点がこの炉の特色で,3層下部から4層にかけてこの種の形態を持つものが多くなる。径は南北方向で80cmを測る。

**21号石組炉跡**(図版28-1,第26図)  $\to$  6-22区,4層中部に検出された。4層上部で検出した11号炉の西側下部にあたる。周壁が50度ときつく傾斜し,炉内には部厚な石が投入されていた。プランは北側が不完全ではあるが60cm前後の円形を呈すと考えられ,炉深は23cmで,断面は逆台形状である。炉周辺の土は黒ずんでおり,押型文土器が多く出土した。

**22号石組炉跡**(図版28-2, 第26図) E 7-18区, 3層下部を切り込んで検出された。 炉石は扁平な花崗岩で、 断面はやや深めのすり 鉢状を呈す。 炉石は全体的に熱を受け、 脆弱である。 周壁は北に高く、 平面はほぼ70㎝の円形に近い、 炉深は17㎝ 前後を測る。 炉を構成する石材はほぼ均等なものを選んでいる。 炉底面の標高40.60mを測る。

**23号石組炉跡**(図版29-1, 第26図) E 8-6区と最も北側で、観音山古墳12号墳北側周溝下



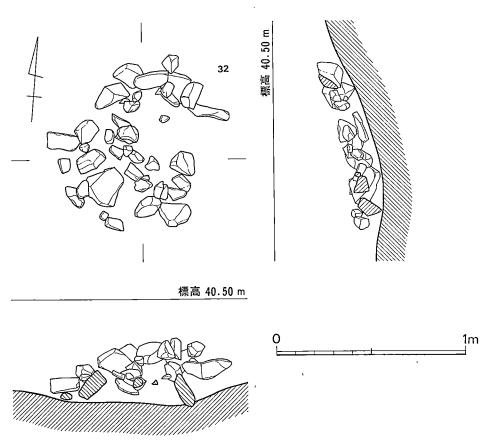
第 28 図 26・27号石組炉跡実測図 (1/20)

の3層中部に検出された。掘方が明瞭な炉跡で、平面プランは南北75cm、東西70cmの長円形を 呈す。周壁はほぼ90度近くに直立するもので、炉底面の石はない。炉石は部分的に赤燈色を呈 し、炉内覆土は砂質の黒色系の土が埋まっていた。

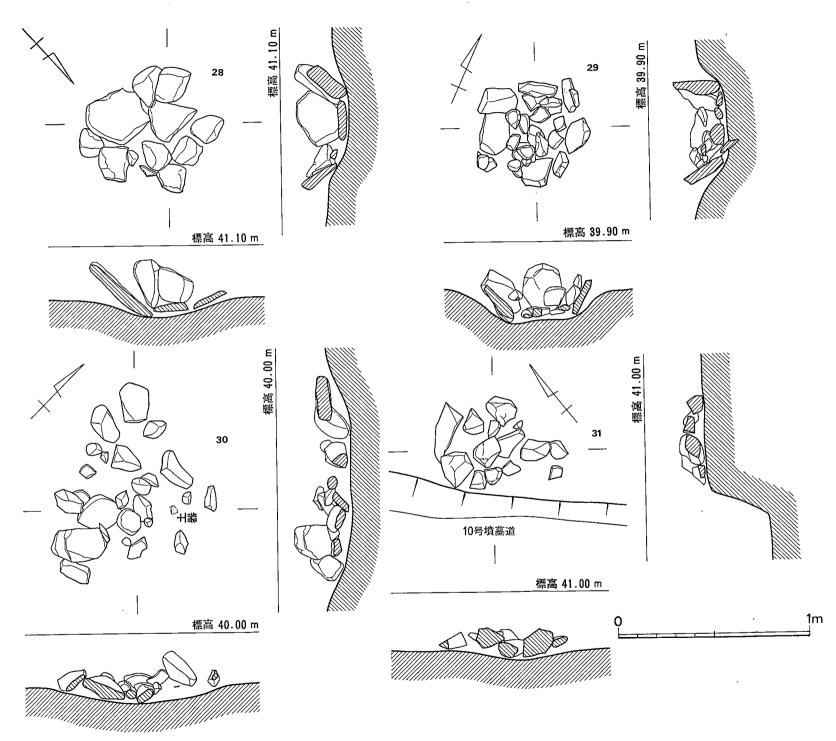
**24号石組炉跡**(第27図) E 7-25区、 3 層中に検出された。 北西側の石の集中と東側に散在した石が観察された。 このうち、集中した部分の実測図から、東側周壁部が破壊された炉と断定した。 すり鉢状の断面を有す炉で、底面は27×21cmの方形で厚さ 7 cmの石を配している。平面プランはほぼ円形に復原できよう。炉深は20cm前後である。

**25号石組炉跡**(図版30,第26図) E 7-20区、3 層下部を切って検出された。 周壁の石が 直に近く立つ23号炉と類似する形態をもつ。 炉石は熱を受けて脆くなった部分がある。 東西で 75cmを測り、北側の石材は欠損する。

**26号石組炉跡**(図版30, 第28図) 27号炉と並んで E 7 -19区の 3 層下部に検出された。 周



第 29 図 32号石組炉跡実測図 (1/20)



第 30 図 28~31号石組炉跡実測図 (1/20)

壁は7個の直方体に近い比較的大型石で、小口部方向は炉内に向けて構築されている。また、 その間を埋める様に小礫を用いている。平面は不整円形を呈し、断面は平坦的であるが、周壁 に大型石があるので25号炉のような形態になるであろう。炉内には投入されたような石はなか った。

27号石組炉跡(図版30, 第28図) 26号炉の南側に接するように検出された小型の炉で、長 径55cmに過ぎない。炉内の中央に扁平な石が2個存在し、断面からしても炉の掘り込みがみら れない点、破壊されている可能性が強い。炉石は熱を受けた痕跡がほとんど無い。

**28号石組炉跡** (図版31一下, 第30図) E7-15区, 3層下部で検出された。 8石を用いて

表 3 石組炉跡一覧表

No.	地区	層位	規 模(cm)	形態	備考
1	E 4 - 9	3層上部	120×90	Α	押型文土器多い
2	F 3 -15	3層中部	55×35	?	
3	F4-7	3層下部	90	В	南側一部破壞
4	F4-8	3層中部	75	В	南西側一部破壊
5	F5-1	3層上部	110×90	В	
6	E 5 -22	3層中部	60	В	南側攪乱
7	<i>n</i>	n	?		破壞
8	F5-5	3層下部	80	A	石皿あり
9	F 5 -10	"	?		周囲に石斧,磨石,石皿出土
10	F7-7	3層上部	65	A ?	
11	E 6 -22	4層上部	100	В	21号と重複,土器多い
12	F 4 - 1	3層下部	55	С	
13	F7-5	3層上部	65	В	
14	F8-7	"	80×130	Α	
15	F4-8	3層下部	75	В	
16	E 6 -21	3層	50×80	Α	and the state of t
17	F 7 -12	3 層上部	60	?	6 号墳東側周溝にて破壊
18	E 4 -24	4 層	55	?	177 TO 187 TO 18
19	F 6 -13	3層下部	65× α	A ?	周囲に石が散乱
20	F6-2	4 層中部	80	C	西側は石がない
21	E 6 -22	"	60	C	11号より下部,周囲に土器多い
22	E 7 −18	3層下部	70	B~C?	
23	E 8 - 6	3層中部	70×75	C	
24	E 7 -25	<i>"</i>	(80)	В	
25	E 7 -20	3層下部	75	С	27号と近接
26	E 7 −19	"	50×70	C	一部破壞
27		n n	55	C C	一口印火火农
28	E 7 -15	. "	70	C	
29	E 6 -21	"	57		一部壊れている
30	_ "	<i>"</i>	100	B?	10号墳の墓道にて半壊
31	F8-1	4層	(50×70)	A	10万項の委屈にて下級
32	E 6 −14	"	80	C ?	

周壁を構成し、底面は1石である。径 $70\sim77$ cmの長円形を呈し、周壁の傾きは45度を、炉深は22cmを測る。底面石間より、わずかだが炭化物が認められ、炉石の脆さと合せてかなり利用されたことが窺がわれる。この炉周辺より黒曜石の原石が数点まとまって出土している点は注意される。

**29号石組炉跡**(図版32,第30図) E 6-21区, 3層下部で検出された。当区は16号炉,30号炉が近接して確認されている。周壁が60度から直角に近く立ちあがる,3層下部から4層にかけて見られる炉形態である。周壁には扁平な板石,床石に挙大の石を配している。平面プランはほぼ円形で径57㎝前後,炉深は20~25㎝を測る。炉内には角のある熱を受けた石が投げ込まれている。黒曜石の剝片が出土した。

**30号石組炉跡**(図版32-2、第30図)  $7 \sim 8$  個の 大形の石と 挙大の石が 散在 している 状態で、その間に楕円押型文土器が散見する。 E 6 - 21区、 3 層下部で検出され、石は熱を受け脆くなっている。破壊された炉跡であろう。

**31号石組炉跡**(図版33-1, 第30図) F 8-1区, 4 層で検出された炉で, 観音山古墳群10号墳の墓道で半壊されている。炉石を平坦に置いた形態と思われる。

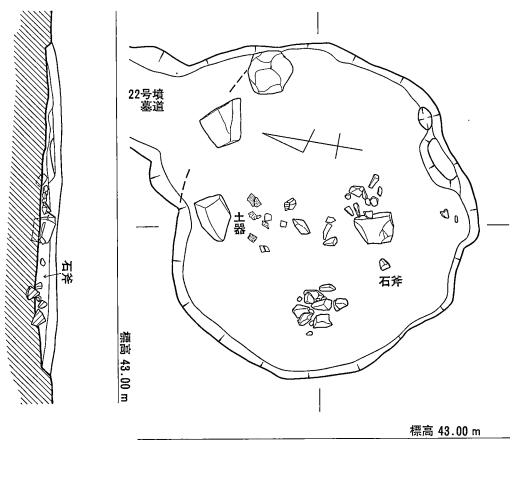
**32号石組炉跡**(図版33-2,第29図) E6-14区、4層で検出された。不揃いに石が散在しているが、熱を受けているものや炭化物が付着するものが見受けられ、破壊された炉跡と考えられる。

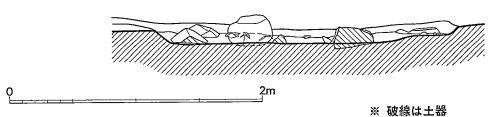
#### (2) 円形竪穴遺構(図版34・35,第31図)

地形上では標高 43.3m 前後と台地の南東端近くの比較的傾斜のきつい地点, C8-22区付近の 4層で確認された。遺構は 4層の茶褐色土層を切り込んだ径 2.2m のほぼ円形を呈すが, 北側は観音山古墳群第22号墳の墓道によって切られている。 この遺構上部から多量の安山岩・黒曜石製剝片・削片が出土したため, 念入りに検討した結果, 図のような竪穴となった。

床面は若干の炭化物がみられ、東側にやや高く、固く締っている。柱穴は内外とも認められず、壁高は5~10㎝程確認できたが、本来のものではない。竪穴内には花崗岩の台石状の石組がみられ、西側には集石が認められる。床面からは第32図20の楕円押型文土器や磨製石斧(第32図4)の他、多量の削器が出土し、石器製造址的な性格も有しているが、石核等の出土がない点検討を要する。

土 器(第32図、20~23) 20は底面から出土した胴下半部以下を欠損する大形の楕円押型文土器で、復原口径37.2cm、現存高15cmを測る。若干外反ぎみに拡がる口縁部から、やや膨らんだ胴部に移行する。口唇部は丸くおさめられている。器肉は口縁部が7.5mmと一番厚く、胴上半部は5mm弱しかない箇所がある。外面は原体を上下方向に施文するが、施文は口唇部から1~2cm下からで、従って口唇周縁は無文帯となる。内面は口唇部から縦方向の沈線(いわゆ

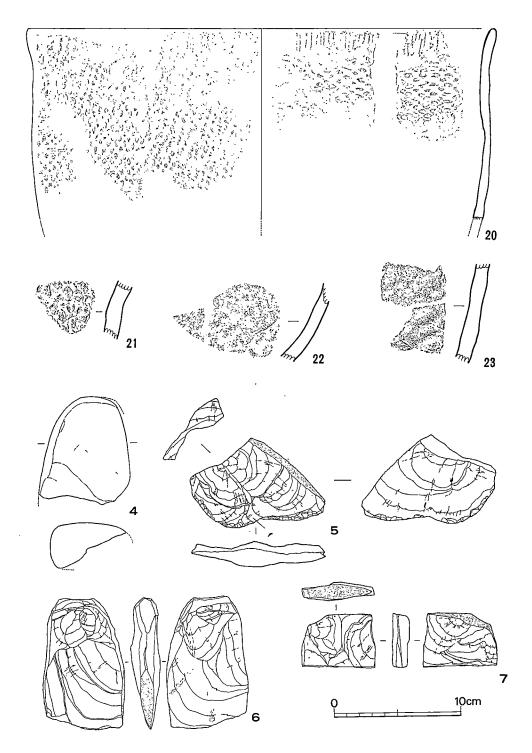




第 31 図 円形竪穴遺構実測図 (1/30)

る原体条痕ではない)が、それ以下は外面と異なる原体を横位施文している。内面の楕円押型 文は9段観察されるが、施文がかなり乱れており、上・下2回に分けて施文したと思われる。 21・22も楕円押型文であるが原体粒は大きい。23は厚手無文土器の胴部破片。

石 器 (第32図 $4\sim7$ ) 4は玄武岩製の磨製石斧で刃部を欠損する。5は横長、幅広の剝



第32回 円形竪穴遺構出土土器・石器実測図 (1/3)

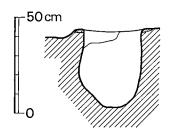
片の末端部に丁寧な二次加工を加えた削器。打面は平 坦打面で,原面を有す。  $6 \cdot 7$  はいずれも厚みのある 剝片である。  $5 \sim 7$  は安山岩製。

### (3) ピット状遺構 (図版22-1, 第34図)

E 6-22区に検出された 11号石組炉跡の 北西側で、 炉と同じ 4 層面を掘り込んでいる。東西30 cm, 南北36 cm, 深さ41 cm の長円形の穴の北側に 5 cm 内外と浅い掘り込み部がみられる。ピットの周囲は焼土が  $3\sim9$  cm の幅でみられ、ピット内は黒色の炭化物と焼土の互層になる。

てのピット状遺構の性格について、当初は11号石組 炉を中心とする竪穴住居跡の柱穴と考えたが、覆土の 状態・周辺の焼土から否定的である。32基検出された 炉は、明らかに熱を受けた痕跡を示しているが、炭化





第33図 ピット状遺構実測図 (1/20)

物、焼土は皆無の状態に近い点、この遺構の性格をとく鍵があると思われる。

#### (4)竪穴遺構(図版14-2,第34図)

F 6-11からF 6-16グリッドにかけての南側において、竪穴遺構が検出された。この竪穴遺構のプランは不整形な楕円形を呈し、長軸(東西)はほぼ4.5m、短軸3.8mを計る。底面は二段になっており、浅い西側が約50cmあり、一方の東側は幾分深く80cm前後である。

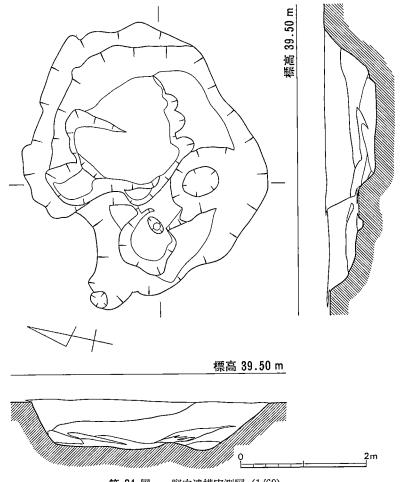
この遺構の掘り方は、当遺跡の主要な包含層である第3層下面(3 e 層)から4層上面(3 f 層)において確認されており、時期的には押型文土器群に伴うものと判断される。遺構内の 覆土の堆積はかなり複雑な様相を呈し、東側の上部は第5層と命名した黄白色の粘質土層に類似した土層からなり、逆の西側は3層の黄褐色土層と近似しているが色調において若干褐色味が強く、また土質の粒子がやや粗い点で区別される。一方、竪穴遺構の底面近くの下部は一様に黒色をした粘質土層が厚く堆積している。上部と下部の中間では両者の土層が混じりあった 薄いレンズ状の土層によって形成されている。底面は淡青白色をした砂質の土層の上面に一部 掘り込まれており、不整形な浅い皿状の窪みや小さい柱穴状のピットなどが不規則な状態で認められる。

竪穴遺構内の遺物の出土状況は覆土の上面から15cm前後に見られ、しかも遺構の壁よりの周辺に集中しており、中央の部分においてはほとんど出土していない。また覆土中の15cm以下の深さにおいては皆無であり、壁面や底面においても同様1点の出土もなかった。焼土や灰、そ

れに炭化物なども 全く検出すること ができなかった。

竪穴遺構の周辺には比較的多くの遺物が出土しており、遺構西側の壁に接して前1個のピットが1個、さらに軽離れた個所の北西と南西にそれぞれ1個の30cmが後のピットが検出されている。

F6-11~16の グリッドで出土し た竪穴遺構の時期 については当遺跡 の主要な出土遺物 である押型文土器 群に比定され得る ことが出土状況か ら明確に把握され



第 34 図 竪穴遺構実測図 (1/60)

ている。しかしながらいかなる性格の遺構かについては直ちに判断できかねる状態である。いくつかの可能性が示唆されるものの充分なる解答を引き出すに至っていない。例えば、遺構内および遺構外西側に見られる不規則でその数も限られている柱穴状のピットから片屋根の竪穴住居址が推測されるものの、不規則で大小の浅い凹凸の底面を床面と考えるには無理があり、それに踏み 固められた様子は 観察されないのである。逆に不規則な プランや底面の掘り方から、4層の小さな石英粒を含み弱粘質の茶褐色土や5層の黄白色粘質土など土器製作のための材料を採掘した場所とも考えられる。しかしながらこれでは柱穴状のピットの存在についてが問題として残るであろう。一方、炉穴についての一応の予想をたて、遺構内の出土状態の観察を特に重視したが、積極的な根拠は見あたらなかった。

現在までのところ九州内の押型文土器を出土する遺跡において、当遺跡で出土した竪穴遺構 に類似した例を聞かないだけにその判断に苦慮するわけである。今回は出土の報告だけにとど め、類例の増加をまって改めて検討する機会を待ちたい。

註1 1978年 那珂川町教育委員会調査

## 2. 包含層出土の遺物

### (1) 土 器

出土した土器は破片数で9,237点の多くを数える。時期的には縄文時代早期から晩期までの各期の出土があるが、その中でも早期後半に属す押型文土器が4,390点(47.5%)と過半近くを占め、それに共伴する無文土器・撚糸文土器・縄文土器・条痕文土器を合せると約65%を占める(表4)。その他、少量の前期・中期の土器と、遺跡の西・南側の2・3層直上からまとまって出土(合計2,354点)した後期の土器ならびに若干の晩期の遺物がある。これら土器のうち遺構に確実に伴出するものについては第18,32図(石組炉跡・円形竪穴遺構出土)に別にあつかっている。それ以外の土器は包含層出土として取り扱ったものの、図版21のように11号石組炉周辺に密集した土器・石器群の如く、炉跡を中心とした遺構伴出の遺物として処理出来るものも含まれているが、住居跡のように"範囲"を限定できないため、包含層出土した。

出土した土器につい

ては、なるべく多く図 示する事に務め、また、 層位的に4 層-3 層の 順を追っている。

土器は大きく I 類〜 X V類の15種に分けら れ,そのうち I 類〜VI 類までが押型文土器及 び,それに共伴する土 器群である。

表 4 層位別早期土器出土量

土 器	3 層	4 層	その他	合計	割合(%)
【山 形 押 型 文 格子目押型文 楕 円 押 型 文	373 42 2,214	129 1 696	89 3 843	591 46 3,753	9.8 0.8 62
小 計	2,629	826	935	4,390	72.8
無 文 土 器	852 36 5 44 22	231 4 11 41	364 13 3 7 11	1,447 53 8 62 74	24 0.9 0.1 1.0 1.2
合 計	3,588	1,113	1,333	6,034	100

#### I 類 土 器

彫刻した棒状原体を回転施文した、いわゆる押型文土器で前述の通り、当遺跡出土土器の過半近くを占める。施文された文様から山形押型文、格子首押型文、楕円押型文の3種に大別でき、また、内面の文様帯からなお細分できる。3種の押型文の中でも楕円押型文が量的に最も多く、3.753点出土し、総数4,390点の85%を占める。次いで山形文、格子目押型文の順にな

り、格子目押型文は46点とわずか1%の出土量しかない。層位的には3層出土のものが6割近くを占めている。

### < Ⅰ 類-1> (図版43, 第35~42図)

山形押型文と称される土器で総数591点出土した。 層位的には 4 層で 129点, 3 層373点を数える。総出土量のうち 4 層の占める割合は約 22%, 3 層は 373点で 63%の値を示す。文様構成から山形押型文を外面のみに施文するもの(a)と、外面山形文に、内面山形文(b)、沈線文(d)〔沈線文と称す文様の内には原体条痕文とそれ以外の施文の二者を包括している。〕。 また、沈線文+山形文(d)、の他、異種原体の楕円文(e)、沈線文+楕円文(f)の組合せも存在する。表 5 は文様別の出土量を示す。

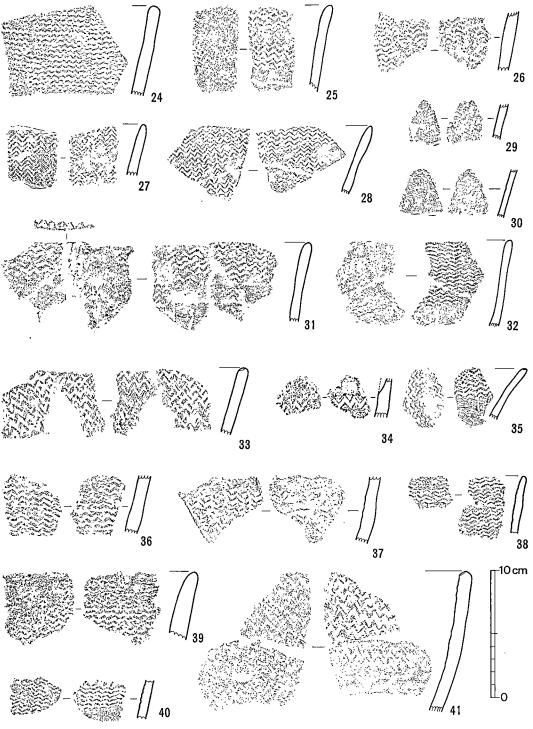
a (第35~39図) 口縁部・胴部破片と底部がある。このうち胴部,底部破片についいては言うまでもなくa類に必ず含まれるものでなくb~fに分類できるものが,各口縁部破片数量から考えられる。aの口縁部は4層7点,3層19点,その他1と計27点の出土しかない。24は4層出土ではほぼ直口する口縁部で尖底の深鉢形を呈すものであろう。黄褐色を呈し焼成好。42~70は4層出土の胴部破片。いずれも原体を横位施文したもので,3層出土の土器(第37~39図)に比べ

表 5 山形押型文 文様別土器出土量

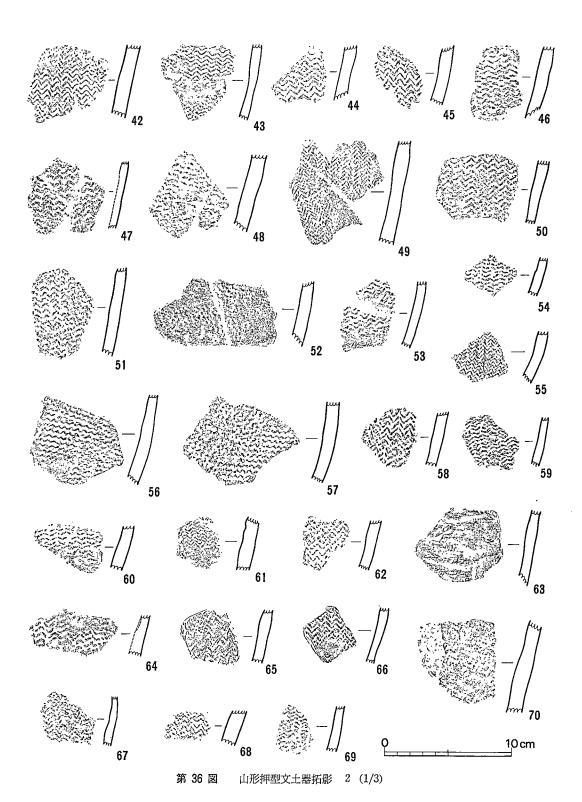
	文 様	3層	4 層	その他	小計
a	山形 (口縁部)	19	7	1	27
	(胴 部)	263	89	75	427
	(底 部)	4			4
b	山形—山形	51	26	13	90
c	山形一沈線	9	1		10
d	山形沈線+山形	21	3		24
e	山形—楕円	1			1
f	山形—沈線+楕円	2	1		3
g	無文—山形	3	1		4
h	無文沈線+山形		_ 1		1
	合 計	373	129	89	591

※文様のうち[一]は左側が外面、右側が内面を表わしている。

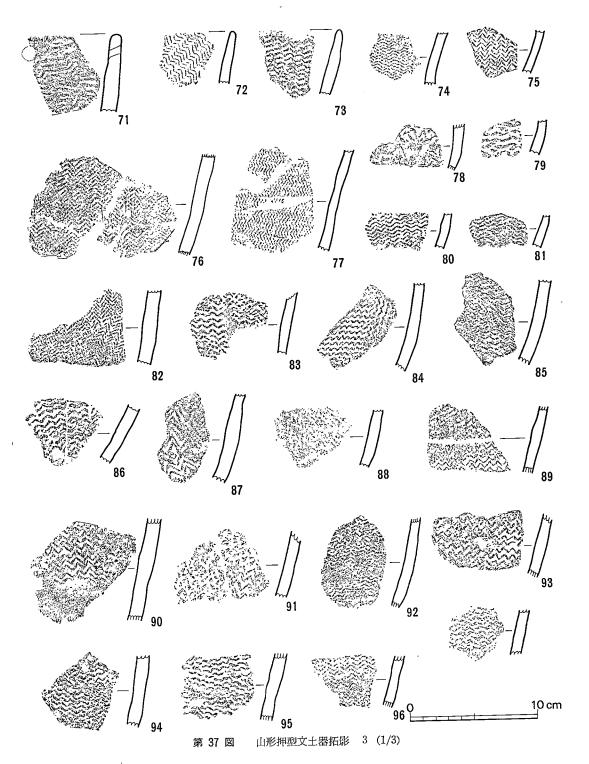
器壁が薄手のものが多く、施文の一波長間が狭い。71~146は3層及び表採品である。71~73は口縁部破片で71は補修孔の痕跡がみられる。器形は若干内彎ぎみ立ちあがる口縁部を有す深鉢形が大部分であるが、74や87・137の様に外反する口縁部を持つものも見られる。器壁は90の1.2cmと厚手のものが多くなる。また、厚手の土器ほど一波長間が大きくなっている。文様は横位施文が大半であるが、口唇部から底部方向の縦位施文もみられる(77・136・137・139・140)。77・135は8mmと比較的薄手の土器で端正な原体から施文されているのに対し、137は間のびした山形文でF4-11区3層上部の出土。139は原体の施文位置を反転することにより独特の文様が生じたもので、文様の交錯する部分は磨り消した痕跡がある。原体長は1.6cmで山形4段の彫刻、直径は0.47mmを測る。140も同様なものである。一方、138は横位施文で、4段の山形文の波長をずらして施文し、それ以下は斜方向の沈線文がみられる。時期的には下るものであるうか。原体の長さ1.8cm、3層上部出土。142~146は底部近くの破片。底部は第71図576の他3点出土しているが、いずれも尖底の土器である。



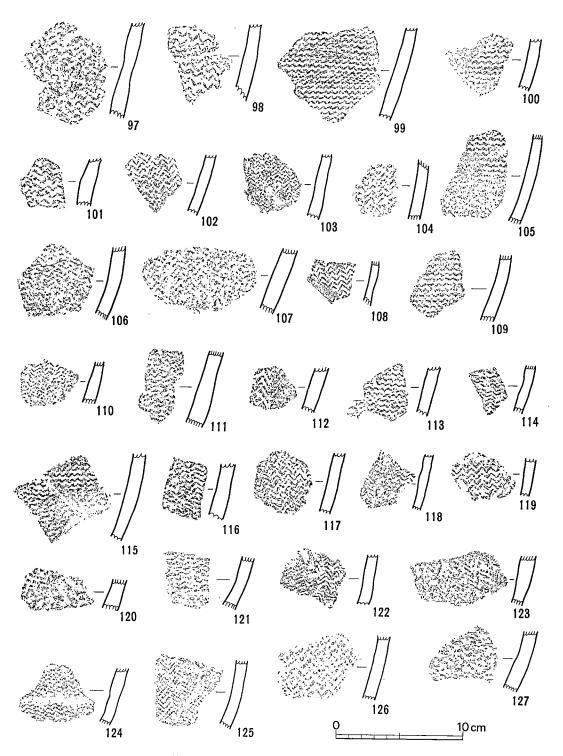
第 35 図 山形押型文土器拓影 1 (1/3)



**—** 42 **—** 

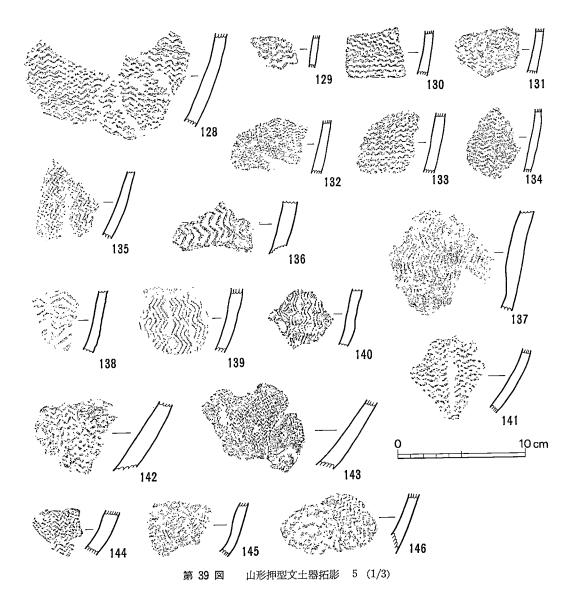


**— 43 —** 

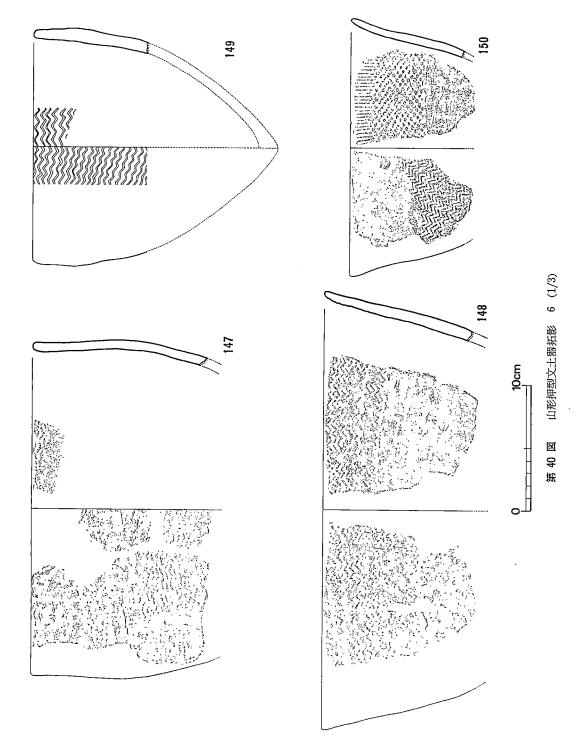


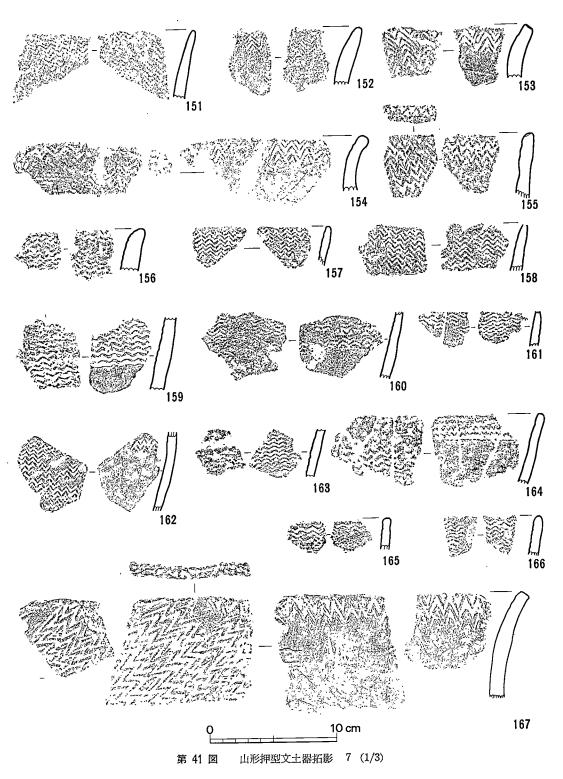
第 38 図 山形押型文土器拓影 4 (1/3)

b (25~41, 147~149, 151~172) 外・内面に山形文を施文するもので90点出土した。 4 層に26点, 3層に51点の出土をみる。内面文様別個体数では最も多い。比較的大型の破片が多く3点が復原実測できた。第40図 147 は最大径を胴上半部に持ち,若干外反ぎみに直口する口縁部を有す深鉢形土器で,復原口径 26cm強,現存高 14cmを測る。器壁は 0.7cmと薄手で,口唇部は丸く納めている。外面の山形文は粘土の乾燥が進んだ状態で施文されたらしく,不明瞭である。山の高さは 3 mm 前後と低く,一波長1.2cm。 器肉面には同一原体により口唇部から一回転の横位施文される。 3段の山形が観察され,原体の長さはそれから1.5cm 前後である事が判

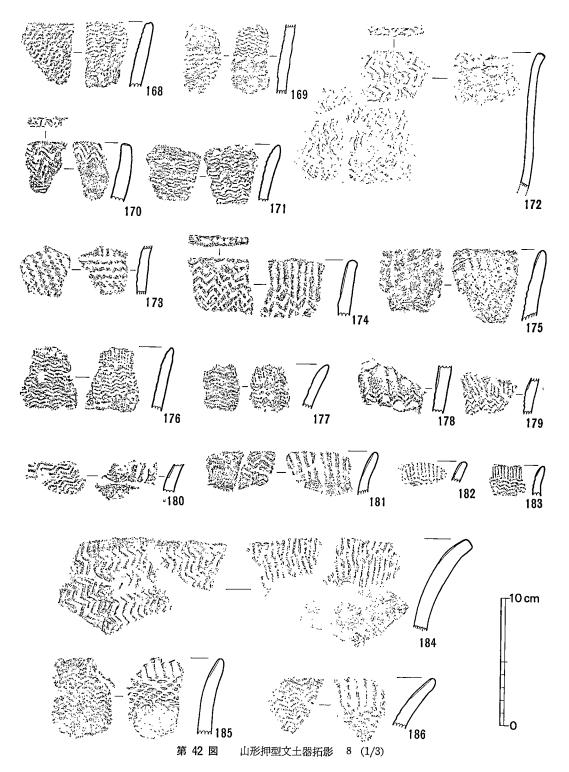


— 45 **—** 





**— 47 —** 



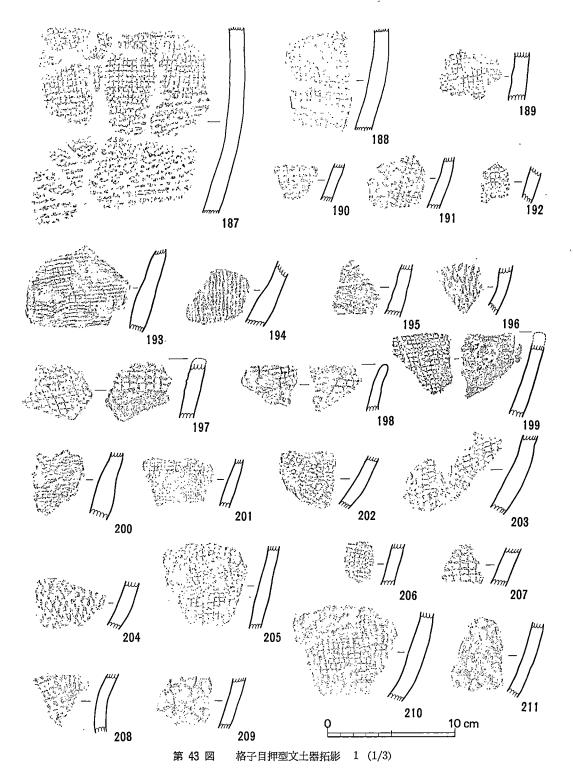
る。148は口唇部でやや外反する深鉢形土器で口径 34.4cm, 現存高 12cmを測る。器内面は口唇部から10段の山形文を施文する。中間に無文部を残すので、2回の横位他文と考えられる。山形文以下には横方向の浅い条痕が見られる。4層出土。第35図25~41が4層出土で器形は35を除いて直口する深鉢形を呈す。31・33・41の様に口唇部まで同一原体を施文するものもある。3層出土の149は口縁部の破片で、口径18cmを測る内彎ぎみに立ちあがる尖底の深鉢形と考えられる。内面には最高7段の山形文が看取される。黄褐色を呈し、硬質。その他151~172の土器があり、器形は150・167のように器壁が1cm以上を有し、外反する口縁部を持つ土器が目立ってくる。167は平坦な口唇部を有し、この部分にも回転施文している。外面は右下りの施文、内面は横位一段の施文がみられ、山形文の一波長は1cm強であるが振幅が1.5cm~2cmと非常に大きいのが特色である。また、器外面の施文で口縁部に無文部を有し、それ以下に山形文を付するもの(169)もある。172は外面が縦位、内面横位施文の例で、器壁が6mmと薄手で口縁部が外反するもの。

- c (第42図184) 外面に縦位の粗大な山形文, 内面に2段の沈線文がみられる。口唇部は平坦面を有し, 大きく外反するものである。3層9点, 4層に1点の出土を見る。
- **d** (第42図173~183) 器内面の1段の沈線下に山形文を横位施文するもので3層21点・4層3点の出土をみる。沈線は幅広のもの(175・178)と狭いもの(177・182等)のがある。
- e 外面に楕円文,内面に山形文を施文する土器で3層に1点出土しているが図示していない。
- f (第40図150, 第42図185・186) 器外面に山形文, 内面に沈線文及び楕円文と異なる 原体を施文する土器で 3 点出土した。 150 は比較的大形の破片の外反する口縁部の深鉢形土器で復原口径20.2cm, 器肉 5~7 mmを測る。器外面は口唇部から 5 cm間無文部を残しそれ以下にやや右下りの山形文を施文する。器内面は 1.3cm 程の長さの原体条痕文下に一粒子径 3 mmの楕円文を横位施文している。楕円文は 2 段と思われる。 内外面の無文部は斜め方向の条痕が走る。185・186は口縁部小破片で、いずれも口縁部が薄く、丸みを帯びている。
- g (第74図659) 外面が無文でも内面に山形文を施こす土器で4点出土。第74図659は口縁部に近い破片で、内面に間のびした山形文が施文されている。
  - h gの内面に沈線を有すもので1点出土している。

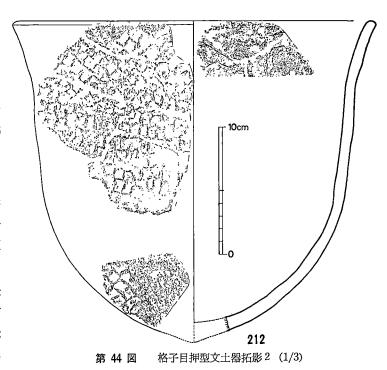
< Ⅰ類-2> (図版44-1, 第43・44図)

格子目押型文で4層に11点, 3層に42点出土した。器外面のみに格子目文を施とすもの(a) と、内面にも施こすもの(b)の他に、格子目文・楕円文を伴用する(c)土器が存在する。

- **a** (188~196, 200~211) いずれも胴部破片。188~196が4層出土で,4 mm強の正格子目文 (188~191) とそれ以下のもの( $193\cdot194$ )がある。3 層では $5\sim7$  mmと大きな正格子目文が出土する( $203\cdot208\cdot209$ 等)。また,斜格子目文を縦位に施文した土器が $4\cdot3$  層各 1 点( $196\cdot204$ )みられる。
  - **b** (197~199・第44図) 口縁部が直口するもの(197・199)と外反するもの(198・212)



が存在し外反する土 器の方が薄手であ る。 212 は格子目文 施文土器では唯一の ほぼ完形品に近い資 料で,復原口径28.6 cm, 器高25cm前後を 測る。底部を欠損す るが乳房状に近い尖 底と思われる。器外 面は底部近くまで正 格子目文がみられる が、全体に施文方法 が粗雑である。内面 も1段の構位施文が ある。いずれも3層 出土。



c (187) 胴中央部と考えられる大形の破片である。上半に正格子目文,下半に楕円文と 異なる原体をいずれも横位施文した土器で,格子目文に比べ,楕円文の乱れが目立つ。器壁 1.2cm前後と厚手。

< Ⅰ 類一 3 > (図版44-2~49-1, 第44~68図)

楕円押型文と称される土器群で総計3,753点の多大に達している。層位的な内訳は4層に696点,3層に2,214点,その他,表面採集や古墳等の攪乱によるもの843点である。3層の割合は約59%にのぼる。押型文土器の総計は4,390点で,そのうち楕円押型文は85%強になり,本遺跡の中心を占めている。この点は大分県早水台遺跡,稲荷山遺跡が山形押型文を主体とする事と軍要な差異を有している。

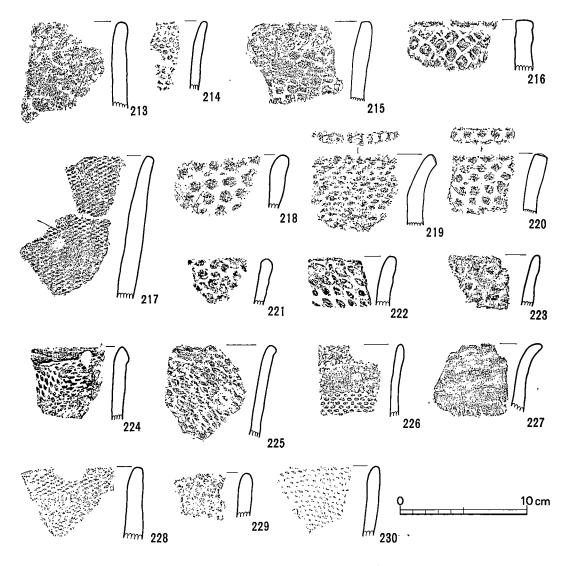
楕円押型文についても器内面との文

表 6 楕円押型文 文様別土器出土量

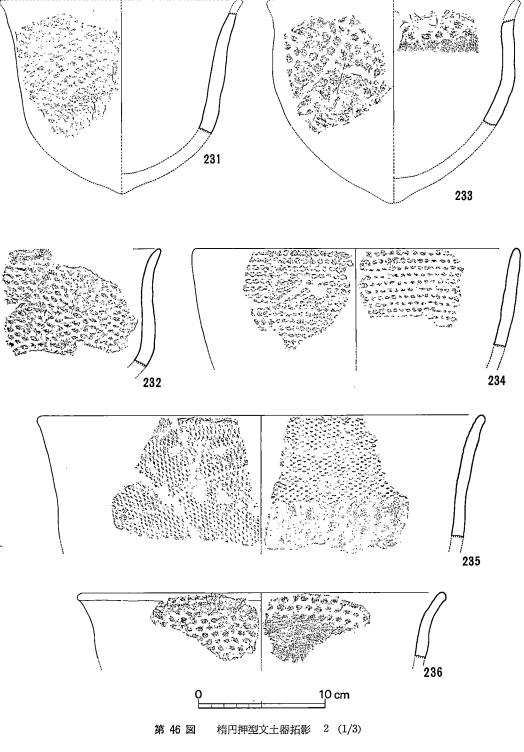
	文 様	3層	4 層	その他	小計
a	楕円 (口縁部)	73	8	32	113
	(胴 部)	1,715	562	655	2,932
i	(底 部)	43	12	14	69
ь	楕円—楕円	138	56	18	212
С	楕円—沈線	197	49	33	279
d	楕円沈線+楕円	32	4	88	124
е	楕円一沈線+沈線	9	2	2	13
f	楕円—山形	5	2	1	8
g	楕円沈線+山形	1	1		2
h	無文一楕円	1			1
	合 計	2,214	696	843	3,753

様構成により $a\sim h$ の8つに細分できる。器外面のみの施文(a)と,内面に楕円文を施文するもの(b),原体条痕文を含む沈線文を施文するもの(c),沈線文と楕円文(d),沈線文と沈線文(e),異種原体としての山形文を施文するもの(f),沈線文と山形文(g)等のバラエティーがある。その他に特殊な楕円文や,胎土に特色を持つ例が出土している( $h\sim k$ )。

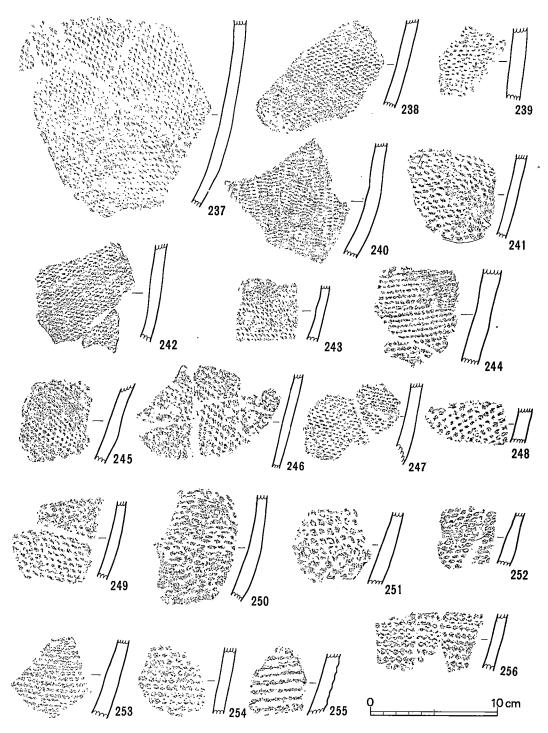
**a** (第45図, 第46図231・232,第47図~第52図) 口縁部は113点出土し、4層に8点、3 層に73点、その他32点である。その他胴部破片が2,932点出土しているが、必ずしもaに当てはまると限らない事は言うまでもない。213は4層出土で、ほぼ直口する口縁部を有す。器壁は



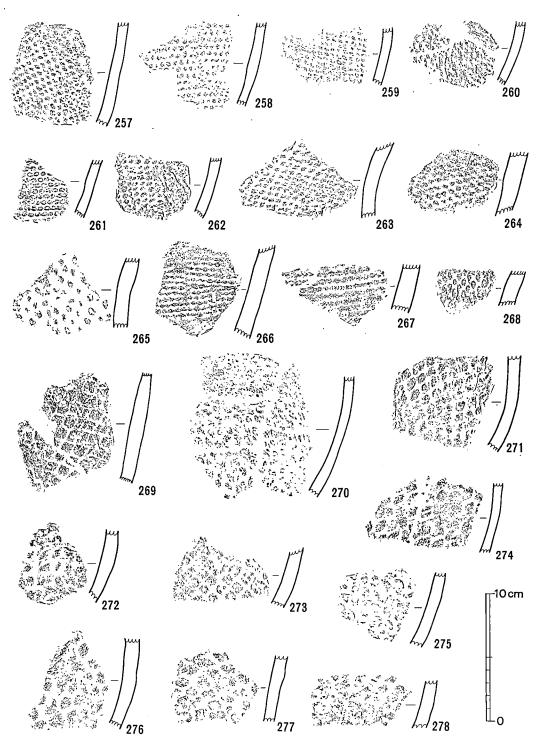
第 45 図 楕円押型文土器拓影 1 (1/3)



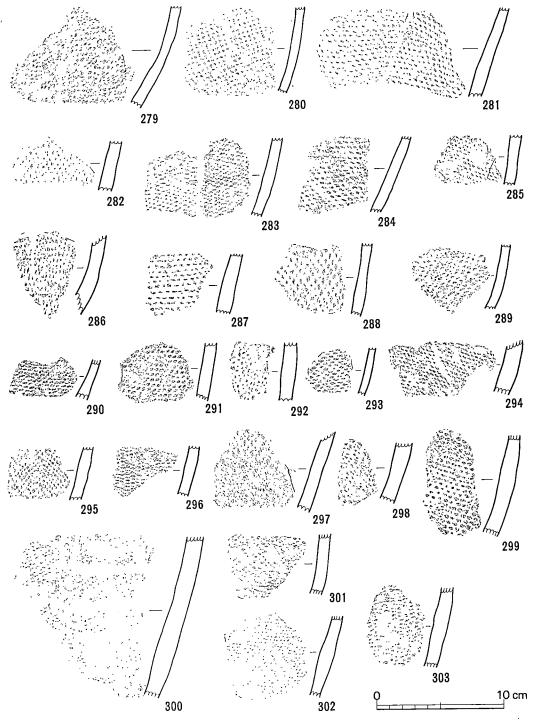
<del>-- 53 --</del>



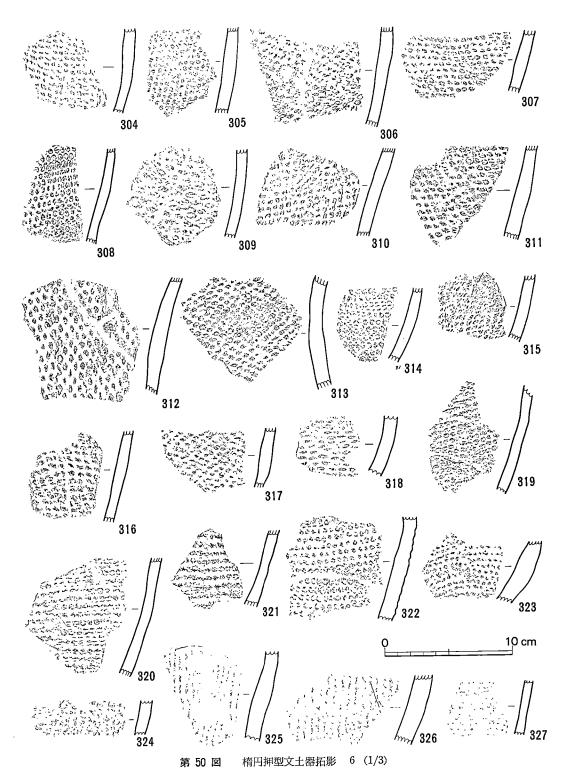
**第 47 図** 楕円押型文土器拓影 3 (1/3)



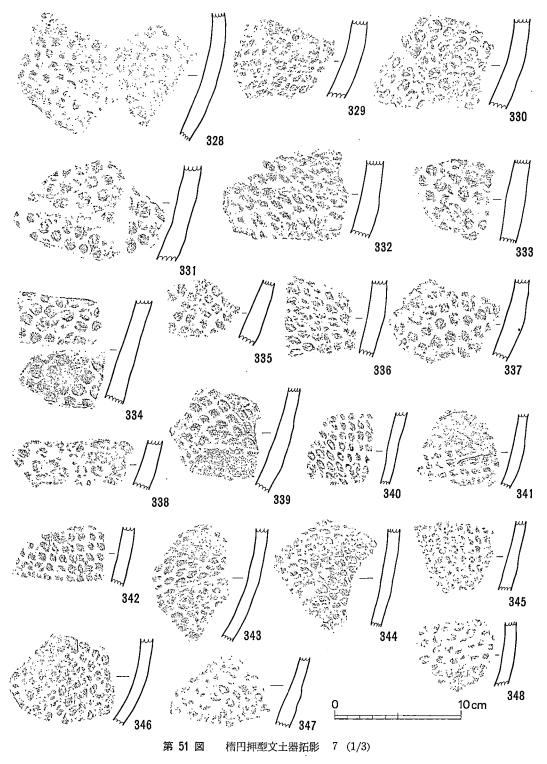
第 48 図 楕円押型文土器拓影 4 (1/3)



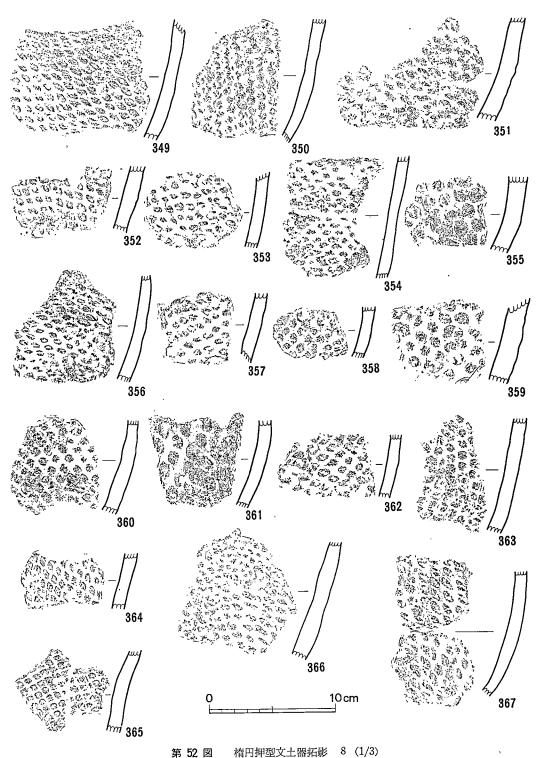
**第 49 図** 楕円押型文土器拓影 5 (1/3)



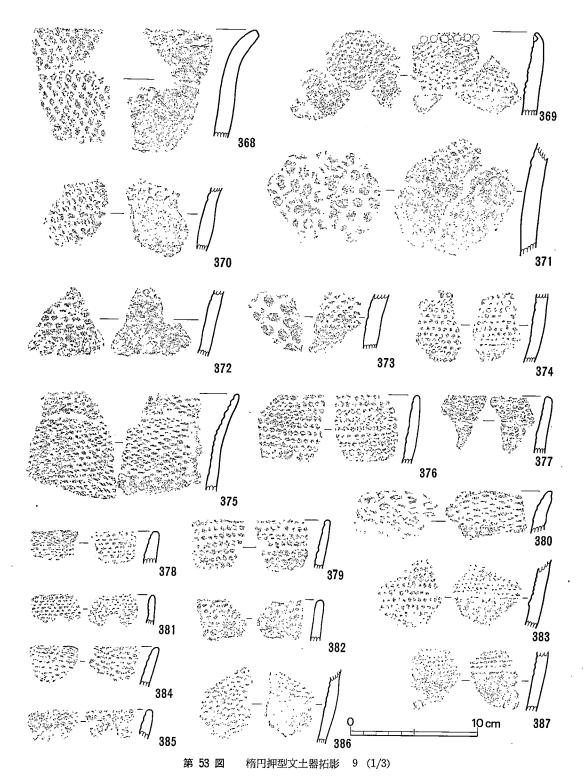
**—** 57 —



**—** 58 **—** 



楕円押型文土器拓影 8 (1/3)



**—** 60 —

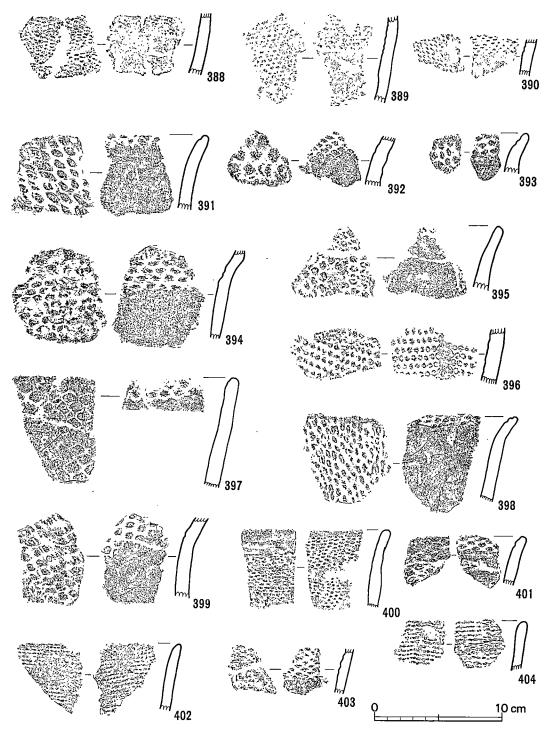
1.2cmと厚手のもの。214~232 は 3 層出土で口縁部が外反する219・227・231・232 の例があるが、直口するものも多い。文様は楕円粒の径が10mmを越す216・218や、3 ないし4 mmと小さい例(228・230)も出土している。また、口唇部に同一原体を押捺する220もある。器外面の施文は口唇直下から行なわれるものと、無文部を置く例(226・227)の二者が存在している。231 は 3 層直上から出土した大型の破片で、口縁部を欠損するが、約19.2cm前後に復原できる。胴上半から外反する器形で、底部は乳房状になるのであろう。色調は赤褐色を呈し、器外面に部分的に煤が付着している。232 も似た器形であるが、器高は低い。施文は横方向。 D 6-15区、3 層直上出土。1 号石組炉から出土した土器(第18図1)は唯一の復原完形品で、小形の尖底深鉢形を呈す。

 $237\sim278$ は 4 層出土の胴部破片である。楕円径が  $3\sim7$  mmと小さいものが多数を占めるが10 mm以上に達する例もある。施文方向は横位が主であるが,縦位のもの( $258\cdot260\cdot276$ ),斜位のもの( $237\cdot243\cdot249\cdot273$ )も出土している。胎土は全体的に 3 層に比べ良質で,文様も明瞭である。 $279\sim369$ は 3 層及びその他から出土した胴部破片で器壁の薄・厚の二者がある。文様も 4 層と同様に 横位が 主であるが, 縦位( $286\cdot325\cdot326\cdot364$ ),斜位( $281\cdot299\cdot364\cdot366$ )の例がある。また, $339\cdot341$ の様に文様が不明瞭になる土器が目立ってくる。

**b** (第46図233~236, 第53図~第55図) 器外面に楕円文, 内面にも楕円文を持つ土器群であるが, 外・内面とも同一の原体から施文されたとは限らない。 総計212点出土し, 4層に56点, 3層に138点である。

234はE 4-3区の4層出土で、若干内彎ぎみに立ちあがる深鉢形土器の口縁部破片。復原口径25.6㎝、現存高8㎝を測る。口唇部はやや尖りぎみに丸く納める。外面は全体に、内面にも同一原体により口唇部直下から10列の楕円文があり、それ以下は施文していない。4層出土の土器は他に368~387で、234と同様に内彎ぎみの口縁部を有す土器(376~387)が外反する土器(368・375)より多い。文様は内外面とも横位施文(372・375・379等)と外面が縦位、内面横位施文(368・370)する例がある。また、異なった原体を施文する土器(371・373・380)もみられる。同種の土器は3層出土の392・379等も該当し、すべて内面の原体の方が、楕円文が細かい点一致している。369は特異な土器で、内面の口唇部直下に円形の刺突文が巡っている。3層その他は233・235・236・388~418 がそれで器形は胴上半から大きく外反する391・399の他に口縁部を急に外反させる398・417の土器があらわれる。233は口縁部直下の破片で3層下部出土。復原口径は20㎝ぐらいである。235・236とも外反する口縁部破片で、前者は外面斜位、内面横位施文される。後者はやや外反がきつい土器で、口唇部はやや肥厚している。内面の楕円文は3列で、原体長1.8㎝に復原できる。この様に内面の施文状態から原体の長さが判別できるものは393・397などがある。408は補修孔を有す土器で、内面に肥厚している。

c (第56図~64図) 器内面に沈線文をみる土器群で、沈線は縦ないし横位があり、及び、



第 54 図 楕円押型文土器拓影 10 (1/3)

一段ないし二段のものがある。内面に沈線文を施文する土器としては e も同様であるが, e は 縦+横と言う定形化した組合せを有しているため,一応分けている。 279点の出土で 4 層に49点, 3 層197点の出土量がある。 4 層は $419 \cdot 420$ 及び $437 \sim 455$ , 3 層は $421 \sim 436 \cdot 456 \sim 511$ で  $512 \sim 526$ 及び $552 \cdot 561 \sim 564$ はその他から出土した。

器形は外反する口縁部が一般的であり、その中でも 425 は特にラッパ状に広がる口縁部を有している。また、口縁部のみを倒した感じの土器(427・447・466)や口縁上部を外方に急に折り曲げた土器(440・443・473・519等)の存在も目立つ。前述した様に内面の縦沈線文には一段のものと二段のものに分けられる。一段では 2 cm未満と短いもの、3~5 cm内外のものと長く斜方向の3種類がある。 2 cm未満としては 421等があげられる。 421は F 6-12区、3 層最下部出土で、復原口径24cm、現存高15cmを測る。口縁部は外反し、口唇部は細くなる。尖底の深鉢形土器であろう。外面の楕円文は口縁部が横位方向、胴部斜位で胴下半部は乱れている。内面の沈線は長さ1.1cm、幅5 mm。内面胴部に煤が付着している。 433は外反する口縁部が口唇部でなお屈曲する器形で、口径 28.2cm に復原できる。外面の楕円文は縦位施文、内面は長さ1.6~2.2cm、幅4~6 mmと不揃いの沈線が巡る。 434は口径29cm、435は29.4cmを測る。 435の口唇部は平坦面を有するので、口唇部は稜線をもつ。 436は 6~8 mmと器壁の薄い土器で、幅7 mmの刺突状沈線文を有す。他に4層では441、450が、3層は456~458・467・473 などの出土をみる。

内面の沈線が  $3\sim 5$  cmに納まる426は F 6-14区, 3 層上部出土。直口する口縁部直下にヘラ状工具により一条の浅い沈線が走る。外面は径 9 mmの楕円文が横方向に施文され,内面は長さ 3 cm,幅  $4\sim 6$  mmの沈線が巡る。 427 は口縁部で「く」字状に屈折する土器で,口唇部に刻み目を入れている。沈線は長4.2 cm,幅 7 mmを測る。F 4-14区出土。類似の土器としては 4 層の  $448\cdot 449$  が, 3 層では  $466\cdot 478\cdot 488\sim 490$  等がある。 428 はほぼ直口する口縁部をもつ器形で,口径は17.2 cm と小さい。外面の楕円文は縦位施文。 内面の沈線は 3.1 cm,幅  $2\sim 3$  mm と幅の狭いもので,ヘラ先状工具による施文と思われる。  $455\cdot 511\cdot 522$  の土器も内面の沈線が似ている。

1段で斜方向に長い沈線をもつ420はC7-15区の4層出土。復原口径32.4cm, 現存高11.8cm を測る。幅6mm前後の浅い沈線が右下りに施こされる。425は表面採の土器で、口縁部が大きくラッパ状に開らき、小波状を呈す。口唇部直下で隆帯状にふくらむ。外面文様は口縁部直下の楕円文は施文後ナデ消している。内面には斜方向の沈線が施されている。その他に、491・494があるが点数としては10点に満たない。

次に二段に施文される土器であるが、419は E 6-13区、4 層出土。口縁部から胴部上半の破 片で、復原口径32.4cm、現存高15.6cmを測る。口縁部はやや外反するが、胴部が外方へ膨るた め全体的に直立したイメージを受ける。外面の楕円文は径10mm前後と粗大で、施文時の重複が 著しい。内面は縦と斜め(右下り)方向の二段の沈線である。 4 層では 446・447 がそれで、447 は外面の楕円文が扁平な点に特色がある。 423・424・429・431・432等は大型の破片で 429 は口径36.3cmと大きい。431は E 5-17区、 3 層上部出土。口径32.2cmに復原できる土器で、外面の楕円文粒の径 7 mmで横位施文、内面の沈線は長さ 5 cm、幅 7 mm前後。二段の沈線を持つ土器としては465・481・491・492・519等があげられる。

その他に518の土器がある。 胴部破片であるが、 外面は粗大な楕円文、 内面には二条のヘラ 先状沈線文がみられる。

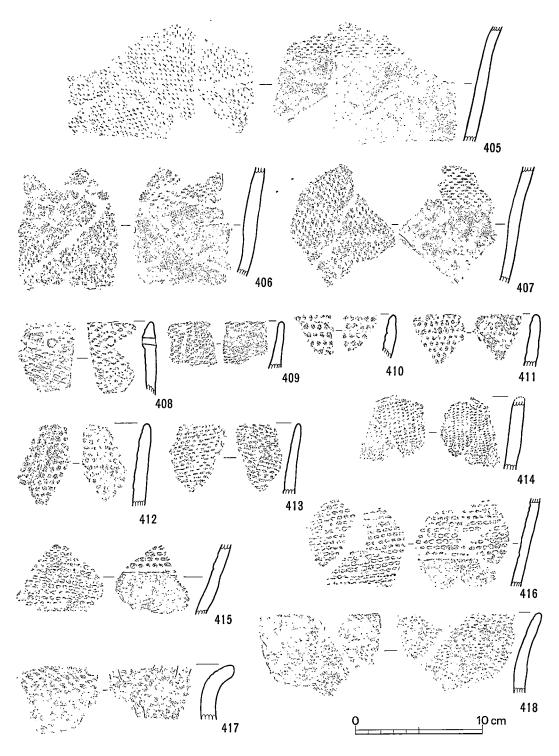
横走する沈線文は9点の出土例がある。552は、表土層出土の外反する口縁部破片で、外面 楕円文は縦位、内面の沈線は4~6条みられ、幅は2mmと狭い。幅の狭い例は561・564があ り、564は552と同一個体の可能性が強い。562は幅広な3条の沈線文を配した土器で、口唇部 には外面の楕円文と同一原体を押圧している。

 $\mathbf{d}$  (第65~67図) 器外面に楕円文,内面に縦方向の沈線文と楕円文が施文される土器群で 124点出土している。 4 層に 4 点のみで, 3 層,その他から 120 点出土する。従って 3 層に主体がある土器と言える。 4 層は  $20 \cdot 534 \cdot 535 \cdot 538$  である。

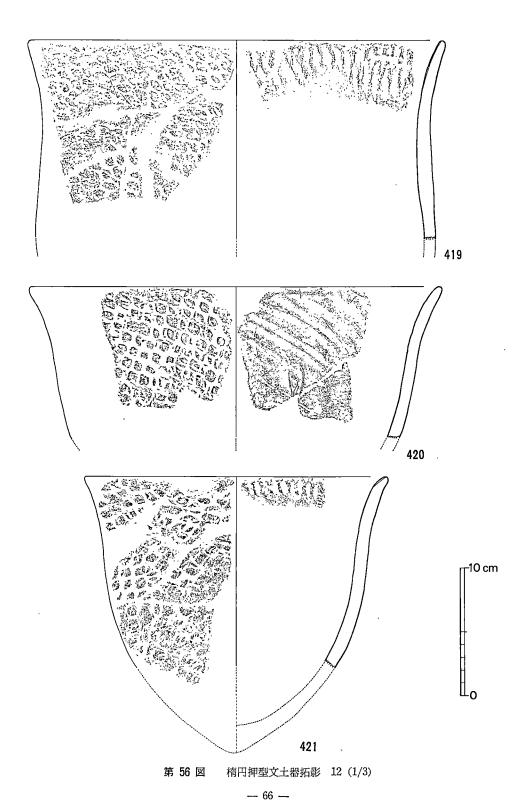
527はE7-16区、3層最下部出土で、復原口径24cmを測る。薄手で比較的胴部の膨る器形で口縁部は大きく外反する。底部と胴下半部を欠損する。器外面は縦位施文の楕円文、内面は長さ2cm、幅3.5mmの沈線文の下に、楕円文を横位施文している。原体直径4.7mm。529はE7-4区、3層中部出土で、外反する口縁部破片。口径37.8cmに復原出来る大型の土器で、器外面には端正な楕円文が横走する。内面は口唇部から長さ2.5cm、幅4mmの沈線が巡り、その下に3列の楕円文が横走する。内面の楕円文は各粒子間が接続しており、外面の原体と異なるものであるう。施文端部が明確に判明する資料で、原体長2.1cmである事が判る。口唇部には刻目がある。この様に内面の文様から原体の長さが復原できるものに530・534・547等の土器がある。530はF4-7区、3層上部出土。外開きの直口する口縁部破片で、復原口径28cmを測る。器外面は直径5m前後の楕円粒文をもつ原体を縦方向に施文し、内面は同一原体を横走させる。内面の楕円文は6列みられ、施文の乱れがない点、一原体の長さと考えてよいだろう。原体長3.6cm、径は2粒子間の長さから復原でき4.8mm前後。532は器形は異なるが、似た文様施文をもっている。この土器の原体長は2.9cmを測る。

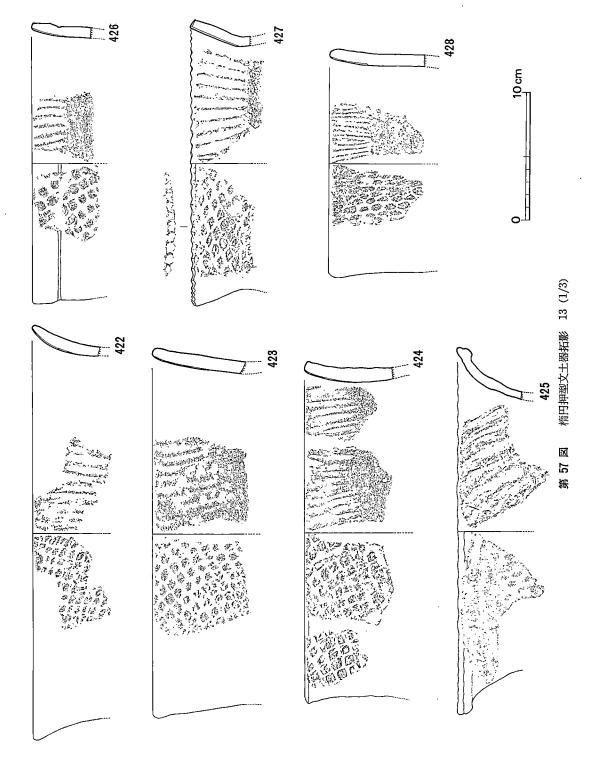
器外、内面の楕円文の原体については、同一のものを使用するのが大部分であるが、4層出土の534の様に外面は粗大な楕円文を施こす土器もある。 沈線についても、 二段にした540・546の例がみられ、施文もバラエティーに富んでいる。

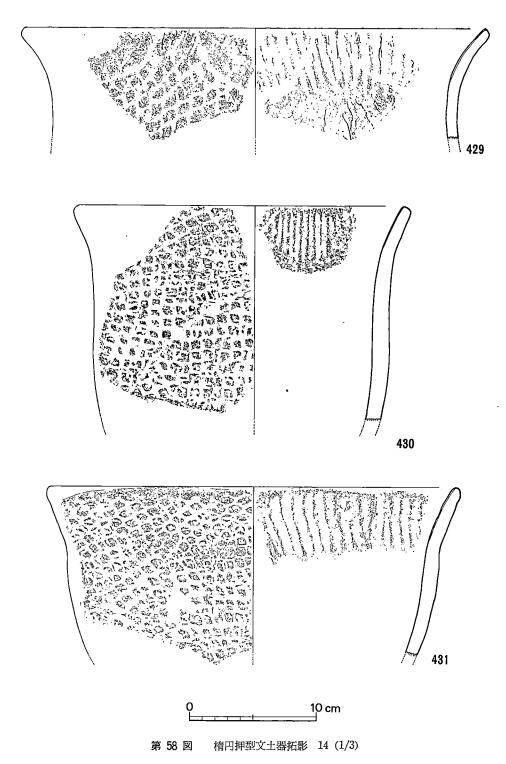
e (第68図551・553~560) 内面の沈線が、縦と横の組合せをもつ土器で、13点と非常に 出土量が少ない。4層に2点、3層に9点出土した。551はF4-11区の3層出土。外反する口 縁部破片で、平坦な口唇部には刻目を有す。復原口径29cmを測る。外面は横走する楕円文、内

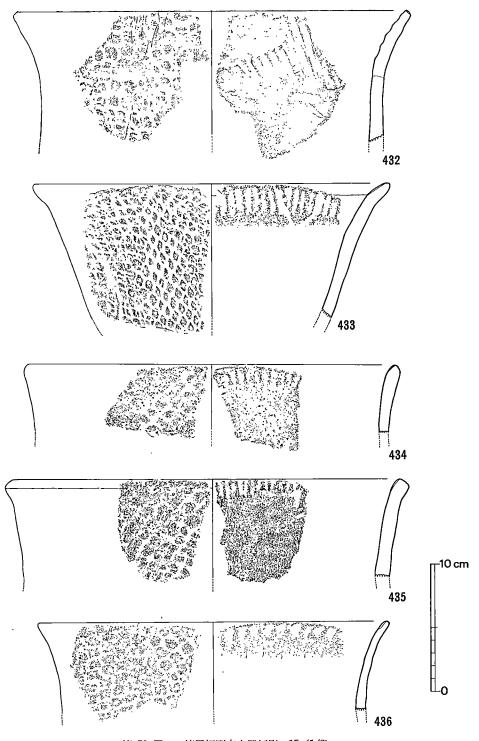


第 55 図 楕円押型文土器拓影 11 (1/3)

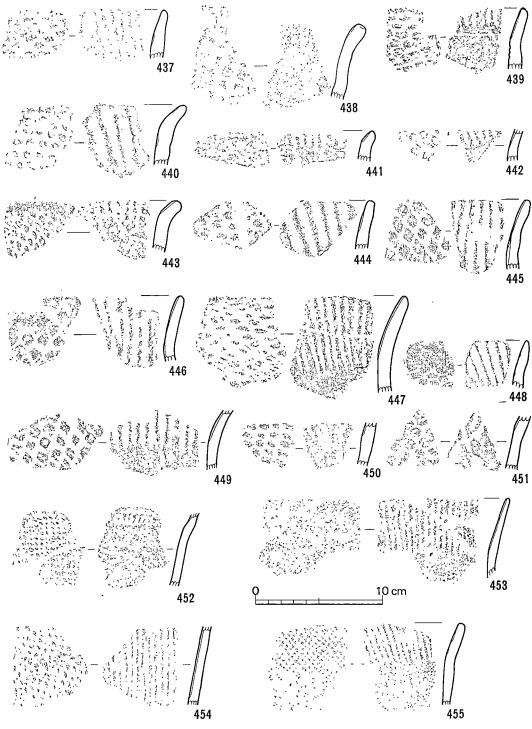




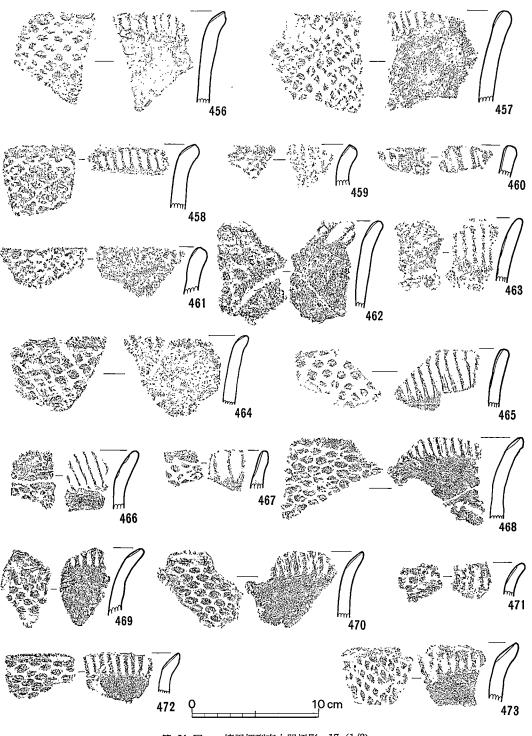




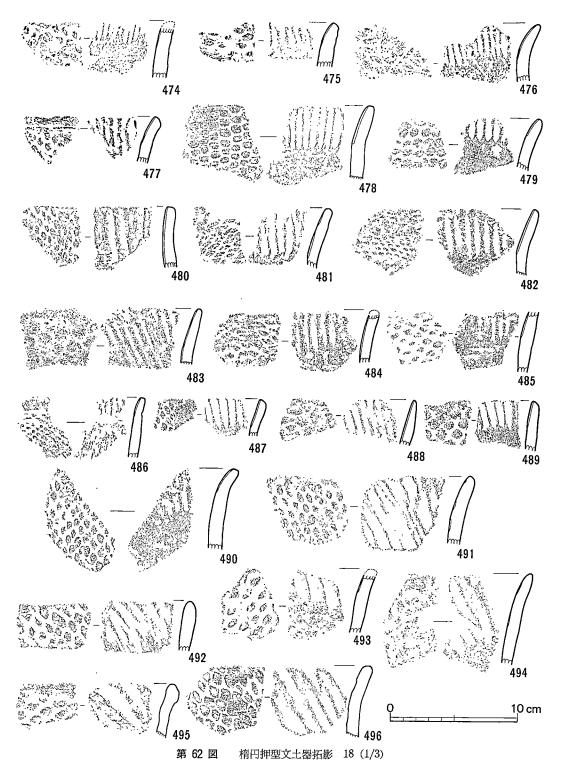
第 59 図 楕円押型文土器拓影 15 (1/3)



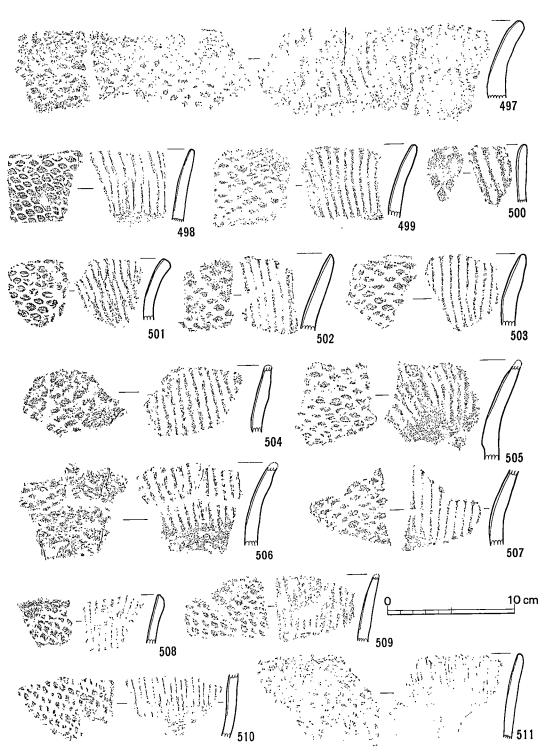
第 60 図 楕円押型文土器拓影 16 (1/3)



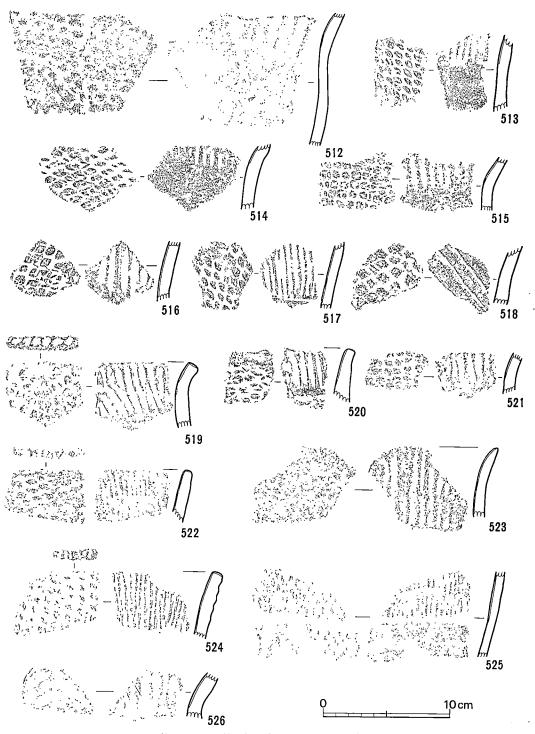
第 61 図 楕円押型文土器拓影 17 (1/3)



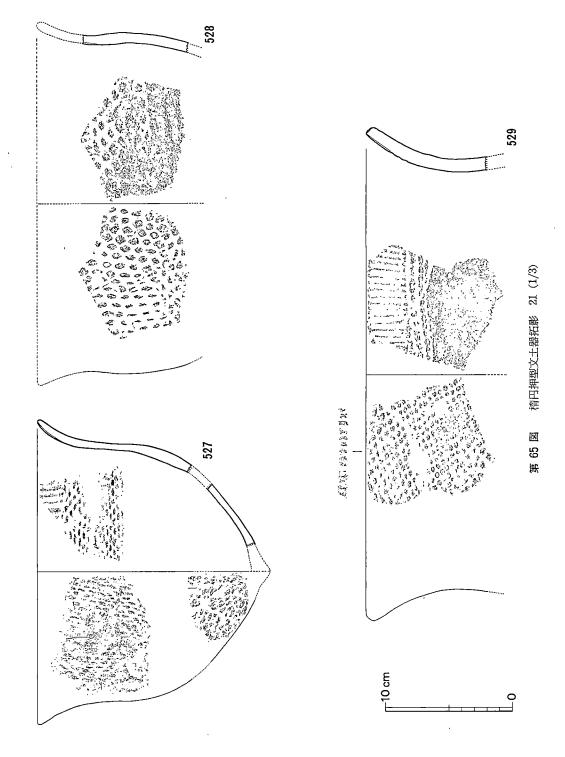
— 72 —

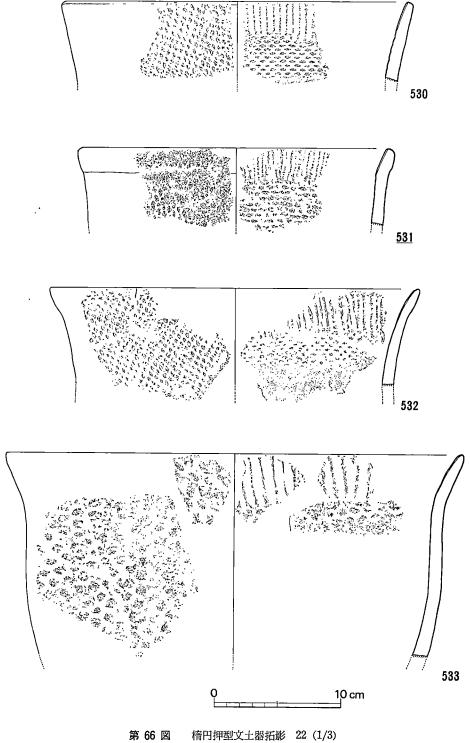


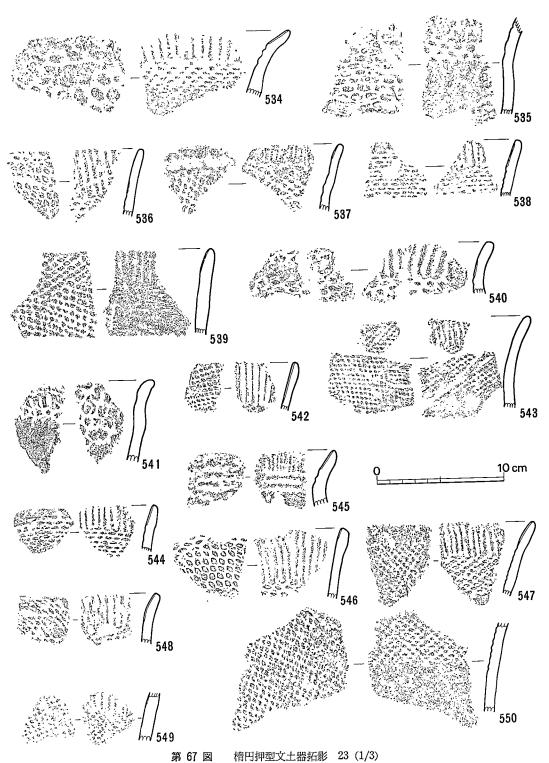
第 63 図 楕円押型文土器拓影 19 (1/3)

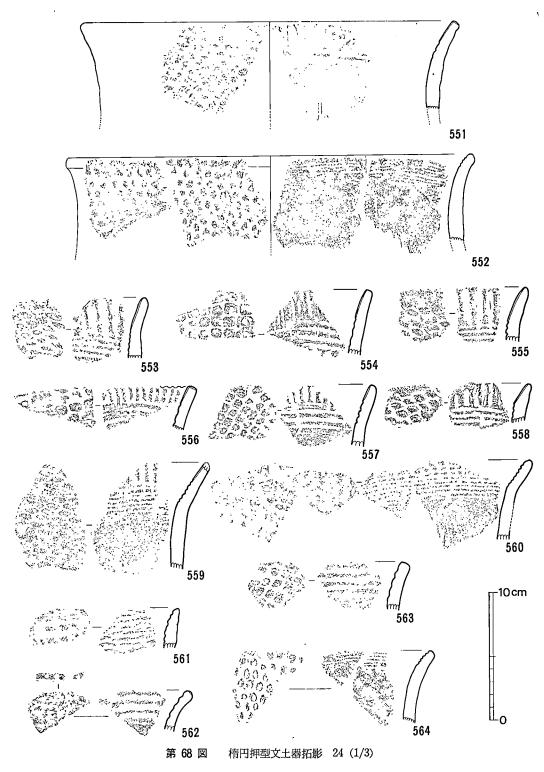


第 64 図 楕円押型文土器拓影 20 (1/3)

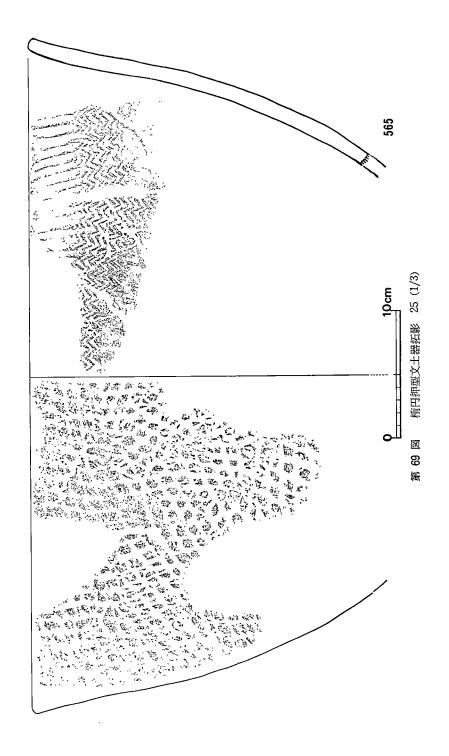








— 78 —



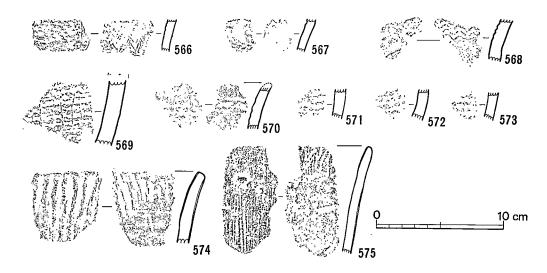
面は長さ2cm弱の沈線下に3条の沈線が巡る。横走する沈線の条数は3条 $\sim$ 7条 (559・560) があり、556・559の例から横走する沈線を施文した後、縦沈線を施文するようだ。また、上・下の沈線文の幅は551・556がほぼ同一である他、上の方が幅広である。

f (第70図566~568) 外面に楕円文、内面に山形文と異種原体を施文する土器で 8 点の出土をみる。 566~568 と口縁部近くの破片で、 傾きからいずれも外反する口縁部であろう。 568 は E 5 -14 区、 3 層中部出土で、 他の 2 点に比べ器壁が 9 mm と厚い。 胎土に小礫砂粒を多く含んでいる。

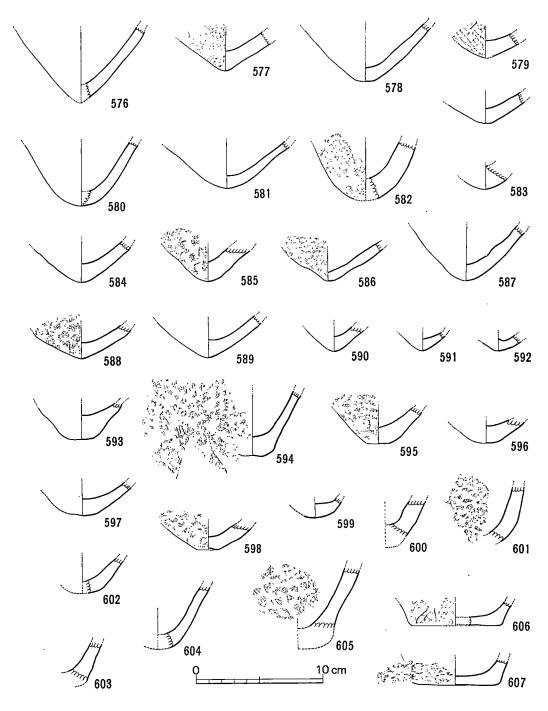
 ${f h}$  外面が無文で、内面のみに楕円文が施こされるもので、図示していないが  ${f 3}$  層に  ${f 1}$  点出土している。

i (第70図569) E 9-19区, 3 層下部出土の胴部破片である。 楕円文間に縦の細い隆帯が みられるもので、1 点のみ出土した。この隆帯は原体に楕円文と伴に刻み込まれている。 茶褐 色を呈し、焼成良好。

j (第70図570~573) 胎土に滑石を混入する特異な[楕円押型文で 2 個体分出土した。[570



第 70 図 楕円押型文·沈線文土器拓影 (1/3)



第71図 押型文土器底部実測図 (1/3)

は口唇部を欠損するが、外反する口縁部破片で器壁8 mm前後。C 6-25区、2 層出土。器外面は口縁部に無文部を有し、それ以下に楕円文を横走させる。内面にも楕円文を施文する。原体は同一で、一楕円6 mm前後である。572は胴部破片であるが、同一個体であろう。571と573は楕円粒が4 mm前後と一回り小さい土器で胴部破片。いずれも赤褐色を呈し硬質。

k (第71図577~607) 楕円押型文の底部を一括して扱った。577~583は4層出土で尖底と丸底に近い (580・582) ものが出土している。 3層になると尖底 (584~592) と平底に近い丸底 (593~599) 及び平底が2点出土している。590~592は小型の尖底部で,器壁も薄い。594はE4-19区出土で,若干あげ底状を呈す。 $595 \cdot 598$ と似るが,胴部への立ちあがりが異なる。606は底径7.1cm, 607は7cmを測るあげ底ぎみの平底で,3層上部から出土した。

## Ⅱ類土器 (第70図574・575)

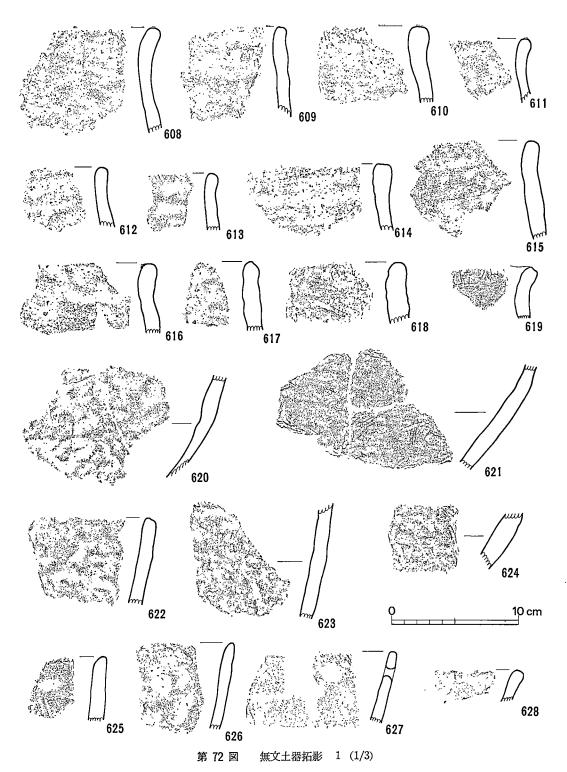
表裏に縦方向の沈線を施すもので2点のみ出土した。574はE4-14区,3層上部出土。やや外反する口縁部破片で、口唇部は平坦に近い。外面は幅5mm前後の二段の沈線が、内面はやや乱れた沈線が施文される。575は、沈線の幅が2mm弱と狭く、一見条痕文の様である。

## Ⅲ類土器 (図版49-2, 第72~74図)

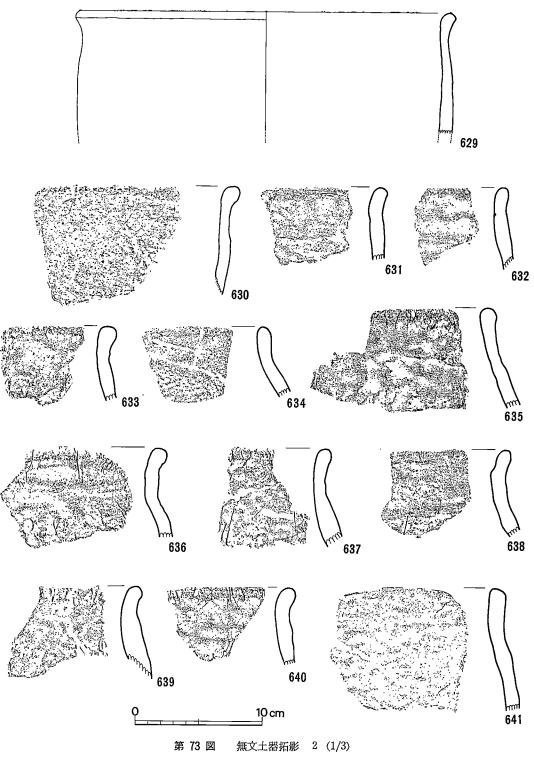
押型文土器に共伴する無文土器の一群で 1,447点の出土を見る。 1 類~1 類を含めた割合は 24%で約1/4の出土量がある。層位別では 4 層に231点, 3 層852点で, 4 層では21%, 3 層で 24%とほぼ一定した数値を示す。

無文土器は器壁が1 cm以上の厚手のものとそれ以下の薄手に分けられる。量的な割合は前者が圧倒的に多く9割以上を占める。

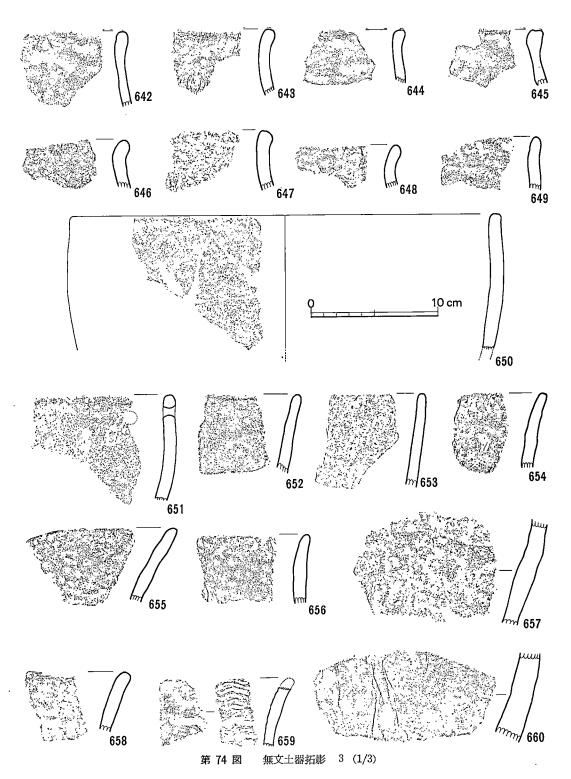
- a 厚手の土器群で、器形はほぼ直口する口縁部(609・614・617)と口縁上半で外反するもの(608・636・638)があるが、両者とも胴部径が口径より大きく張る尖底の深鉢形である。また、両者とも口唇部を肥厚させるのが特色である。第72図は4層出土の土器で608はE6-20区出土。口縁部が大きく外反する資料で灰茶褐色を呈す。615はE4-4区出土で口唇部は肥厚しない。外面に指圧整形痕がみられる。この指圧による器面整形は当類土器に多く、層位的、器壁の厚さに関係していない(616・620・622・626・640・658等)。638はF5-11区、3層出土で胴部が1.5cmと際立って厚くなる土器で639も類似する。636は一見頸部を有する様な器形をしている。これら厚手の土器群には大分県稲荷山遺跡に見られた"コブ"状凸起やリボン状の貼り付け凸起は一点も出土していない。
  - b 器壁が 1 cm未満の薄手の一群で、a に比べ極端に少い出土量である。器形は口縁部が外 反するもの (611・629・630・648) と胴部から内彎ぎみに立ちあがる (626・627・650・651) 二者がある。611はE 4-8 区、4 層出土で、口唇部が肥厚し、外反する。626はE 6-23区出土 で、口唇部がやや薄くなる。627は補修孔を有す。629はE 7-11区、3 層下部出土で、復原口 径29 cm、現存高11.5 cmを測る。口唇直下で薄くくびれるのが特色で、指で外に開いた可能性が



<del>--</del> 83 --

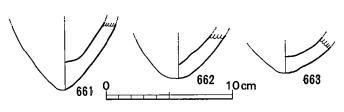


— 84 —



**—** 85 **—** 

強い。内面には指圧痕が残る。 黒褐色を呈す。630・642が類似している。650はF4-2区, 3層上部出土で、口縁部直下 に最大径を有す。口唇部は平 坦面で、部分的に軽く外反さ



、第75図 無文土器底部実測図(1/3)

せている箇所もある。口径は 34.4cmに復原できる。 651は補修孔を持つ資料で,表採品であるが,色調・胎土・器形等から650と同一個体の可能性がある。 655は特に外方に広がる器形をしている。 660は黒褐色を呈し,器壁 $1.8\sim2cm$ と極めて厚い土器で,胎土・色調から押型文に伴出する無文土器と異なるものであろう。 F6-5区, 3 層出土。

c (第75図) 底部を一括した。無文土器の底部は、その破片数に比して、極めて少なく3 点図示できたのみである。いずれも3層出土で661は鋭角の尖底、663は鈍角に近い。しかし、 楕円押型文土器の3層に出土した小さな平底に近い底部は出土していない。

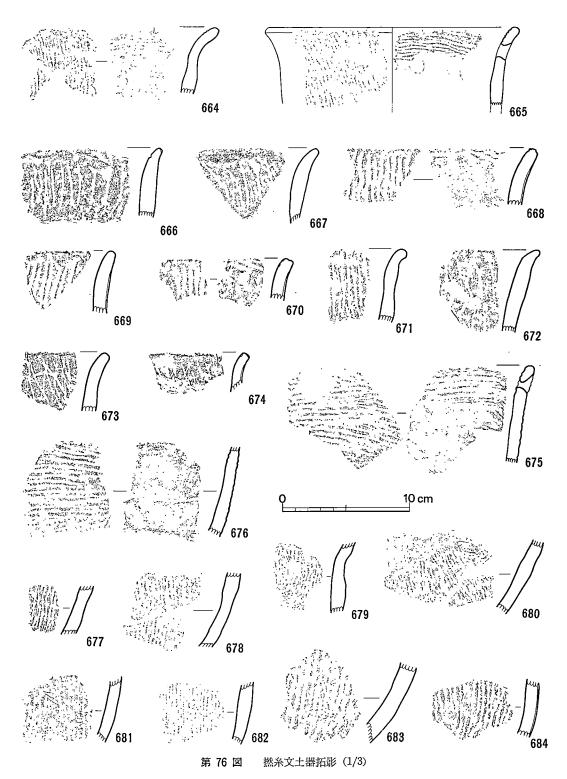
## Ⅳ類土器 (図版50-1, 第76・77図685~691)

押型文土器に共伴する撚糸文土器を一括した。総計53点の出土で、全体の出土量の 0.9%を占めるに過ぎない。層位的には 4 層にわずか 4 点で、3 層に36点と主体を占める。器形は口縁部が外反する土器で、胴部の張りは少ない。底部は出土していないが、他の遺跡出土例からして尖底になるのであろう。664のみが 4 層出土。大きく外反する口縁部破片で、胴部が厚味を持つ。器外面は縦位、内面は口唇部直下から口縁と平行に施文される。原体は L で、内面の施文から原体長 2.2 cm 前後と考えられる。 C 8 - 21 区出土で黒褐色を呈す。 665 も似た器形で補修孔を有す。復原口径20 cm である。撚糸文は縦走、横走、斜走と様々見られ、前述した664・665の如く器内面に横位施文する例もある(668・670・675)。原体の撚りは大部分が一段の L (668・670・677・678等)で R は671が確認できる。また666・667・685の土器は粗く巻いた例で、中には674 の L・R の二原体を用いた土器も出土している。全体に器面が乾燥してから施文した土器が多く、原体を明確にできないものが多い。

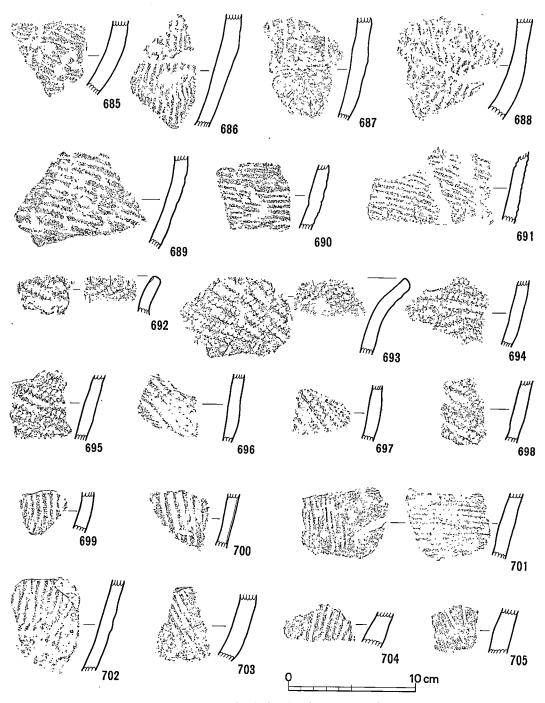
## V類土器 (図版50-1, 第77図692~698)

器面を縄文でかざる土器で8点出土した。層位は3層に5点あり、3層の押型文土器に共伴する資料である。器形は口縁部の大きく外反する深鉢形になると考えられるが、底部は出土していない。692はF7-5区、3層下部出土の口縁部小破片で暗灰褐色を呈す。外面は太い撚りのRL、内面にはやや細いLRと2種の原体で施文される。693は古墳の表土層出土であるが、692と同一個体であろう。他はいずれも胴部破片で出土地区もお互いに近く、同一個体の可能性が強い。

Ⅵ類土器 (図版50-1, 第77図699~705)



— 87 —



第 77 図 燃糸文・縄文・条痕文土器拓影 (1/3)

やはり押型文土器に共伴する土器で、器面を沈線状の条痕文で飾る。一見するとⅡ類の土器に類似するが、施文方向が斜・横走し、不明瞭な土器もあり異なっている。出土量は62点と比較的まとまっており、3層に主体を占める。器形は口縁部破片が無く、不明確である。701はF6-7区、3層下部出土で、外面に縦位、内面に横位の条痕文を施す。703は器内1.3cmと厚手で、底部近くの破片で、斜方向の条痕文がみられる。条痕文土器は稲荷山遺跡でも注意されている。施文原体は貝殻では無く他のものであり、押型文の原体条痕とは異なると思われる。

#### VII類土器 (第80図733)

F7-1区、3層上部から出土した。 胴部小破片で外面はミミズばれ状の細い隆起線が斜行し、内面は横方向の条痕文で器面調整を行っている。 いわゆる 羅B式に編年される資料で当遺跡では唯一の出土である。

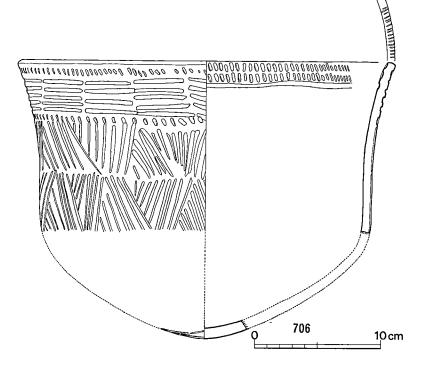
### Ⅷ類土器 (第78図)

曽畑式土器で一個体分のみ出土した。 E 8-15区、 3 層上部出土で、 胴下半部を欠損する資料である。 胴中部から外反ぎみに広がる口縁部を有し、 胴下半から急にすぼまり、 丸い底部へ移行する鉢形土器である。 通常より胴下半から底部への移行が急で、 器肉は胴部で 7 mm、 底部で 9 mmと硬質

な焼成。

器外面は,

行沈線文に比

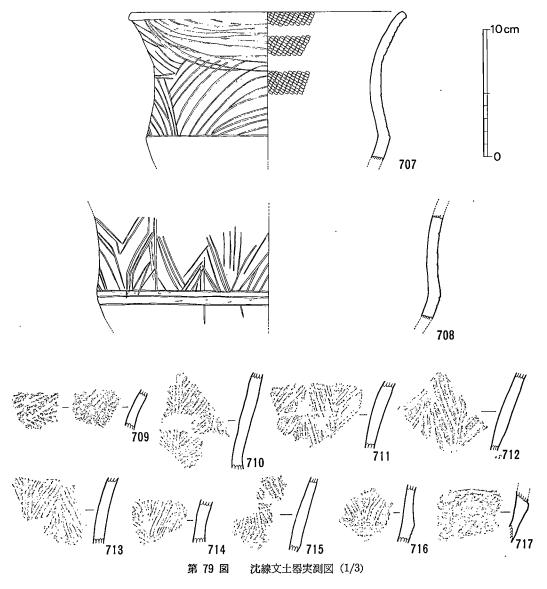


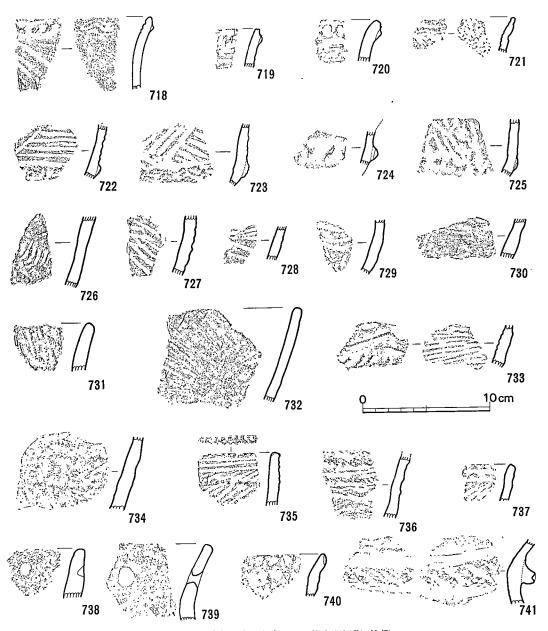
第78図 曾畑式土器実測図(1/3)

べ細線化している。底部にも同種の沈線文がみられる所から,胴下半部の主文様と思われる。 内面は口唇直下に2列の刺突が巡り,その下に一条の波状の沈線文が走る。その下は無文で, 丁寧に横方向のヘラ磨きされている。口唇部には細く浅い刻目が入る。色調は暗灰黒色を呈し, 胎土にはまったく滑石を含んでいない。文様的には曾畑式でも中頃に編年されると考えられ, 胎土に滑石を含まない点も注意される。

## IX類土器 (第79図)

口縁部が弓なりに外反し、胴部で反転して「く」字状に折れる深鉢形土器で、底部は平底に



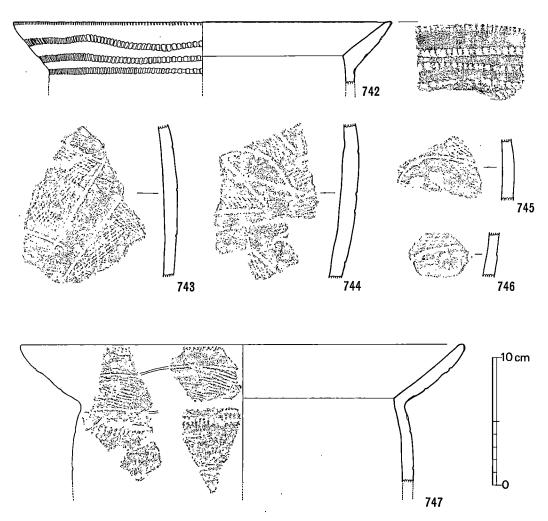


第80図 手向山式・轟式・その他土器拓影 (1/3)

なるであろう。 文様は外面複線の 弧状沈線文ないし, 斜行沈線文, 内面には縄文を 施している。707はE5-21区, 3 層上部出土。 外反する口縁部から反転する胴部までの破片で, 復原口径 22cm, 器肉は口縁部で 6.5mm, 胴部で 9 mm を測る。 胴部屈曲部に段違い状の浅い一条の沈線が巡り, 口縁部は丸味を帯び 下方に張り出る。 器外面は口唇部直下から屈曲部まで, 幅  $1\sim$ 

1.5mmと細く長い弧状沈線文を施す。この施文方法は口縁部に近い方が先に行われている。屈曲部以下は磨耗が著しく不明瞭であるが、縄文を施している可能性がある。内面は口唇部から胴上半部にかけて3段の縄文が帯状施文される。原体はLRで原体長1.7cmである。708は屈曲部を含む胴部破片で、器形は707とほぼ同じ形態であるが、屈曲率がやや弱く、径は大きい。屈曲部には3条の浅い沈線が走る。文様は外面のみで、細い斜行沈線文の組合せで文様効果をあげている。なお、器面には条痕の痕跡が部分的に残っている。709・717が707と同一個体で他は708の破片である。いずれも淡黄褐色を呈し、硬質。

当類土器については出土例がなく、器形的には手向山式に近く、文様は内面の縄文施文を除いて曽畑式の新しい土器とされる土器群に類似している。今後、類似資料の増加が期待される



第81図 塞ノ神式土器拓影 (1/3)

#### 土器である。

### X類土器 (図版50-2, 第80図718~725)

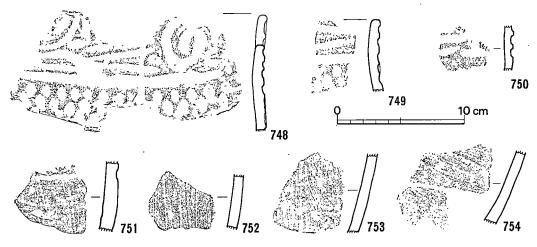
口縁部が外反し、胴部でくびれる器形をもち、口唇部直下くびれ部に貼り付け凸帯を有す土器で、手向山式に含まれる。718~720は口縁部破片で、一条の三角状の凸帯を持ち指先状のくばみを付している。凸帯の下は斜行沈線文、平行沈線文を施す。718は内面に山形文がみられる。722~725は胴部屈曲部の破片で722・723は扁平な凸帯部に山形文を施文する資料で、上部は比較的幅広な平行・斜行沈線文を配す。

### XI類土器 (第81図)

口縁部がラッパ状に広がり円筒形の胴部をもつ塞ノ神式土器である。 2 個体出土した。742 は口縁部破片で,ほぼ一周し,口径 30cmを測る。鋭く「く」字形に広がる口縁部に 4.7cmほど 延び,口唇端部を平坦にする。外面は 3 条の竹管文が波状ないし平行に巡り,口唇部にも刻目が入る。743~746 はこの土器の胴部破片で沈線文間に綱目状燃糸文が施文される。 3 層上部出土。747は 6 片の破片からの復原で,口径35cmを測る。 胴部から口縁部の屈曲はやや緩く,内 彎ぎみに長い口縁部が付く。文様は口縁は沈線文に燃糸文を施し,屈曲部のやや下にへラ先状工具によるやや長い刻目が一条巡る。 それ以下は磨耕により不明であるが,沈線が見られる所から燃糸文が施文されたのであろう。口唇部にも刻目がある。 E 5 -10区, 3 層出土。 以上の 2 点は塞ノ神式でも貝殻文が用いられていない点 A 式に含まれる。

### XII類土器 (第80図726~741)

所属不明の土器群を一括した。726~729 は複線の沈線文が 施される土器である。 X類に含まれる可能性がある。 731・732 は貝殻条痕文土器で口縁部破片。 734は拓影がはっきりしないが、浅い条痕文間に針状の微細な刺突文がみられる。 735はほぼ直口する口縁部破片。 口唇部



第 82 図 阿高式土器拓影 (1/3)

とその下 2 cmの所に凸帯があり、その間に幅 2.5mm程の平行沈線文と斜行沈線文が、下の隆帯以下にも斜行沈線が施される。隆帯及び口唇部には刻目がある。746は胴部破片で 3 条の隆帯があり、いずれも浅い刻目が施される。両者とも E 4-5 区、3 層上部出土で同一個体であろう。器形に差異があるが、鹿児島県平栫遺跡出土の土器(平栫 II 式)に文様構成が類似する。737は別個体であるが同じ文様構成を持つ。739は無文土器で補修孔を有す口縁部破片で、II 類とした無文土器群と胎土・焼成で異なる土器。 II 類より時期的に下るものであろう。740は赤褐色を呈し、口縁部の外反する土器で、器外面全体に円形に近い刺突文が施される。741は胴部上半の破片で「く」字に大きくくびれる。このくびれ部に 1 cm と部厚い貼り付け 凸帯を持ち、凸帯部は斜めの沈線を施す。

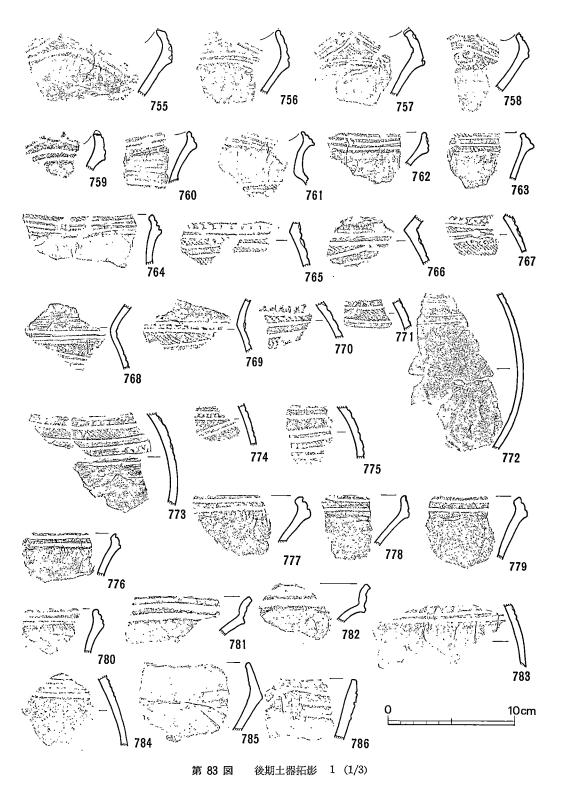
#### XⅢ類土器 (図版50-2, 第82図)

阿高式土器で暗赤褐色を呈し、胎土に多量の滑石を含む。748は2個の台状凸起を持つ口縁部破片、凸起部は逆「の」字状の太い沈線文が、口縁上部の幅1cmの沈線を境に上は沈線、下は指状長円形文に分けられる。器肉は比較的薄く8mm内外である。749は同一個体。750は別個体の胴部破片で沈線文は無文である。751~754は胴下半の破片で縦ないし斜方向に浅い条痕文が施される。

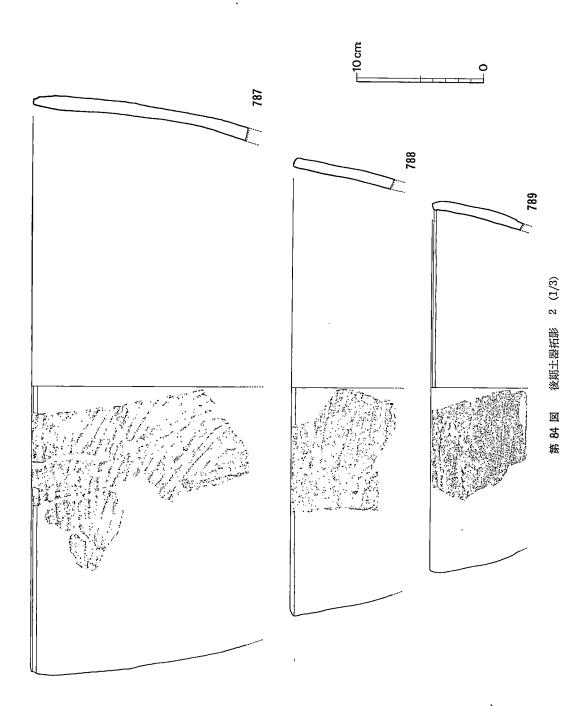
# XIV類土器 (図版51, 第83~87図)

後期に編年される土器群を一括した。土器は精製・粗製の別があり、土器は  $\mathbf{a} \sim \mathbf{f}$  に細分できる。

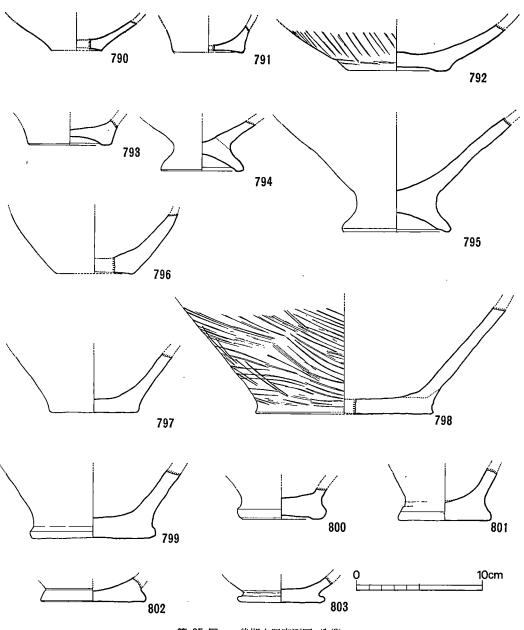
- a 磨消縄文によって飾られる土器で、波状口縁と平縁口縁の両者がある。 $755\sim761$  は前者に属し、外開きの口縁から反較して内彎し、口唇部にいたる器形で、 $757\sim759$  は鼻状の小凸起を有す。また、758 は巻貝を用いたと思われる「ノ」字状刺突文がみられる。 $762\sim764$  は平縁で軽い「く」字口縁部を有す。764 の様に沈線の途中に直角方向に短線を入れる。 $765\sim772$  は胴部破片で、いずれも沈線文間に縄文が看取される。766は「x」状文が、及び頸部に連点文(刺突文)がみられるのが通常である。772 は貝殻疑縄文である。
- **b** 沈線文のみを主文様とするもので、いずれも平線の口縁部である。口縁部が「く」字に 内彎するもの(776~780)と外反するもの(781・782)がある。後者は時期的に下る土器である。
  - c 785は無文土器で、大きな「く」字状の口縁部を有す。
  - d 786は三本沈線が施文される土器で瀬戸内系の土器であろう。
  - e 精製土器の底部を一括した。790~796で790は X IV-1 の底部。
- f 器面を貝殻条痕文で整形する粗製土器 (第86・87図, 804・805・808~822) で, 器形は口縁の内彎するもの (708~789, 804等) と, 外反する (805, 813~819) 二者があり, 条痕も木目の荒いもの (787・788) と細かいもの (805・813等) がある。この種の土器の底部には797



— 95 —

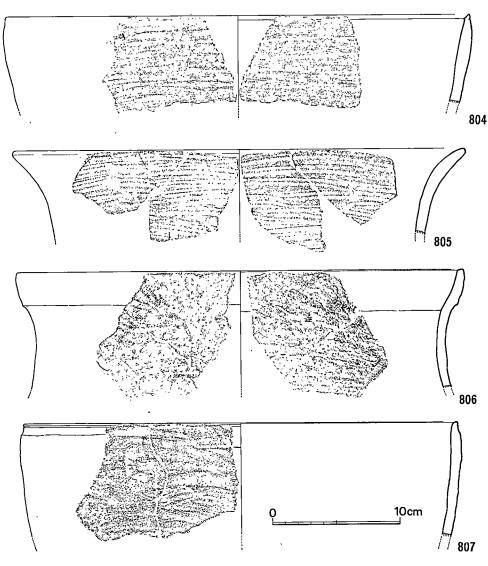


~803がある。端部が張り出すものと普通の平底が存在する。 XV類土器(第86図806・807, 第87図823・824, 第88図) 後期終末から晩期前半の土器で精製・粗製の別がある。

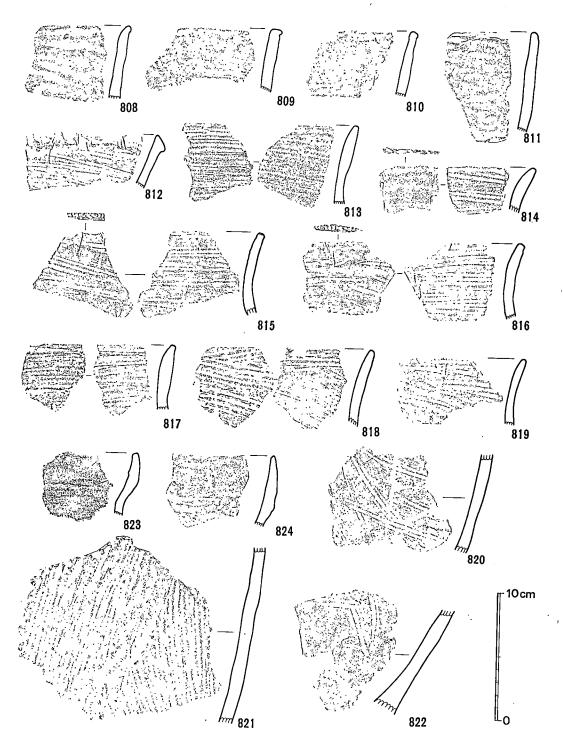


第 85 図 後期土器実測図 (1/3)

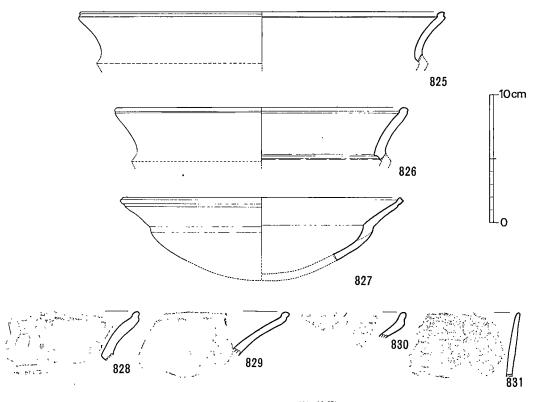
- a 磨研精製土器を一括した。 胴部で屈曲し、 外反ぎみに広がり 口唇直下で反転する浅鉢 (825~830) と直立する 口縁の深鉢 (831) がある。 前者は 口唇部直下の内・外面に見られる 沈線文が特色である。831は器肉 4 mmと非常に薄手の磨研土器。
- b 口縁部付近が内彎し、軽い稜をもつ粗製土器 (806・823) とほぼ直口する 807の二者がある。器面は浅く、荒い条痕文がみられる。後期最終末から晩期前半に位置付けられよう。



第 86 図 後・晩期土器拓影 1 (1/3)



第 87 図 後· 晩期土器拓影 2 (1/3)



## (2) 石 器

出土した石器は総数(削片を除く)10,461点に達する。グリッド別,層位別出土量は表7の通りである。その内主要な石器1,645点については表8に示している。使用された石材は,黒曜石・安山岩・チャート・石英・流紋岩・砂岩・玄武岩・緑泥片岩・蛇紋岩・花崗岩等であるが,その内,黒曜石が約80%と大部分を占めている。次いで安山岩が約17%を占め,両者で実に97%に達する。

石器の種類は石鏃・尖頭状石器・石匙・掻器・削器・石斧・礫器・磨石・石皿・ドリル・刃器等豊富で、なおかつ点数が非常に多い点は土器と共に当遺跡の生活環境の良さを物語っていよう。

出土石器については大きく縄文早期の押型文期と後・晩期に伴出するものに分けられる。ある種の石器(鍬形鏃とかつまみ形石器等)については時期が限定されるが、削器等については不明確な点が多いので、器種別の分類に依った。また、遺物の量が多いので、なるべく多くの石器についてこれを図示する事に務めた。

表 7 グリッド別石器出土量

	_			<del></del>	7	ا س ا 		<b>нн</b> 1-1-		1			
	д-, п. ш	3	層	1 =1	ata 1 111	4	層	, =-		7 O			総計
	安山岩	黒曜石	その他	小計 	安山岩	黒曜石	その他	小計	安山岩	黒曜石	その他	小計	ļ
B 8										1	1		2
C 6	40	104	4	145	4	8	1	13		1	1	1	163
7	17	109		126					1	11		12	138
8	25	188	6	218	58	472	9	533	4	33	13	45	808
D 6	28	195	7	226					2			2	232
7	21	97	3	119					10	30	2	41	163
8	48	115	4	165	16	144	5	165	15	64	6	79	417
小計	179	808	24		78	624	15		32	140	23		1,923
E 3	4	2		6					6	28	_	34	40
4	129	634	14	770	3	59	3	63	18	99	5	118	964
5	66	194	12	266	2	4	2	8	9	51		60	340
6	57	268	20	339	83	350	16	441		3		3	797
7	100	599	11	703	23	180	4	206	30	136	8	167	1,091
8	68	298	8	371	19	40		59	74	54	11	130	572
9					3	11		14					14
小計	424	1,995	65		133	644	25		137	371	24		3,818
F 3	20	51	7	74		3	3		18	51	4	73	154
4	138	597	29	746	22	53	4	78	11	107	1	119	962
5	58	258	18	323	2	10		12	9	29	3	38	387
6	95	487	16	587	38	367	10	411	31	159	7	194	1,210
7	62	286	7	351		3		3	9	86	2	96	455
8	30	185	6	219	20	18	2	40	21	138	8	161	428
9	14	12		26								26	26
小計	417	1,876	83		82	454	19		99	570	25		3,625
G 3										2		2	2
4	2	2	1	5					5	24		29	34
5	6	31	6	38					4	46	12	50	105
6	7	40	3	50					25	170	8	203	253
7	20		,						2	15		17	17
8	39	59	1	99	28	29		57	38	162	3	203	359
小計	54	132	11		28	29			74	419	23		770
Н 7		1		1									1
8	19	185	2	206					6	102		108	314
小計	19	186	2	207					6	102		108	315
I 7		7		7									7
8		3		3									3
小計		10											10
合計	1,093	5,007	185		321	1,751	59		348	1,602	95		10,461

石 鏃(図版52, 第90図~第94図) 総計 690点と最も多く 出土した石器で主要石器の 4 割強を占める。部分磨製石鏃 (73)・磨製石鏃 (255) の 2 点を除いて, すべて打製石鏃であり, 第94図217~254は後・晩期の土器に伴出した。石質は黒曜石が最も多く, 安山岩・チャート・

石英がある。黒曜石は大部分が佐賀県腰岳産出と思われ、数点、大分県姫島産に近いものも見られる。第89図は地区別の出土量で、F6区に95点と最大量を示し、次いで、F4区79点、E4区71点、E6区57点出土している。層位的に見えると4層ではE6区23点、F6区20点、C8区10点出土している。E6・F6区は炉跡が4層で検出した6基の炉跡中4基が検出され、遺構に伴出した事を物語っている。C8区は円形竪穴遺構が検出されている。3層ではF4区

		C <sup>4</sup>		56	3 7	7 8
	合語	†		11	2	19
	69			10.0.1	1.0.1	7 • 10 • 2
	その 72	III		11	19	16
E	11 • 4			10.0.1	8 • 1 • 10	10.5.1
T.		71	25	57	42	36
F		53 · 1 · 17	18 • 2 • 5	28 • 23 • 6	32 • 4 • 6	16 · 8 · 12
•	13	79	38	95	42	42
	13.0.0	65.5.9	30.2.6	61 - 20 - 14	30-3-9	30.3.9

※左から、3層・4層・その他出土量

第89図 石鏃グリッド別出土量

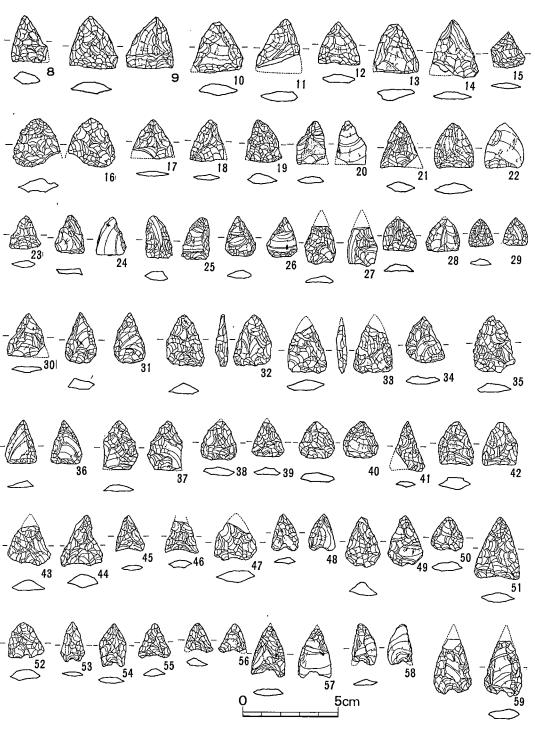
65点, F6区61点, E4区53点, E7区32点等の出土量がある。やはり遺構の検出された地区に多い結果が出ている。

出土した石鏃は形態により平基式と凹基式に大別できる。いずれも無茎である。

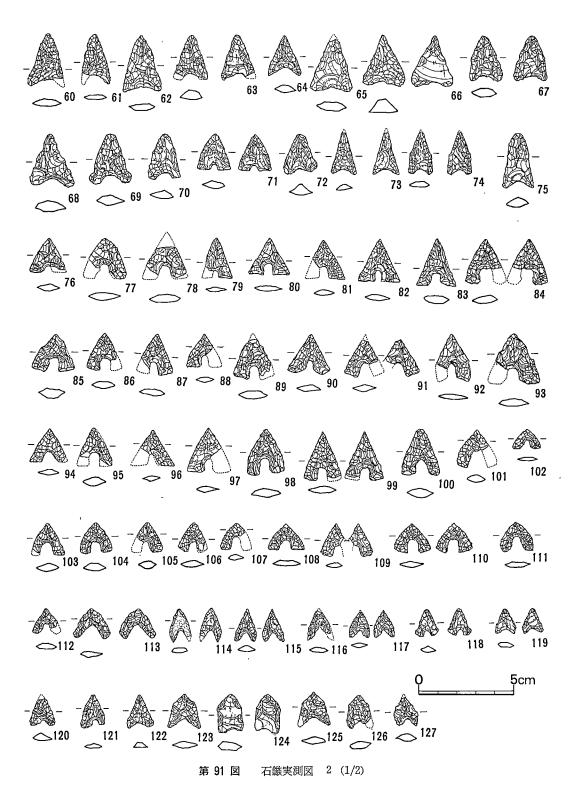
平基式は8~42・218・220・223・236・238が該当し、8~42までが押型文土器に伴出し、他は後・晩期の所産である。大形で正三角形に近い9・10、側縁が外彎し、正三角形12に近い28・38・40や二等辺三角形の11・14・36・39・219・220等がある。有肩の鏃は8・15・20・37・42があり、15は左右非対称に肩がついている。8はF5-24区、3層中部出土でチャート製片側辺の肩部以下を欠損している。素材となった剝片は打点と反対の末端部を鏃先とする22・31・34・36・37や、横長の剝片の一側辺端部と用いる24・29・236・238等があるが剝離が全面に行き渡っているため、不明のものが多い。255は先端を少し欠損する硬砂岩製の磨製石鏃で全長4.7㎝を測る。これのみ弥生時代の所産で粉れ込みであろう。

凹基式は基部の抉りの浅深により数種に分けられるが、形態変化の差がかなり大きく分類が 困難な石鏃も多い。

- a. 基部が弧状に抉れるもので、脚部を明確にもたない。 $43\sim51\cdot55\cdot56\cdot62\cdot66\cdot73\cdot75$   $\cdot124\cdot221\cdot223\cdot253$ 等が該当する。 $43\cdot44\cdot47$ は部厚な剝片を用いている。51は当類の完形品。  $\mathbf{E}$  7 -10区、4 層出土で黒曜石製。全面にやや大きめだが丁寧な剝離を施している。75は乳白色の黒曜石で姫島産か。
- b. 基部に浅い梯形の抉りを有するもので 52~54・57~59・69~72・74・126・127・187・206・226・252が該当する。 57はE 4-4 区, 3 層下部出土で黒曜石製・打点部をカットし,やや厚味のある先端部を有す。 54・74・126・127は両肩の石鏃で,特に74は片面の体中央部を磨



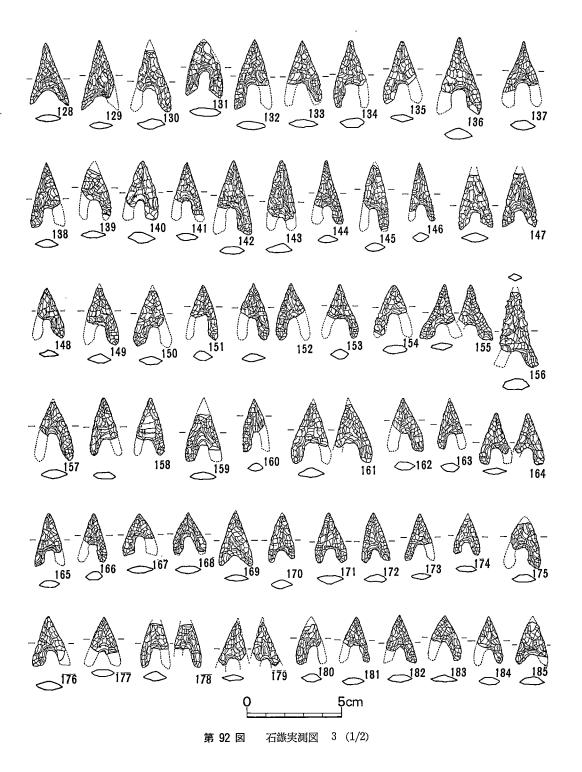
第 90 図 石鏃実測図 1 (1/2)



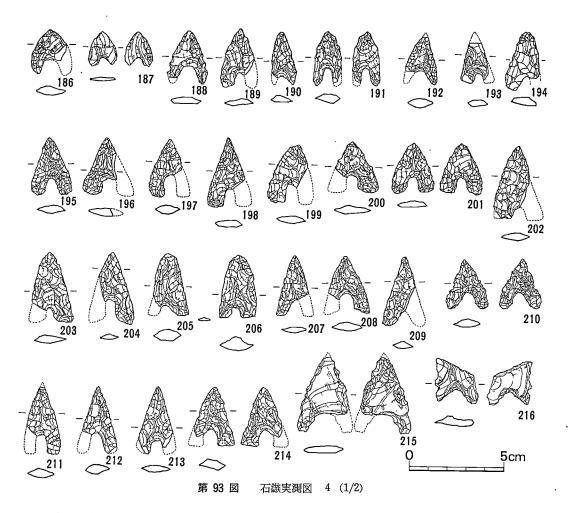
-104 -

## 表 8 出 土 石 器 一 覧 表

	7	ī	鏃	<i>3</i>	i j	 状 器	播	· 肖	间器	7	5	斧	磷	<del>-</del>	器	磨	・敲	石	石く	ぼる	皿 み石	Ā	E	石	]	ドリ	ル	7.	i 7	核	天	J 岩	뭄	つる	まみ	形器	7	· のf	也	先	土器	7	
	3層		その他	3 層	4 層	その他	3 層	4 層	その他	3 層	4 層	その他	3層	4 層	その他	3 層	4 層	その他	3 層	4 層	その他	3 層	4 層	その他	3 層	4 層	その他	3 層	4 層	その他	3 層	4 層	その他	3 層	4 層	その他	3 層	4 層	その他	3 層	4 層	その他	合計
C 6	10	•	1		•		2	•				1				3										-				1													18
7	1		1				3	1	2								•											1													,	1	10
8	7	10	2	1		1	18	6	4		1	3		1	1	1	2	1									1	6	3		2		1			1		2	-		•		75
D 6	10		1				2			1			1			2												1						1									19
7	8	1	10			1	7		1	1			1		1													1			1												33
8	10	5	1			1	3	2	6	1		4	1					2							1			2		2			3				1			-			45
E 4	53	1	17	3		2	30	3	2	2		3	1	1		2		1		1		2			1			5	3	4	1									_			138
5	18	2	5	1			18	3	1	1			1			4							_					5			1									3		1	61
6	28	23	6	1	1		37	23		3	2		2				5			1		1			1			6	6	1	2			1									150
7	32	4	6	4		1	10	)	3	3		3	1		1	3	1	3										4		1	4	_	3	1		2				1		1	92
8	16	8	12	1		1	2	2	10	2		5	1		1			1			1		_	1			1	1	1	8	3		2	2		1							83
F 3	13			1			5		3	1						3									1			1.		3	2		1										34
4	65	5	9	2			30	2	11	3	1	1	4	_		8						3			1		1	7	1	4	2												160
5	30	2	6	1			12	2	2	3		2	1			5		1	1			1						8	1				1										79
6	61	20	14	3		1	41	. 5	14	1		1	2	1	1	4	3	1	1			1			2	_		.6	6	5	4	1	2	<b>5</b> .	1		2			3		1	213
7	30	3	9	5		1	13	1	1	2		1				1						1			2		1	5	1	2	9		2	2		2				1			95
8	30	3	9	1		8	12	1	1	1		4				1		2							1			4		6	9		17	3		4							117
その他	11	4	57	2		23	13	2	32	1		5			1	3		5	1	•				1				8		18	9		19			3	1		2			1	222
Λ ≝1	433	91	. 166	26	1	40	258	50	93	27	4	33	16	3	6	40	í1	17	3	2	1	9	_	2	10	_	4	71	22	55	49	1	51	15	1	13	4	2	2	8	_	5	
合計		69	0		67			40	l		64			25			68			6			11			14			148	1		101			29			8			13		1,645

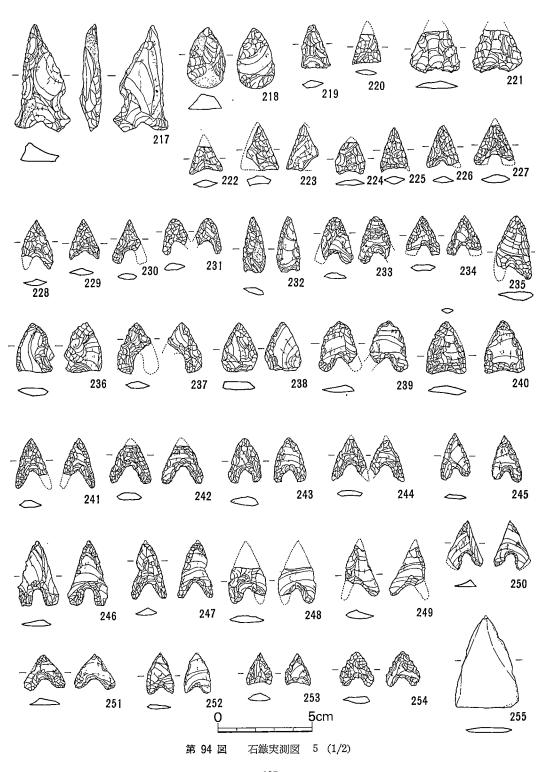


- 105 -



いた部分磨製石鏃で本遺跡では1点のみでF8-I2区、3層上部出土。69はチャート製の完形品でE4-I3区、3層出土。 先端部は丸味を帯び、 脚部が外方に張り出すのが特色。 いわゆるトロトロ石器的な 要素を持っているが、 先端部の磨きが 顕著でない点、 一応、 石鏃とし扱かった。

- d. 長さ $1.2\sim1.6$ くらいと小型で、二等辺三角形を呈すもので $114\sim122$ が該当する。鋭い先端部と、 側辺に細かく丁寧な剝離を施こしている。118はチャート製で脚端の形態等69に類似する。 $\mathbf{E}$  5 -18区、3 層上部出土。



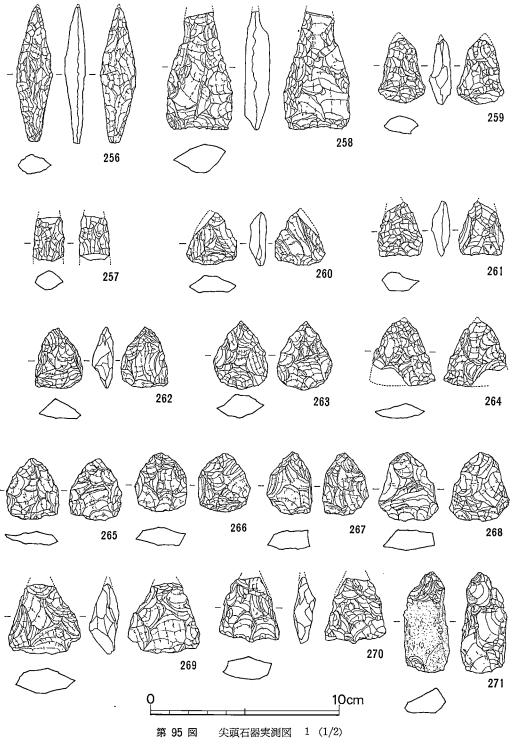
<u> — 107 —</u>

- e. 全体が狭長な二等辺三角形を呈し、挟りが深いものを一括した。 $128\sim185\cdot188\sim192\cdot211\sim213\cdot243\cdot246\cdot247$ 等が該当する。鋭い先端部と、体中央から脚部にかけて外彎するのが特長である。時期的にも c 類と同じく早期の押型文期に 特徴的に出土する( $243\cdot246\cdot247$ を除く)。層位的には  $4\cdot3$  層に偏出しないが、早水台遺跡では c 類より先行して出土するとされる。128 は安山岩製で、 E 5-9 区、3 層下部出土の完形品。 抉りが他に比べ深い弧状をなす点異なっている。全長 3.2cm、厚さ 3mm。 146 は長さに比べて 脚端幅が 1.4cm 内外に狭いもので側縁は鋸歯状を呈し、 当類には鋸歯状の資料が  $145\cdot147\cdot155\sim158\cdot178$  等多く認められる。
- f. 台形状を呈す異形の石器 (216) で、明確に脚部を作り出しているので石鏃として扱った。片方に寄った先端部で、傾斜した体部へは自然面が残る。横長、寸づまりの剝片を利用。 この他に後期~晩期前半に伴出する石鏃(第94図)がある。脚部の形態でa~e類に含めたが素材によって、いわゆる剝片鏃と称される一群を含んでいる。239~252で刃器状の剝片から一種の工程(つまみ形石器が残される)を間在して整作される。従って、剝片の末端部が必ず石鏃の先端部となっている。240~245 は表面の剝離調整が丁寧で、つまみ形石器を伴なわない可能性が強い。

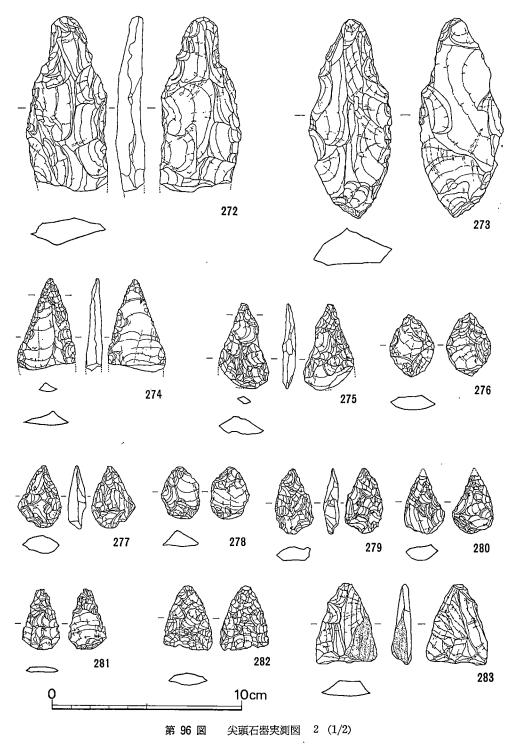
尖頭状石器(図版53-1、第95・96図) 石槍及び剝片の先端が尖り、石鏃より大形で断面が厚いものの二者がある。256~271が早期の押型文土器に伴出し、以下283までは後期を主とする時期であろう。256・257はいずれも打製石槍で256は先端を若干欠損するほぼ完形品。柳葉形を呈し、中間部に最大幅を有し、基部は平坦。全長は7.2cm程で、断面は0.95cmと部厚い。C8-22区、3層下部出土で安山岩製、257も同種の胴部破片。類例は長崎県岩下洞穴に出土しているが本遺跡では磨製のものは無い。他は尖頭状石器で、258は先端部を欠損するが幅広の基部を有し先端になるに従い細く、尖る。259は舌状の基部を有す資料で、先端部を欠損する。先端近く及び基部は細かい剝離調整を行っている。体部は若干磨いた箇所がみられる。E4-25区、3層下部出土でチャート製。260~270は三角形に整え、先端が尖る定型化した一群で、両面とも荒い剝離調整が施こされる。押型文期に特徴的に出土する。石材は黒曜石(261・264)・安山岩(262・269)・流紋岩(265)等でいずれも3層出土。271は黒曜石の原面を大きく残す剝片の一端を尖頭状に整えた石器。

273 は木葉形を呈し、断面 2cmと部厚く三角形をなす。器面は  $4\sim5$  回の荒い剣離の後、先端及び基部に細かい調整を加える。 F8-5 区、3層直上出土で安山岩製。274は基部側が欠損し全形は不明だが、縦長剝片の末端部を先端とした石器で、周線に細かい加工を施し特に先端部は入念。 D8-9 区出土で黒曜石製。  $275\cdot278\cdot281\sim283$ は基部が平坦な尖頭状石器で281・282は石鏃に近い。  $276\cdot277\cdot279\cdot280$ は基部が尖るか舌状に近く張り出るもの。

異形局部磨製石器(図版53-2, 第97図) 俗にトロトロ石器と呼ばれ, 押型文期に散見する

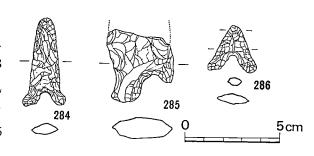


<del>---</del> 109 ---



— 110 —

資料である。チャート製で全体が磨かれ、丸味を有す。3種・3点が出土した。284はE5-25区・4層出土の完形品で全長4.6cm、脚端部幅2.3 cm、厚さ0.65 cmを測る。頭部は丸く、脚部にかけて徐々に幅広になる。脚部は両外方に張り出す。285は下半部の破片資料でE5-11区、3層中部出土。片脚が幅広で大きく、

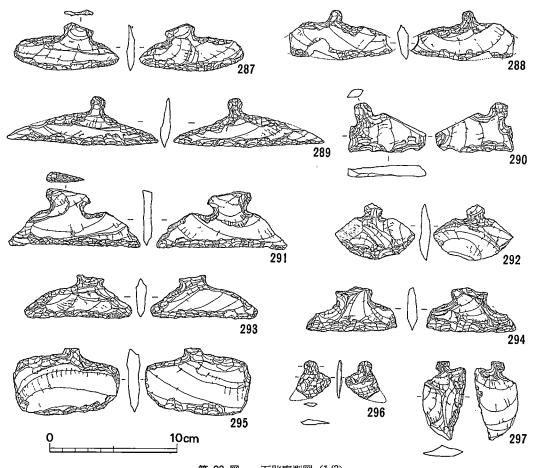


第97回 異形局部磨製石器実測図(1/2)

反対側は小さい。脚上部の幅は3.4cm, 断面は1.1cmと部厚い。全形は推定せざるを得ないが愛知県総濠遺跡出土例(註1)の様に上端が直線に近いものであろう。286はF4-6区, 3層下部出土で完形品。全形はC類とした石鏃に類似するが全体が磨かれている。全長2.4cm, 脚端部2.5cm, 厚さ0.55cmを測る。異形局部磨製石器は最近, 県内でも出土例が知られ当遺跡以外では福岡市蒲田遺跡, 浮羽郡吉井町法華原遺跡, 山門郡大道端遺跡に出土している。九州内では計9ヵ所の遺跡に知られる(註2)。

石 匙 (図版54-1, 第98図) 13点出土した。石質は296を除いて安山岩製。297の縦型石匙を除いていずれも横型石匙で押型文土器に共伴し、3層出土。刃部の形態から外彎刃・直線刃・内彎刃の3種に分けられる。

- a. 外彎する 刃部を有するもので 287~289・292・296で292 を除いて打瘤部をつまみ部としている。287は F 7-4 区、4 層出土で、つまみ部上に原面の打面が残る。外彎刃ではつまみ部が幅広の唯一の例である。 289 は両端が鋭く尖る例で幅 11.9cm を測る。288 も似た形態であろう。 刃部・つまみ部の加工は入念に施こされている。 292 は平行四辺形状を呈し、前述の様に打瘤部が刃部側にくる例。 刃部の加工は片面のみで、自然面を片側に残す。 296は唯一の黒曜石製で E 7-18区出土。 刃部に対しつまみ部が斜めにつく特異な形で、 片縁を欠損する。 刃部加工は片面のみ施こされる。
- b. 刃部が直線をなすもので 290 は F 8 -10 区出土。 剝片剝離方向と 直角につまみ部を付ける。つまみは極端に片寄っている。 294 は F 6 -8 区, 3 層下部出土。幅広はつまみ部が付く。 295 は F 8 -16, 3 層出土で長方形の剝片に小さなつまみを付ける特異な形態を有す。 刃部よりつまみ部側に 入念な加工を 施こしている。 297 は唯一の縦型石匙, D 8 -22 区出土で後期の所産。 縦長剝片の打瘤部側に小さなつまみを付ける。
- c. 若干内彎する刃部を有する。291・293と2点出土した。291はE6,3層中部出土で極端に幅広なつまみ部を付ける。打面部には入念な調整が施こされる。293と比較的幅広なつまみ部を持つ。



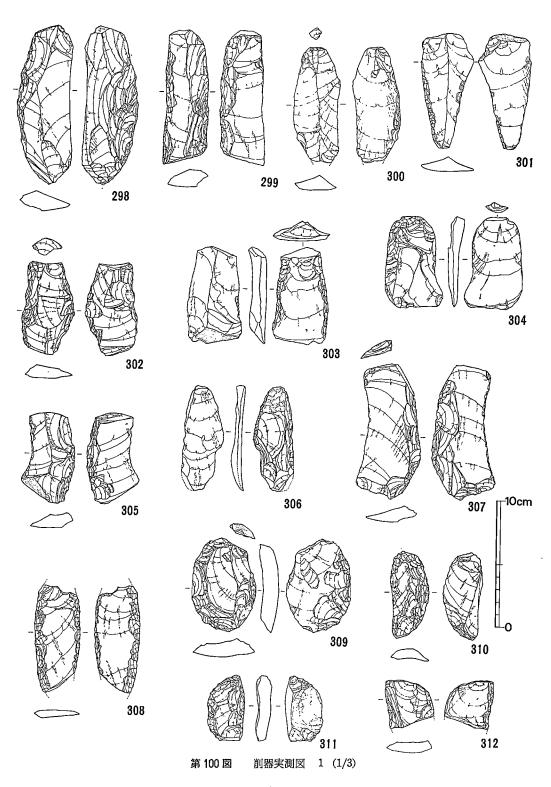
第 98 図 石匙実測図 (1/3)

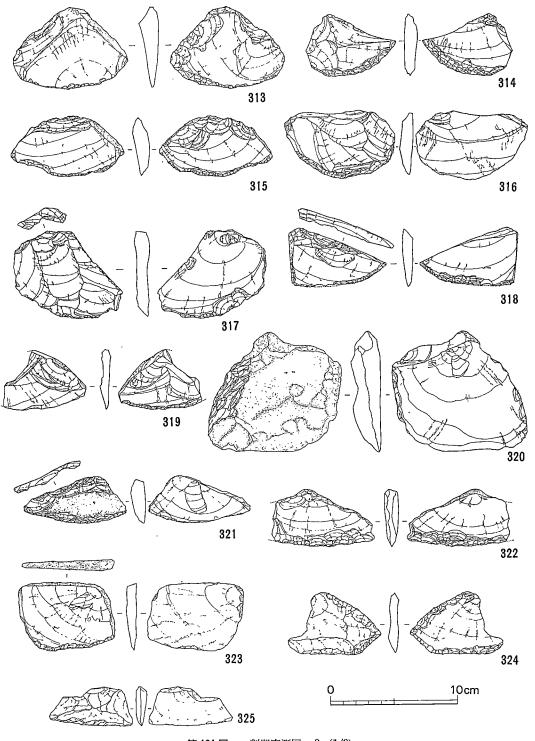
削 器 (図版54-2・55-1, 第100~104図) 総数401点出土した。この内には搔器・石匙(13点)含まれる。地区別ではE, F-6 区に60点と, 圧倒的に多く, 次いでF4が40点, E4区

35点の出土量をもつ。 4層ではE6区23点, C 8区6点と石鏃の場合と同様遺構に伴出している。 3層ではF6区 37点, E・F4区 30点となる。時期的には298~342が早期の押型文土器に共伴し、343~366が後期以降の所産である。早期に伴う削器は素材から縦長剝片を用いる縦長の削器 a, 幅広の横長剝片を利用するb, 不定形剝片を用いる c, 大型の剝片を用いるdの4分類出来る。

		C,	1 !	5 (	ĵ ′	78
	合語	lt		2	6	28
	40 その			2.0.0	3.1.2	18.6.4
	47	167		2	8	11
E	13 • 2	•32		2.0.0	7.0.1	3.2.6
_		35	19	60	13	14
F		30.3.2	18.0.1	37-23-0	10.0.3	2 • 2 • 10
•	8	43	16	60	15	14
	5.0.3	30 • 2 •11	12.2.2	41 • 5 • 14	13 • 1 • 1	12 · 1 · 1

第99図 石鏃グリッド別出土量





第 101 図 削器実測図 2 (1/3)



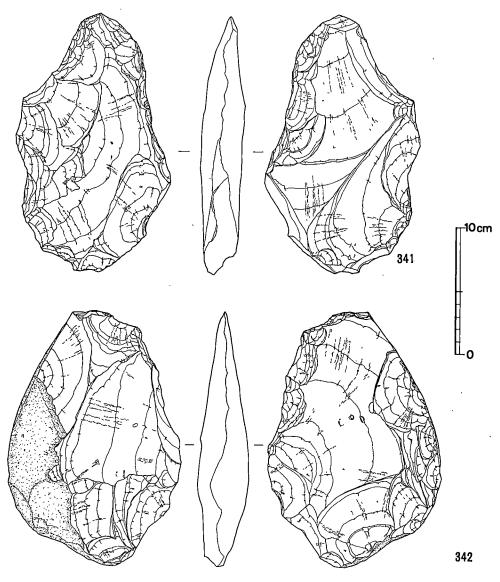
a. 縦型削器と呼べる様な定型化した削器で298~312が該当する。石質はすべて安山岩を用いる。縦長剝片を用いるのが通例であるが298・311は横長剝片である。素材となった縦長剝片には、表面に1条の稜を有すもの(298~301・303・305等)が目立つ。刃部の形態から外彎刃と直線と二者が存在する。

外彎刃の削器には、外彎する一側辺に加工を施こし刃部とする  $298 \cdot 300 \cdot 303 \sim 307 \cdot 311$  とほぼ全周に加工される  $308 \sim 310$  がある。 298 は F6-18 区、 4 層出土で、表・裏両方からの加工で刃部を形式する。 一方、直線刃には  $299 \cdot 301 \cdot 302 \cdot 304 \cdot 312$  がある。 303 は G3-2 区、 3 層上部出土で、両側縁とも表面から加工を施こし刃部としている。

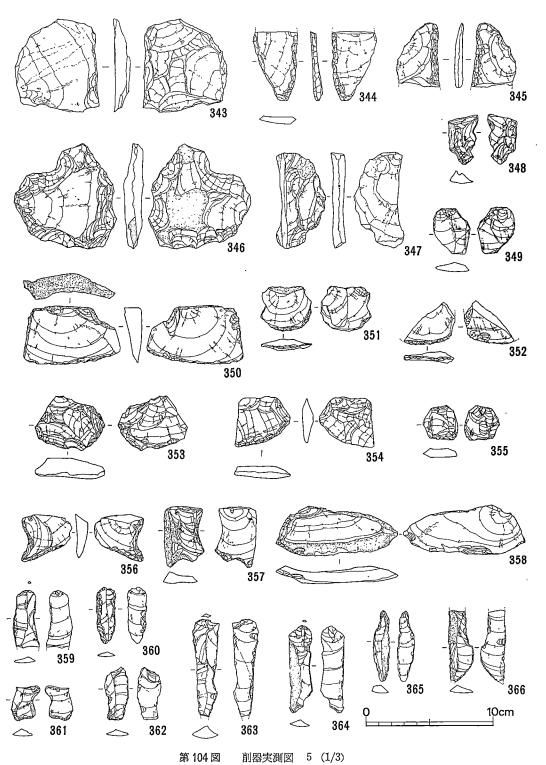
b. a 類に対し横型削器と呼べるやはり定型化した削器で  $313\sim325$ に図示した。幅広の横長 剝片の両端が翼状を呈すのが特長である。素材の剝片の拡がった末端部全体に加工を加え刃部とするため、外彎刃となるのが大多数であるが、 $323\cdot325$  の様に直線刃のものもある。320は 形態的には当類に類似するが、表面がすべて自然面でありその左端を刃部とする点、除外した 方がよいかもしれない。324 は剝片の一側縁と末端部の二辺に入念な加工を施こしたもので、縦型石匙に類似するが、つまみ部のノッチ状の加工が認められないので石匙とするには無理があろう。F2-1 区、3 層下部出土。 $329\cdot330$  も横長で幅広な剝片を用いた剝器であるが、329 は刃部の加工が弱く、330は刃部の位置が側縁にある点相違がある。なお330は黒曜石製。

- c. 不定形の剝片を用いたものないし刃部の加工があまり顕著でない削器で、 黒曜石・安山 岩がある (326~340)。 334 はサム・スクレイパーと呼ばれるものに近く E 4 -14  $\boxtimes$  E 3 層下部 出土で黒曜石製。
- d. 非常に大形の安山岩製剝片を用いた削器で341・342の2点出土した。比較的鋭い各縁に 荒い加工を施こし刃部としている。

後期・晩期前半の土器に伴出する削器 (343~366) には、比較的よく整った剝片の片縁に刃



第 103 図 削器実測図 4 (1/3)



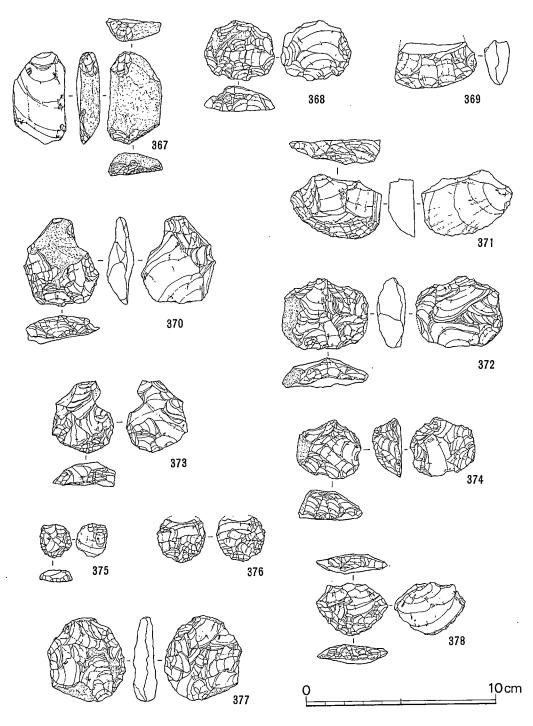
部を持つもの (344・345・351) もあるが、全体的に不定形な 剝片の一部に荒い 調整を加え刃 部としたもの (348・349・358) が多い。一方、 黒曜石製の縦長剝片の 長縁に細かく入念な加工を加えた 削器の出土 (359~366) が 顕著になる。いずれも 表面に 2 条の 稜線が走り、小さな打面部を有す。 359 は E 8-10 区、 3 層上部出土で両縁に 主要剝離面側から加工が施こされる。 365は両端とも尖る資料で表面には自然面が残る。 刃部は比較的弱く浅い。 H 8-16区、 4 層出土。

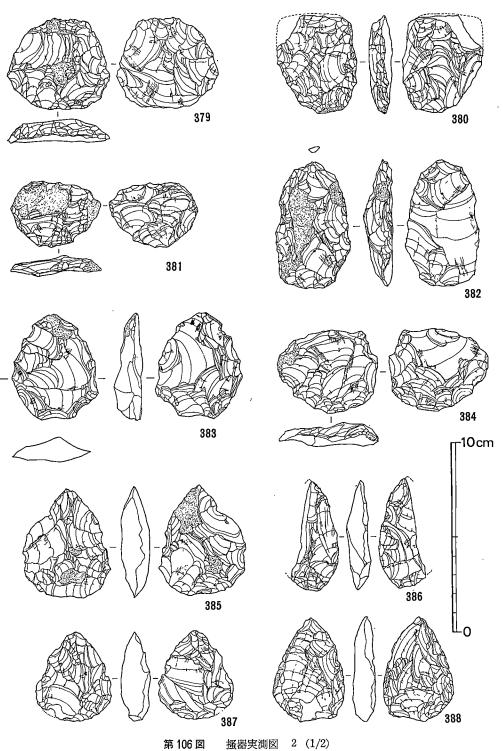
当種の c 類に似た資料として、 剝片の一部に二次加工を加えた石器ないし使用された石器についてはほとんど図示していないが、 削搔の合計 401点の過半を占め、 また剝片として処理した内にもかなりの量がある事を付け加えておく。

播 器(図版55-2、第105・106図) 367~388でいずれも 押型文土器に 伴出すると 思われる。部厚な剝片の一辺ないし全周近くに、 刃遣し状の加工を施こすもので、 両面とも調整剝離があるものとないものがある。 367 は黒曜石製で、 自然面の残る両端に主要剝離面側から加工を加えたもの。 C 7-15区、 4 層出土。 368~371・378は背面にほとんど調整剝離を施こさないもの。 371は E 5-16区、 3 層中部出土で一辺に入念な加工を加えた典型的な例である。 黒曜石製。 378 と同様な良品。 375 は小形だが厚味のある寸づまりの剝片の三方に加工を施こしている。 377~384は大形で、 両面に荒い剝離を施こした 播器で C・8-1 区付近の 3 層中部からまとまって出土した。 片面に一部自然面を残す点に共通性が見られる。 385~388も C 8・E 8 区付近出土で、 一端が尖っている点・形態に相違があるが、 その他はほぼ類似した石器である。 長崎県岩下洞岩の V 層出土のものに類例が見られる。

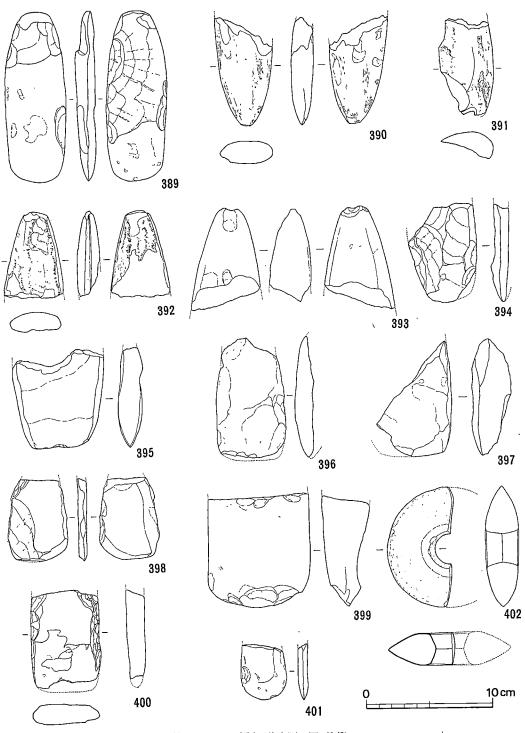
磨製石斧(図版56-1, 第107図) 39点出土した。 内訳は早期の押型文土器に 共伴するもの 11点 (1・389・390・392~395・400), 他の28点は後・晩期の所産 (391・396~401) である。 石質は硬砂岩・緑泥片岩・玄武岩・蛇紋岩がある。形態により a ~ f 類に分けられる。

- a. 短冊型を呈し、幅に比べて長さの長い石斧で1・389の2点出土した。1 (第22図) は9 号石組炉跡出土で石皿・磨石とセットで出土した。389は完形品で全長13.3cm、幅4.8cm、厚み1.6cmを測る。 刃部及び頭部を磨いているが、 片面の中央部は側縁方向からの剝離が残ったまま、閃緑岩製。
- b. 乳房状石斧で390~393で、うち391は出土地点及び層位から後期の所産であろう。いずれも丁寧な研磨を施こしている。いずれも蛇紋岩製。
- c. 蛤刃石斧で394~397・399が該当する。394は刃部のみを研磨し、胴部は敲打による調整、395は節理と平行に研磨し、刃部は鈍い。この2点が早期に伴う。398は玄武岩製の蛤刃石斧で弥生時代の太型と呼ばれるものに比べて幅広である。刃部欠損後、再加工を施こしているらしい。他にも3点ほど同質の破片が出土している。
  - d. 短冊状の扁平磨製石斧で、398は緑泥片岩製。刃部のみ研磨し、鋭い。他に3点出土。

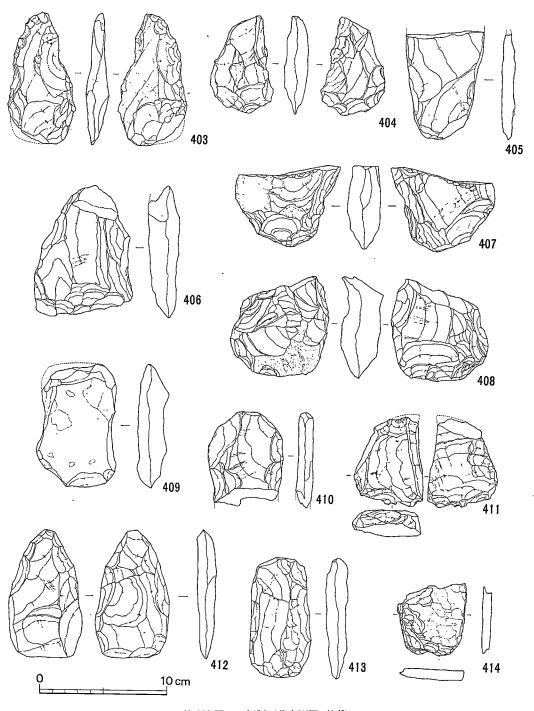




2 (1/2) 搔器実測図



第 107 図 磨製石斧実測 図 (1/3)



第108図 打製石斧実測図 (1/3)

後期に属す。

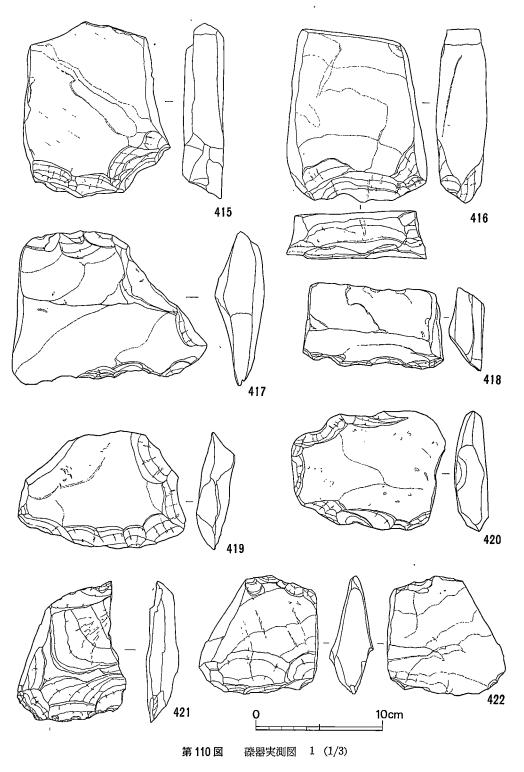
- e. 扁平小形の磨製石斧。401 は E 8 -15区出土で靴箆状を呈す。断面は若干反っている。砂岩製。
- f. 環状石斧(402)で1点出土した。硬砂岩製でE6-23区、4層上部出土の半損品。図版39-1のように押型文土器に共伴して出土した。復原径9.7cm、孔径3.1cm、厚さ2.6cmを測る。全周とも非常に丁寧な磨研を施こして、仕上げている。刃部は鋭い蛤刃状で約61°の傾きを有す。体部は緩やかに張らみ中央部でで平坦になる。棒状具をさし込んだ孔内には明瞭な稜がある。刃部に若干の刃とぼれが観察される。環状石斧の出土は弥生時代に多く、現在全国84遺跡が知られる(註3)。一方、縄文時代の例も22遺跡あり、北は青森県白浜遺跡、南は宮崎県岩土原遺跡とほぼ全国的に出土している。特に後・晩期の出土例が富山・長野県を中心にまとまっている点が注目される。しかし、縄文時代早期まで溯る例は少なく本遺跡を含めて、長野県橋場遺跡出土の打製の環状石斧と宮崎県岩土原遺跡の磨製の3例が知られるのみである。

打製石斧(図版56-1,第108図) 25点出土 した。 早期 に 伴出する 12点(403~408・410・411),後・晩期13点(409・412~414)の出土を見る。 石質は安山岩, 角閃石英岩, 玄武岩等がある。形態により a~d 類に分けられる。

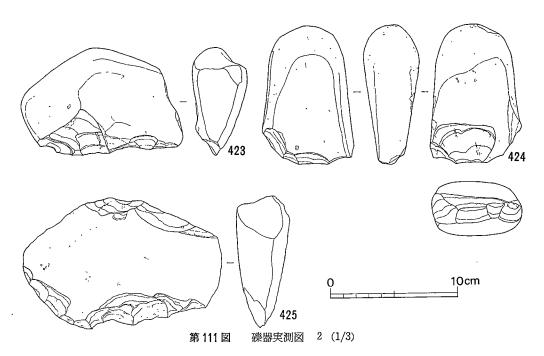
- a. 撥形を呈すもので403・404・406・411・412がある。403は安山岩製で表土層出土。刃器の一端を欠損する。表裏とも2~3回の大剝離で整形した後,周辺の細かい加工を施こす。一見スクレイパー状の刃部を彷彿させる側縁調整を有す。全長10.2cm,幅5.2cm,厚さ1.8cmを測る。404も似た形態であるが一回り小形。F4-6区,3層下部出土で安山岩製。刃部は交互剝離で山形を呈す。全長7.6cm,厚さ1.9cm。406は厚さ2.35cmと厚みのある石材を用いる。側縁は階段状剝離で整形し,刃部は外側からのみの剝離で形成される。D6-7区,3層上部出土。412は後期の所産でE8-7区,3層直上出土の玄武岩質の石材を用いる。完形品で長さ9.9cm,幅5.7cm,厚さ1.4cmと薄手。
- b. 礫核に荒い剝離を加え, 刃部は階段状剝離で形成される。407・408で安山岩製。408は片側からのみ剝離が行なわれ片刃石斧。
- c. 分胴型を呈す石斧で 409 が該当する。角 関石英質玄武岩で、 D8-5 区の 22号墳石室床 面に 置かれていた。 周辺からの 加工 で 整形す る。 刃部は鈍い。 後期である。
  - d. 薄手で短冊型を呈す石斧で 410 が早期, 413は後期, 414が晩期の遺物と共伴した。 410

		. c		5 6	5 1	7 8
	合語	†				2
	25					0.1.1
	その 1	他口		1	2	1
_	0.0	•1		1.0.0	1.0.1	1.0.0
Е		2	1	2	2	2
_		1.1.0	1.0.0	2.0.0	1.0.1	1.0.1
F		4	1	4		
		4.0.0	1.0.0	2.1.1		

第109図 礫器グリッド別出土量



<del>--- 124 ---</del>



は幅 1.2cm と扁平な基部破片で,基部が丸味を持つのが特徴。 413 はD 8-5 区の 表土層から出土し,器面は風化が著しい。基部,刃部側とも丸くなっている。 414 は胴部破片で0.7cm と薄い。

礫 器(図版56-2,第110・111図) 押型文土器に共伴する石器群の一つで25点出土した。 地区・層位別の出土量は第109図に示す通りで、F4・6区に4点と多い外は各グリッドに平均 して出土している。層位別では4層に3点、3層16点の出土を見る。石質は花崗岩・砂岩・凝 灰岩・玄武岩・閃線岩があり、玄武岩質のものが多い。素材により2つに大別でき、刃器形態 によりやはり2つに分類出来る。

a. 板状に割った石材を用いた 礫器(第110図)である。片刃(チョッパー)と両刃(チョッピングトウール)の 2者が存在する。前者は 415・418、後者は 416・417・419~422。415 は青灰色を呈し比較的軟質の石材(凝灰岩)を用いている。片面からのみ打剝が行なわれる。 F 4-6 区、3 層下部出土で、長さ13.5cm、幅11.4cm、厚さ3.2cmを測る。418は C 8-21区、4 層出土で閃線岩製。横に長く、厚みのある板状の礫器。刃部の打剝は比較的細かい。他に 2 点出土している。416は形態は415に類似する礫器で、一側辺に両面から交互剝離を施こす。刃部と反対側は自然面のままである。415と同様当類の良品、E 6-20区、3 層中部出土で長さ13.4cm、幅11cm、厚さ 4 cmを測る。417 は玄武岩質で E 6-20区、3 層中部出土で長さ13.4cm、幅11 cm、厚さ 4 cmを測る。417 は玄武岩質で E 6-20区、3 層中部出土の刃部方向に鋭く尖るもので、刃部の形成は一縁で中央部とそれを鋏んで両側の打剝方向が異なっている。419・420 は刃

部と刃部に接する縁に荒い加工を加え整形している。422はF5-21区,3層出土で,刃部は片刃であり,反対側は両面からの交互剝離を施こすため,山形で両端とも鋭く尖る。

b. 自然の転礫の一端に打剝を加え 刃部を 形成したもので、 刃部以外は 自然面がそのまま残る。423~425 の 3 点のみ出土した。 423・425 は横に長い扇形の原礫を利用し、 その長い一辺に片面からのみ打剝を施こしている。 423 は E 8 -12区、 3 層出土で玄武岩質、全長8. 2cm、幅12.7cm、厚さ4.3cmを測る。 425 は大形で、頭部にも打剝を加え握りやすく整形している。 E 4 -18区、 3 層上部出土で全長 10.2cm、幅15.6cm、厚さ4.2cm。 424は前の 2 点と異なり撥状に近く、縦型になる。原礫の薄い方の縁に両面から打剝を加え、刃部を形成する両刃の礫器で、これのみが、他の礫器に比べ石斧的機能を形態的に有しているようだ。全長10.8cm、幅7.2cm、厚さは頭部で4.4cm、刃部近くで 2 cmを測る。 E 7 -21区、3 層上部出土で硬質の花崗岩を用いる。

当遺跡出土の礫器には、早水台遺跡、稲荷山遺跡で押型文土器と伴出した、刃部を周辺から 剝離した尖頭状礫器は出土しておらず、424を除いて、基本的に幅広の礫器が主体を占め、立 地を間在とした機能的問題を含んでいるのであろう。

磨 石 (図版57-1, 第113図, 第114図442~459) 総数61点出土した。 4 層 10点, 3 層 37点,

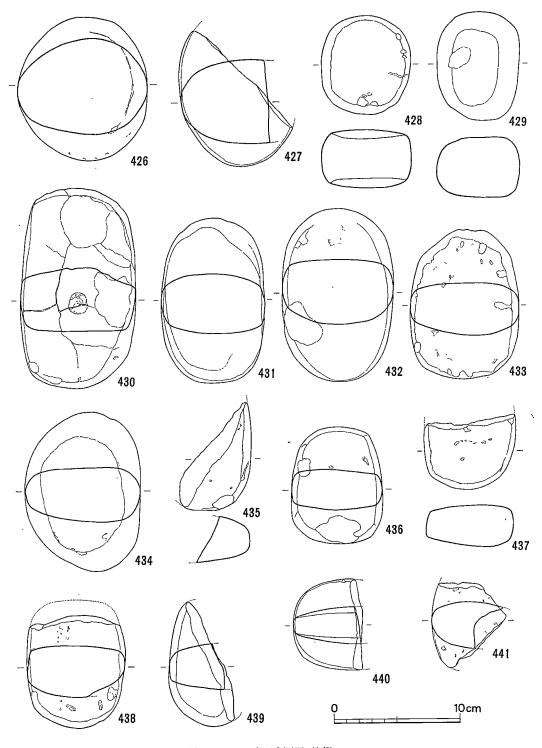
その他からの出土16点である。敲石と合せた地区別・層位別出土量は第112図の通りで、F4-8区に各8点、E7区7点、F5区6点と地区別な差はあまりない。層位的に見ると4層ではE6・F6区に5・3点とまとまり、ここでも遺構と密接に係わり合っている事が判る。また、3層ではF4に8点まとまって出土し、やはり4基の炉跡と関連しよう。使用された石材には花崗岩、砂岩、玄武岩、蛇紋岩があり、花

		. c'	1 :	5 (	6 '	7 8
	合語	lt .		3		4
	68	_ '		3.0.0		1.2.1
	その 8	他り		2		2
E	3.0	•5		2.0.0		0.0.2
E		3	4	5	7	1
F		2.0.1	4.0.0	0.5.0	3.1.3	0.0.1
r	3 8	8	6	8	1	3
	3.0.0	8.0.0	5.0.1	4.3.1	1.0.0	1.0.2

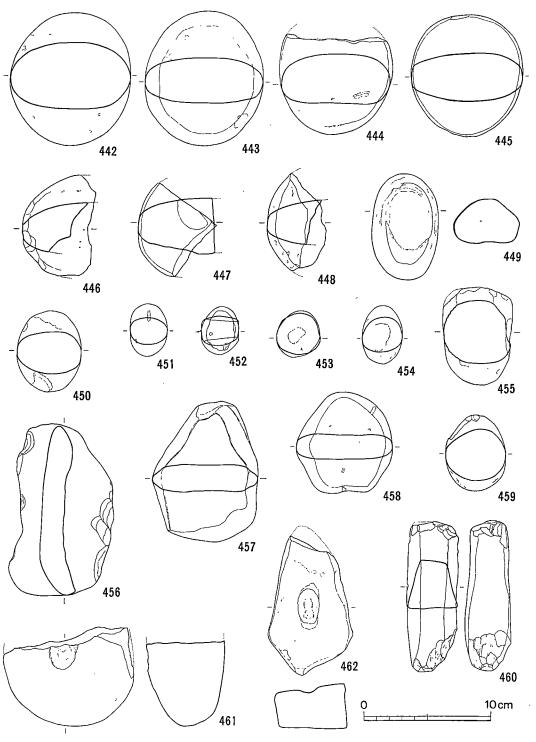
第112図 磨・敲石グリッド別出土量

崗岩,玄武岩が多い。出土した磨石は形態的に多岐にわたり、磨石のみでも良好な資料と成り うる。基本的に円礫と扁平な礫の2者があり、前者が圧倒的に多い。扁平な礫を利用したもの j類を含めて10に分類出来る。時期的に後期に属す遺物は少なく確実なものは図示した450を 含めて3点のみで、他は押型文土器に伴出する。

- a. 円形ないし長円形を呈し、断面が極端に厚いもので 426 が完形品、 E 5-10区、 3 層下部出土で花崗岩製、全面に磨痕が及ぶ。長径11.2cm、短径10.3cm、厚さ7.5cm、重さ1.255 g の 427は長円形で½を欠損する。厚さ6.5cmを測る。 E 5-25区、 3 層下部で433と同一箇所より出土。
  - b. 長円形を呈し c 類に比べて小形のもの。 4 点出土した。428 は E 7 -23 区, 表土層出土



第113 図 磨石実測図 (1/3)



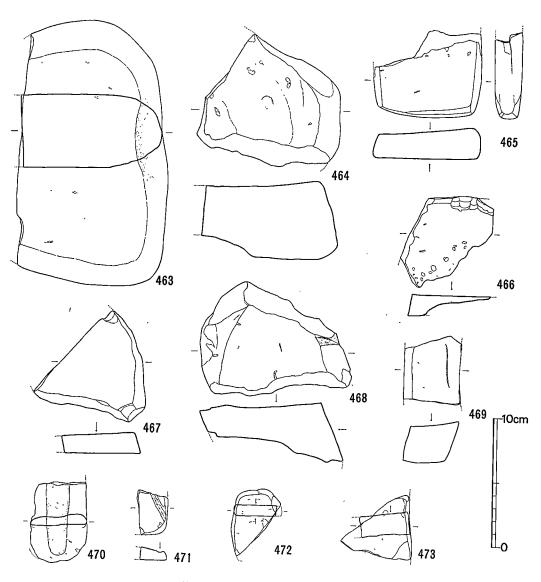
第114図 磨石・敲石・凹石実測図 (1/3)

で完形品,全面磨痕があり、側辺には敲打痕が若干残り、上・下に稜線を持つ。 長径 7.7cm, 短径 7 cm, 厚さ4.5cm, 重さ438 g を測る。429は 3 層下部出土で卵形を呈す。

- c. 長径  $11\sim16$ cm と大きな 長円形を呈し断面に 厚みをもつもので 5 点出土  $(430\sim434)$  した。430は  $F4\sim10$ 区, 3 層下部出土の完形品で上半部が二次的に火を受けている。上下端部に敲打痕がみられる。断面は中央部が盛り上がっている。長径 15.8cm,短径 9.1cm,厚さ 5 cm,重さ 1.085 g を測る。 $431\sim434$ はほぼ類似し,433 は敲打痕が比較的多く敲石としても使用されたのであろう。434は体中央部がややへこんでいる。  $F5\sim7$  区,3 層下部出土で花崗岩製。長径 12.5cm,短径 9.2cm,厚さ 4.3cm,重さ 12.5cm,短径 12.5cm,原さ 12.5cm,原之 12.5cm,短径 12.5cm,原之 12.5cm,原之 12.5cm,原之 12.5cm,原之 12.5cm,原之 12.5cm,原之 12.5cm,原之 12.5cm,后 12.5cm,后 12.5cm,后 12.5cm,后 12.5cm,原之 12.5cm,后 12.5
- d. c類を小型にし、断面が平坦で薄くなるもので $435\sim440$ が該当する。436は完形品で当類の代表例。 F 6-8 区、4 層出土で玄武岩質。全面に磨痕が残り、縁辺に角、稜を持つ。長径9.1cm、短径7.3cm、厚さ3.1cmを測る。440 は破片資料であるが、側辺に磨き稜を有す。その他、破片資料が出土しているが、4 層と3 層下部出土の例が目立つ。
- e. 正円形に近く、4cm 前後の長円形断面を有す。 $441\sim448$ が該当する。442はC6-21区、3 層出土で花崗岩製の完形品。長径10.2cm,短径9.4cmとほぼ円形に近く,当類では5.1cmと最も厚みのある例である。重さ721 g。445は一番特徴の良く出ている磨石で側辺に稜を有す。6-9 区で6 号墳の西南周溝中より出土した。長径9.4cm,短径8.8cm,厚さ3.7cm,重さ700 gを測る。硬砂岩製。当類には9 号石組炉出土の磨石(2)も含まれる。
- f. 小形の長円形を呈し、断面が球形に近い磨石で455・459の他2点出土した。455はC6-25区、3層出土で花崗岩製。長径7.6cm、短径5.3cm、厚さ4.9cm、重さ268gを測る。459はD6-14区、3層上部出土。
- g. 形は f 類と同じだが,断面が扁平なもの。 G 8 4 区, 表土層出土で後期の遺物に伴出した。長径6.3cm,短径5.1cm,厚さ3.25cm,重さ112 g。
- h. 正円ないし 長円形で 長径が 5~cmに満たない 小型の 円礫の全周に 磨痕がみられる事から 磨石として扱った。 断面が やや 扁平なもの  $(451\cdot 452)$  と 球形に近いもの  $(453\cdot 454)$  がある。 452は E6-20区, 4層出土。 亀甲型を呈し縁辺の稜はかなりの磨きべりを物語っている。 長径3.8cm, 短径3.0cm, 厚さ2.3cm, 重さ42g。 いずれも玄武岩質の石材を用いている。
- i. 卵形を呈し,断面が台形状をなす磨石で449の1点が出土した。 E 6 -22区,4 層出土で 閃線岩製。長径8.4cm,短径5.2cm,厚さ3.3cmと軽量。
- j.  $a \sim i$  類の円礫利用と異なり、扁平な礫を用いた磨石で量は5 点と少ない。458はE 5-11区、3 層下部出土で灰色を呈す軟質の石材を用いている。厚さ1.9cm と扁平で、断面は中央部が若干へこむ。磨痕は $456\sim457$ とも顕著に残る。

幅3.6cmと角棒状を呈し、両端部に敲打による剝落がある。断面は台形を呈し、厚さ3.7cm。他に1点小形で棒状のものがD8-11区より出土し、両者とも後期の所産。

凹 石(図版57-2,第114図461・462) 3点出土した。462はE6-14区,4層出土で花崗岩製。平行四辺形に近く,一端を欠損する。中央部に $2.6 \times 1.8$ cm と長円形のへこみがあり,内に2ヵ所の円形の凹部を有す。幅6.7cm,厚さ3.5cm,重さ342gを測る。461はE7-15区,3 層出土で全周に磨痕を持ち正円に近く,6.1cm と部厚い円礫の中央部に径2cm 前後の凹部があ



第115図 石皿・砥石実測図 (1/3)

る。中期の阿高式土器と伴出した。

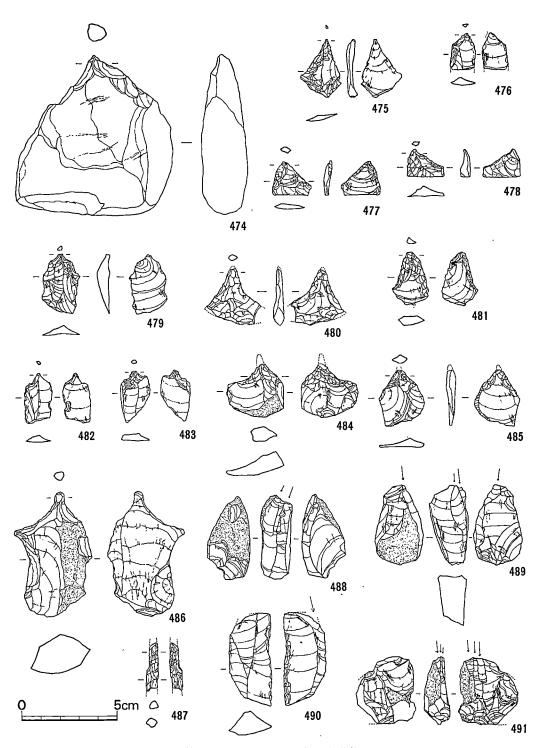
石 皿 (図版57-2, 第115図463・464) 3点出土した。完形品は無い。463は砂岩製の半欠品で鞍形を呈すと思われる。 F 5-4 区、3層中部で、8号石組炉の端に出土した。全長20.8 cm, 厚さ5.7cmを測り、全面の研磨は丁寧に行なわれている。体中央部の凹みはほとんどなく、側縁部は敲打により整形している。第22図3は9号石組炉跡出土で石斧・磨石と伴出した。軽い稜線が巡る。464はE8-8 区、12号墳前室の棺床面より出土した。 花崗岩製の小破片で全形は不明。厚さ6 cmと部厚く、中央部の凹みは浅い弧状を呈す。後期の所産。

砥 石 (第115図465~473) 11点出土した。 4層には無く, 3層に 9点 みられる。 469・470が後期の所産で,他は押型文土器に伴出する。 石質は砂岩。 平砥石と有溝砥石の 2種がある。

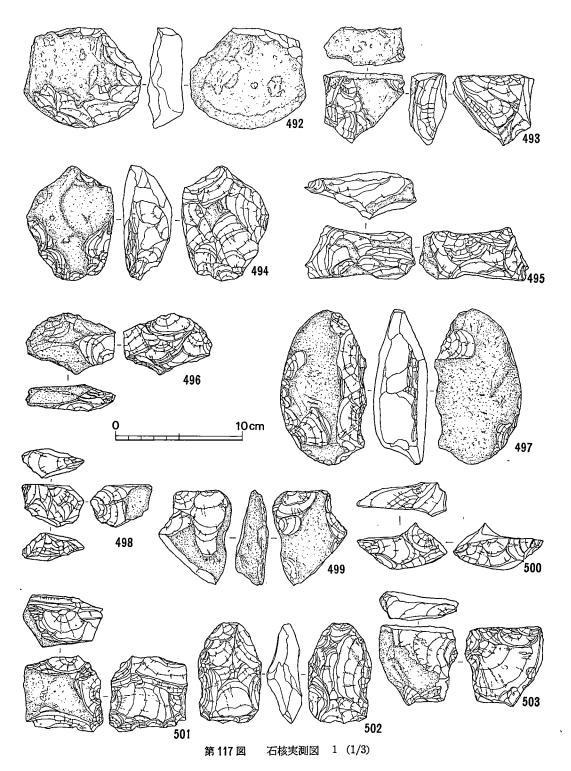
- a. 平砥石を一括した。 465 は F 4-19区、3 層下部出土。 方形に近く、厚さ2.4cm。表裏2 面の研砥面を有す。 466 もほぼ同型で、1 面の研砥面をもつ。 F 5-11区、3 層下部出土。 467 は E 4 と 1 号石組炉付近から出土した砥石の破片で、不正円形を呈す。 厚さ 1.5~1.8cm と薄手である。 472 は小形で扁平な砥石。 厚さ8.4cm と薄手であまり使用された痕跡はない。 469は F 8-11区、9 号墳の 閉塞部から 出土した 角柱状の 砥石片で 上面部がかなり 使用耗りしている。 砥面は非常に緻密。
- b. 溝状の研砥面を有する 有溝砥石と呼ばれるもので 468 は大形で厚手の砥石片。 E 4-23 区, 3 層上部出土。 2 面の研砥面があり側縁側に幅1.5cm程の溝状部を有す。 471は小形の砥石でE 6-15区, 3 層下部出土。溝幅0.5cmと細く斜行する。 470は中央部に幅1.8cm程の溝が縦に走る。

石 錐 (第116図474~487) 14点で3層に10点, その他から4点出土した。474~481が早期に属す。石質は黒曜石が多く安山岩・砂岩がある。

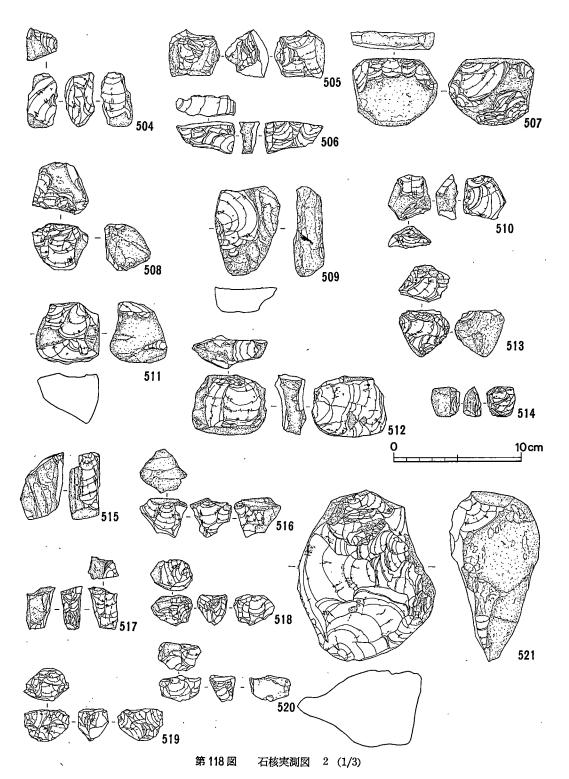
- a. 474 で大形の礫の一端を鋭く尖らせたもので,一見尖頭状礫器と 呼ばれるものに近い。 しかし, 刃部が周辺よりの加工を丁寧に施しているので石錐とした。 D 8 -11区, 3 層下部出土で硬砂岩製。
- b. 三角形状の剝片の一端の刃部を形成するもので、石錐の11点が含まれる。剝片剝出時の 打点部に加工を施し刃部としたもの(475~479・482・483・485)が多く、全般的に刃部が短 い。 480は両面とも比較的丁寧な剝離が施されたもので、石錐として最も整った例。いずれも 黒曜石製。
- c. 不定形な剝片の一突出部に加工を加え刃部としたもの。486はF8-15区,3層上部出土で安山岩製。刃部が丸味を帯び、かなり耗っている。
- d. 細長い棒状の石錐で、刃部、基部を欠損する。後期によく出土する例で、487はF7-19区、3層上部出土。黒曜石製。周辺の加工は入念で、断面は長円形を呈す。



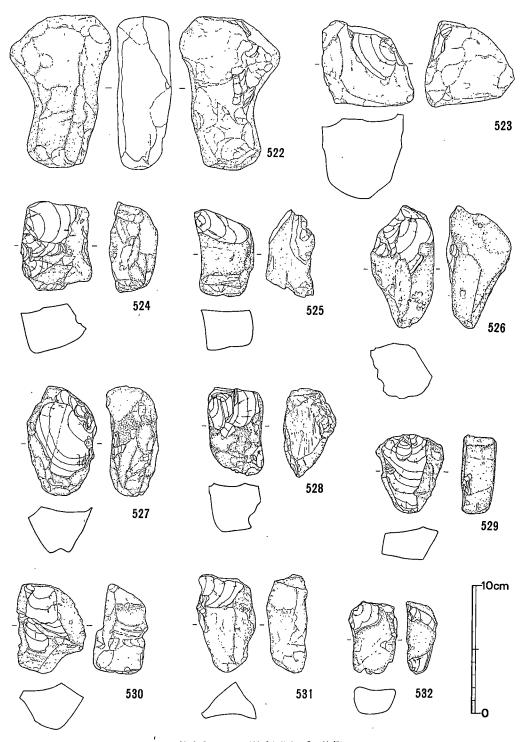
第 116 図 石錐・彫器実測図 (1/2)



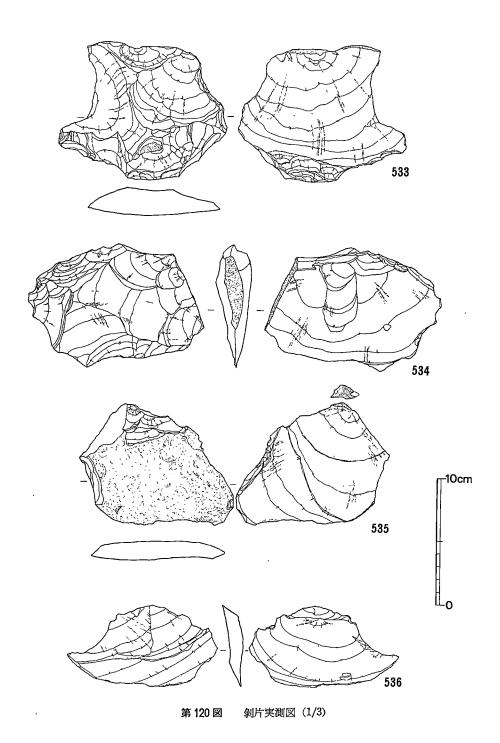
**—** 133 —



— 134 —



第 119 図 石核実測図 3 (1/3)



— 136 **—** 

影器(第116図488~491) 4点出土した。いずれも黒曜石製で石核彫器と厚みのある縦長 剝片を素材とした単打の彫器(490)がある。

石 核(第117~119図) 総数148点で4層に22点,3層に71点,その他から55点出土した。 使用された石材は黒曜石107点,安山岩41点である。 492~514までが早期~前期, 515~532が 後期~晩期の所産。

- a. 早期~前期では,  $7 \sim 10$ cmと大形の円礫ないし角礫を使用し,自然面を打面とし,寸詰 りで幅広の剝片を周縁に沿って剝出したもの(492~494・497・499等)。
- b. 4~5 cmとやや 小さい円角礫から多方向に剝片を剝出 したもの (504~506・510~514) が多い。
  - c. 3~5 cm程の角礫から,自然面を打面として一定方向から 縦長の 剝片を 剝出したもの  $(515\sim517)_{a}$
- d. c類と同じく小形の角礫を利用し剝出された面を打面とし、多方向から寸づまりの剝片 を剝出したもの (518~520)。
- e. 大きさは大 (522)、小 (532) まちまちであるが、原石の1箇所に1回ないし数回にわた り自然面を打面とした剝離が見られるもので(第119図),原石の大部分が自然面のまま放置さ れている。 E7-8区の3層直上及び 表土層直下からまとまって 出土したものですべて黒曜石 製。当類はa~ $\mathbf{d}$ 類に比べて自然面をほとんど残し,剝離が1箇所にほぼ限定される点,大き な差異が認められる。想像を逞しくすれば,黒曜石を豊富に産出する原産地で,石器製作に必 要かつ良好な石材を得るため,原石の一端に打撃を加え原石の質の良否を判別した資料で,そ れが、石核としての役割りを果たす前に土中に埋もれたものではなかろうか。

分類した石核のうちa・b類が早期ないし前期に、c~e類が後・晩期の所産である。

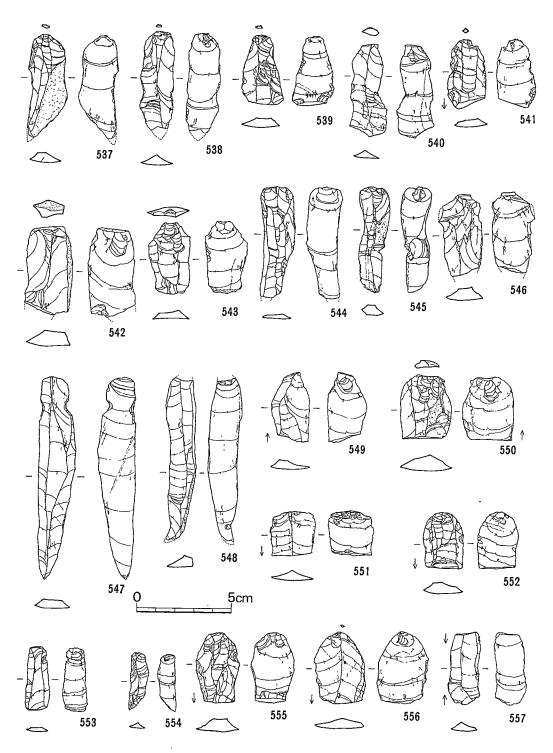
剝 片(第120図) 安山岩製の大形の剝片のみを図示した。 いずれも横長幅広の剝片の535 は自然面を打面としている。

**刃 器(図版58-2,第122図) 縦長剝片で表面に1ないし2条の 稜線を有し, 剝出された** 

ままの鋭い縁辺を刃部とするものを刃器とし て一括した。 総計 101点出土している。 地区 別にはF8区に26点、F7区に11点、E7区 に7点と7・8列の3層を中心としており, 土器からも後期を主体とする事が裏付けられ る。石材はすべて黒曜石。

a. 長さ4~6 cm, 幅 1.5~2 cm で一部欠 損するものもあるが、打面から末端までが 残るもの (537~540・542~546) で断面は三 第121図 刃器・つまみ形石器グリッド別出土量

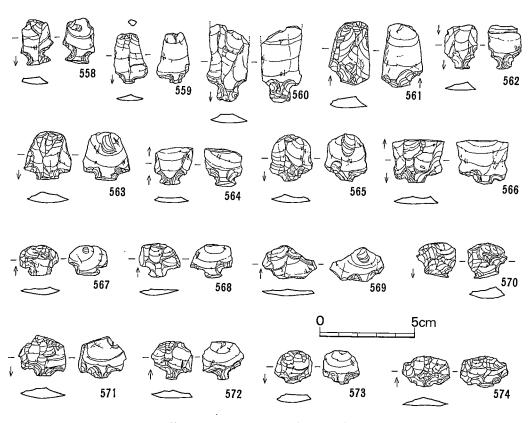
	c'	1 :	5 (	5 ′	7 8
	H				4
					2.0.2
			1	1	<sup>'</sup> 3
31			1	1 +	٥
9.0	•2		1.0.0	1.0.0	0.0.3
	1	1	3	10	8
	1.0.0	1.0.0	3.0.0	5.0.5	5.0.3
3	2 .	1	13	15	33
2.0.1	2.0.0	0.0.1	9.2.2	11.0.4	12 • 0 • 21
	13 20 31 9·0	合計 130 その他 D 31 9·0·2 1 1·0·0	合計 130 その他 31 9・0・2 1 1 1・0・0 1・0・0	合計 130 その他 D 31 9·0·2 110·0 1·0·0 3 2 1 13	会計 130 その他 D 31 9・0・2



角形ないし台形を呈する。540は末端部を欠損する刃器で下4-22区、3 層出土。比較的大きな打面(自然面)が用意されている。時期的に後期より溯るものであろう。打面調整の行われている $537 \cdot 538 \cdot 544$ や行われない $542 \cdot 546$ などがある。

- b. 細長く $9 \sim 11$ cmのもの。547は長さ10.8cm,厚さ4.5mmの完形品で断面は台形を呈す。打点面から1cm下に両縁からノッチ状の加工を入れる。548は打点部を欠損する資料。
  - **c**. 切(折) 断剝片を一括した (541・549・552・555・557)。 比較的幅広の剝片が多い。切(折) 断は表面及び主要剝離面の両側から行なわれている。
    - d. 長さ3cm, 幅1cm前後と小形のもの (553・554)。

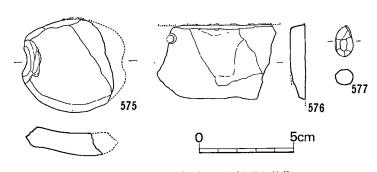
つまみ形石器(図版58-2、第123図) 打点部と反対側に、両面からノッチ状の加工を施こし、切断したもので残された舌部から「つまみ様石器」、「つまみ付石器」等とも呼ばれる。総数29点出土し $F6\sim F8$ 区に $6\cdot 4\cdot 7$ 点と出土している。第121図は刃器と合せた地区別・層位別出土量でF8区が33点と約25%の割合を占る。刃器状剝片を素材とし、中には打面部側を切断している例(562・564・566)もある。なお、図面上の矢印は切断の方向(例えば↑は主要



第123図 つまみ形石器実測図 (1/2)

剝離面側から)を表わ している。

石 錘 (第124図575) 打欠石錘で,一部欠損 する。 H 8 -16区, 表 土層で1点のみ出土し た。素材の長辺方向に 打欠きが行なわれる。 晩期の所産であろう。



第124図 石錘・石包丁・玉石実測図 (1/2)

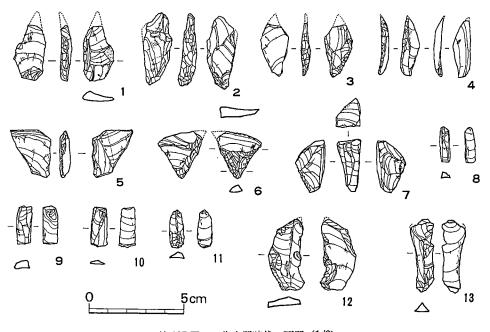
石庖丁 (第124図576) D8-8区, 3層出土で緑泥片岩製。中央部の破片で、刃部も欠損する背縁は斜めで、一孔が見られる。

玉 石 (第124図577) F8-5 区、3層出土で黄褐色で雨だれ状を呈す。周辺は面取りをしながら磨かれ、長さ1.1cm、厚さ0.95cmを測る。

# V その他の遺構と遺物

## 1. 先士器時代の遺物

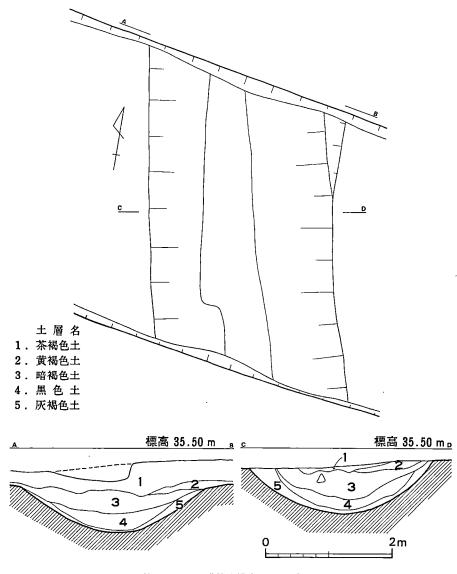
縄文時代の遺物と混在して、先土器時代に属す石器が出土した。 しかし、土層断面図作成の



第125 図 先土器時代の石器 (1/2)

深層掘りでは包含層は確認出来なかった。出土した石器は13点で第125図に示した。

1~4 はナイフ形石器。 1 は縦長剝片の打点側を 基部とし、 片縁のみに 刃潰し加工を加える。 先端部を欠損する。 3 は平行四辺形を呈し、縦長剝片の末端部を先端とし、 先端部を欠損する。 刃潰しは両縁の肩部まで行なわれる。 4 は横長剝片を用いたもので左縁は全辺、 右縁は刃部と接する部分まで施される。 5・6 は台形様石器で、 5 はほぼ三角形を呈す寸ずまりの剝片の末端部を刃部とする。 左縁は刃潰し加工、 右縁は表面側からの切断による。 刃部には微細



な刃とぼれが見られる。 6 は扇状を呈す剝片で、基部が尖り、打痕部をカットする丁寧な加工を施こす。弧状の刃部は一端を欠損し、刃とぼれが見られる。 7 は半舟底形の細石刃核。側辺は下方向から荒い剝離をした後、周辺部のみに細かい加工を施こす。打面調整は行なわれていない。  $8\sim11$  は細石刃で頭部破片。 幅は  $5\sim8.5$ mm。 12は縦長剝片で先端部を欠損するが、単打の彫器であろう。 13は断面が三角形のスポール。

## 2. 古墳時代とその後の遺構

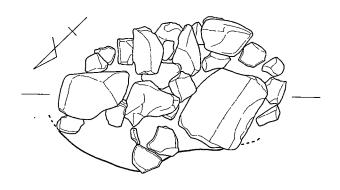
## (1) 溝 状 遺 構 (図版59, 第126図)

G9・10区に検出された,発掘区を横断する南北方向の,溝状遺構。幅2.9m前後,深さ0.7m,底面は浅いU字状を呈す。長さは4.8mまで確認され北,南にそれぞれ延びる。溝内は観音山古墳群の墓道と同様な堆積土を有し、須恵器片が出土した。この溝の延長は、古墳群全体の根道となりうるという考え方もある(註4)。

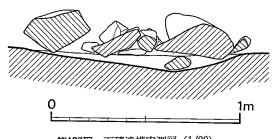
### (2) 石積遺構

(図版61-2, 第127図)

B9区で検出された。拳大から径40cm程と不ぞろいの花崗岩を長円形に積んだもので、長径



標高 46.40 m

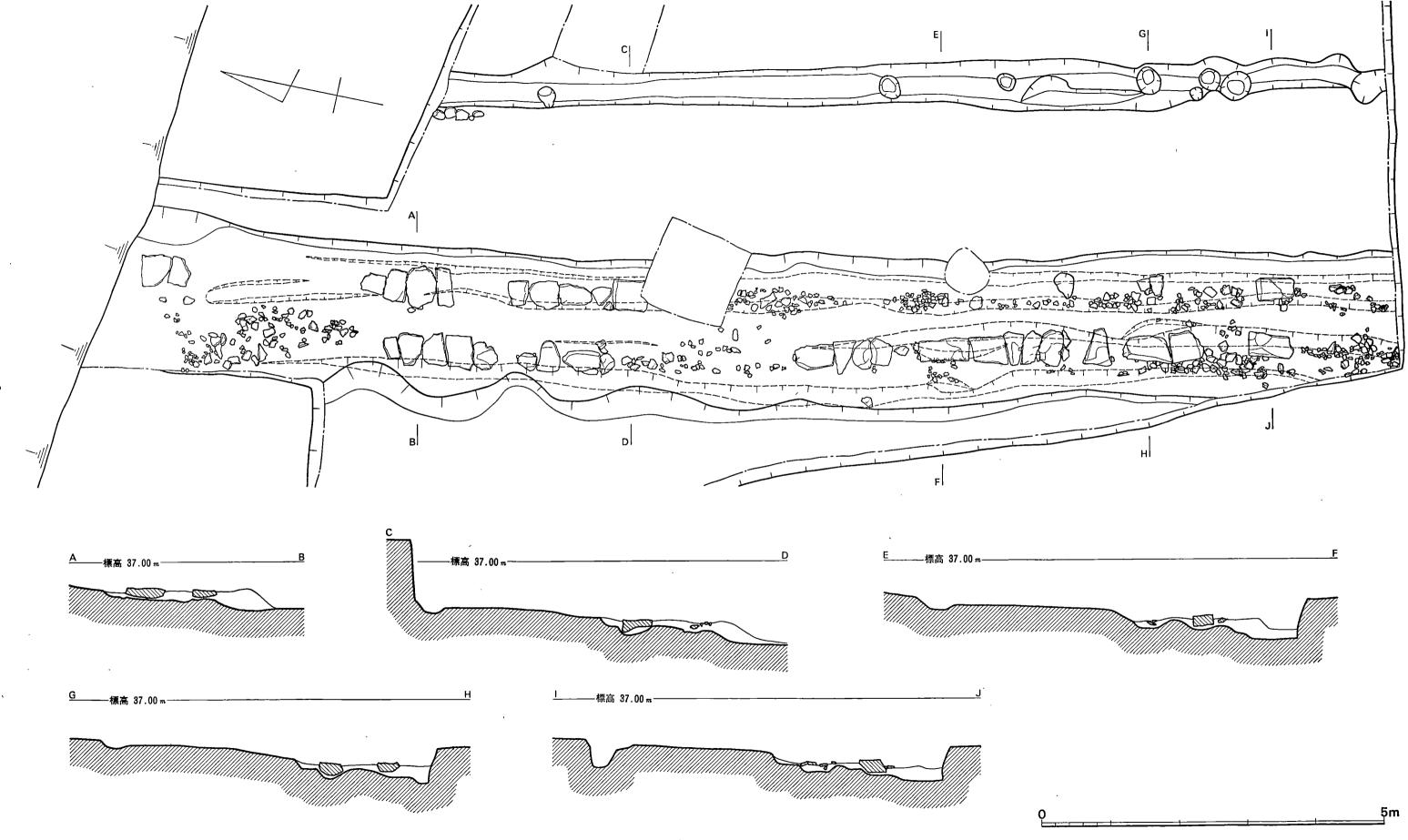


第127図 石積遺構実測図 (1/20)

1.2m, 短径0.7mを測る。掘方プランは不明瞭。石積下及び内には何ら遺物は出土しなかったが、遺構が古墳時代以降に堆積した黒色土上に築かれている事から当期以降の時期であろう。 性格については不明である。

#### (3) 石 畳 遺 構 (図版60, 第128図)

G 9~10区で検出された。南北19mに及び, 花崗岩と土管を利用した石畳遺構で,南方へは 調査区外へ続く。石畳は二列に延び幅は心々間で90cm内外に一定している。石畳として用いら れる花崗岩は大は $60 \times 45cm$ ,小は $20 \times 30cm$ と様々であるが,いずれも平坦面を上としている。



第128図 石畳遺構実測図(1/50)

この花崗岩の欠如する箇所には土管を細かく砕いたり、小礫をもって充塡している。なお、花崗岩にはくさび痕(図版61-1)が明瞭に残る。用途は山道に敷かれ、通行を容易にしたものと考えられ、時期的には近世の所産であろう。なお、地権者、古老には記憶がないとの事である。

- 註1 安達厚三「織田井戸遺跡発掘調査報告付総稼遺跡発見の異形部分磨製石器」『いちのみや考古』 6 1965
- 註2 副島邦弘「IV-E-1-(2) 異形局部磨製石鏃-福岡県山門郡瀬高町所在大道端遺跡の調査」 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 X IV 福岡県教育委員会 1977
- 註3 後藤直・沢皇臣編「板付一市営住宅建設にともなう発掘調査報告」『福岡市埋蔵文化財調査報告』 35 1976
- 註 4 柳田康雄「筑紫郡那珂川町観音山古墳群の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化調査報告』 5 福岡 県教育委員会 1978

# $\mathbf{W}$ $\mathbf{z}$ $\mathbf{z}$ $\mathbf{z}$

### 石組炉跡について

北部九州の縄文時代の遺構は、その遺跡の遺存状態からか不明な部分が多い。しかし、近年の大規模な開発行為に伴う埋蔵文化財の調査により福岡県春日市柏田遺跡・福岡市四箇遺跡における住居跡や福岡市湯納遺跡のイチィガシの遺存したピット状遺構等が検出されている。しかし、深原遺跡で検出された石組炉跡・円形竪穴遺構(註1)のように縄文時代早期に遡る遺構はまれであり、特に32基に及ぶ石組炉跡は当期の生活を知る上で重要なものである。この石組炉跡(以下単に炉跡と呼ぶ)についてその特色・性格を整理してみたい。

検出された炉跡については表 3 に示した通りである。層位的には 3 層上部から 4 層中部にかけてみられ、 3 層に26 基、 4 層に 6 基検出された。 4 層では特に E 6 区に 3 基  $(11 \cdot 21 \cdot 32 \theta)$  とまとまっていることが注目され、また、 $11 \cdot 21$  号炉跡は 4 層上部・中部と一部重複して検出された。他は E  $4 \cdot F$   $6 \cdot F$  8 区に各 1 基が確認されている。 3 層では E 7 区に 6 基検出され特に $22 \cdot 25 \sim 27$  号炉跡は 3 層下部の同一レベル上に並んで検出された(図版30)。 その他の区では、F 4 区に 4 基、E  $6 \cdot F$   $5 \cdot F$  7 区に各 3 基と比較的に地点が集中し、なおかつ各炉跡が密接している事が注意される。

次に炉跡の形態についてみてみよう。32基の炉跡のうち、破壊されていると考えられる7・ $9 \cdot 17 \cdot 19 \cdot 31 \cdot 32$ 号等を除いて、3つの形態に分類できる。

A類 石材(すべて花崗岩)を地山上にほぼ平坦に配した掘り込みのほとんどない炉跡で、プランは $80\sim130cm$ 前後の円形を呈す。 代表的な例としては 3 層上部の 1 号炉跡(第17図 1)があたり、他に $9\cdot10\cdot14\cdot16\cdot31$ 号炉跡が当類に属す。

B類 炉の周壁が30度前後の傾きを有し、浅いすり鉢状の掘り込み内に形成された炉跡で、径は55cmから110cmまで様々であるが、花弁状を呈すものが多く、5・18号炉は最もよくその特徴を呈している。また炉内には挙大の焼けた礫が多く認められ、特に11号炉(図版21下)は顕著であった。  $3\sim6\cdot13\cdot15\cdot22\cdot24$ 号炉が当類に該当する。11号炉が4層上部で他は3層中に検出された。

C類 周壁が直角に近く立ち上がり、径が $50\sim70cm$ 前後と小さい炉跡で、床面のあるもの (C1) と無いもの (C2) の2者がある。C1類には $12\cdot20\cdot23\cdot25$ 号炉が、C2類には $21\cdot28\cdot29$ 号炉跡がある。このC類の炉跡は3層下部から4層にかけてのみ検出される点が $A\cdot$ B類と異なっており、層位的な形態差が窺われる。

これら $A\sim C$ 類に分類された炉跡を構成する石材はすべて花崗岩で、特に周壁に用いられた石材は厚さ5 cm内外と扁平で、内に配された石よりも大型のものを用いる共通性を具備している。また、炉内には径 $5\sim 10$  cm前後の角ばった石が投げ込まれた状態で検出されたものが見られる  $(4\cdot 5\cdot 11\cdot 18\cdot 29$  号等)。 これらの石はいずれも火を受けて脆くなっている。一方、炉内をみると、内には焼土・炭化物はまったくといってよい程検出されず、ただ、炉石が熱を受けた痕跡を有しているのみであった。従ってこの炉跡は炉内で火を熾したとは考えられず、炉内に残された拳大の礫の存在から、いわゆる "石蒸し"の調理法がとられたものと推測される。11 号炉西側に検出されたピット状遺構(図版21-1、第33図)は内部に焼土と炭化物が詰まった遺構で周囲も焼土が観察された。この種の遺構はこの1 ヵ所のみであるが、11 号炉内に残された多量の拳大の熱をうけた礫との関係から、このピット状遺構は炉内に入れる礫を焼いた場所であろうと思われる。

32基の炉跡と遺物出土状態については、第10図の土器及び表7の石器のグリット別出土量から、炉跡の集中地区に遺物の集中が認められる。すなわち、炉跡と遺物の密接な関係が知られ、炉跡を中心にした生活が裏付けられるのである。これは、11号炉付近の地山面が固くしまっていた点とも無関係ではあり得ないが、掘り込み面及び柱穴が確認出来なかった点、その住居の形態・居住範囲については遺物出土状態の記録のみでは語れなかった。

九州地方の押型文期の炉跡や他の遺構については遺物出土遺跡の数に比べて貧弱である。住居跡では大分県早水台遺跡(註2)で竪穴式及び平地式住居跡が検出されているのみである。また、押型文土器を伴出した土壙が福岡市若八幡宮古墳の墳丘外(註3)に知られる。 一方、炉跡については長崎県岩下洞穴 VI層(註4)で素掘りの炉と炉内に石が点在する二者が見られ、いずれも炭化物が内外に認められた。また、大分県九重町二日市洞穴(註5)でも第4文化圏に2基の集石跡が検出され、周辺の土が赤く焼け、炭化物がみられる。これらの遺構の他に大分県稲荷山遺跡(註6)で検出された径1 m程の小礫群がある。 この礫群の周囲 4 mの範囲に遺物がまとまった状態で出土したとし、炉跡の可能性を考えている。この礫群は火を受けてい

る様だが、炭化物、焼土についての記述は見られない。しかし、これらの炉跡とされた遺構は稲荷山遺跡の礫群に若干、深原遺跡との類似性がみられる程度である。最近、長崎県諌早市西輪久道遺跡で、径60㎝前後の円形に近い石囲み炉址が検出された(註7)。この炉内には焼土・炭化物等が認められず、 内に小つぶの礫が入り周囲に押型文土器・石槍等の出土を見る。 また、 福岡県春日市原遺跡(註8)でも類似した炉跡が5基検出され、 やはり炉内に炭化物・焼土をみない点、当石組炉跡と近い性格を有している。

深原遺跡の石組炉跡は、第1に炉内に炭化物・焼土をみない。第2に花崗岩の扁平な礫を石囲い状に配している点に大きな特色がある。しかも炉跡周囲の遺物の出土状態から見て、屋外炉としてではなく、炉を中心とした居住が考えられる。今回の様に遺構と遺物が遊離したものでなく遺構内遺物として把握できる調査の精度が要求されよう。

## 押型文土器について

深原遺跡で出土した押型文土器は山形・格子目・楕円押型文の3種である。これらの文様を施す土器の器形は大まかに2つに分けられる。

1は口縁部が直口ないし内彎ぎみに立ちあがる尖底の深鉢形土器。

2 は口縁部が大きく外反,ないし口縁上端部近くで外反させ尖底ないし乳房状に近い底部をもつ深鉢形土器。

前者は外面のみの施文か、内面には端正な沈線文ないし外面と同一原体を用いた施文一例えば147・148・213・234等—が一般的な傾向として看取できる。一方、後者は内面に斜行する沈線文(原体条痕文を含む)ないし、沈線文と山形文・楕円文等を施文した土器一例えば 184・421・429・560 等一と言える。そして器面を飾る文様が前者に比べて粗大化する傾向がある。この両者を従来の編年に当てはめると前者は早水台1式、後者が田村式にほぼ該当すると思われる。しかも遺跡の層位的な観察でも前者は4層に、後者が3層に主体を持つ事が確認されている点も妥当性があるが、それは明瞭に3層・4層と分離できた訳ではなく、かつ、押型文土

器及び共伴する無文土器・縄文土器等の他類土器との関係で問題点を有している。

山形文土器については  $a \sim f$  が外面に山形文を施文するもの,  $g \cdot h$  が外面が無文で内面に山形文を施文するものとして 8 分類した。 3 層は 373点出土で 3 層の押型文総出土数の約14% を占め,同様に 4 層は129点,15.6% を占め安定した出土割合を持つ。 文様別では外面に山形文,内面に山形文を施文する b が総数90点と胴部破片を除いて最も多数を占め,層位的な割合でも変化は少ない。一方,内面に沈線文と山形文を施文する d は 3 層に21点,4 層に 3 点と 4 層に極めて少ない出土量で 3 層に主体をもつ土器群に伴うのであろう。

楕円押型文は本遺跡の主体をなす土器で3,753点出土した。3層に2,214点で3層で出土した 押型文土器のうち84.2%に達し、4層も84.2%と奇しくも同じ割合を占める。この点は田村遺跡を除いた東九州の各遺跡が山形押型文を文様別組成の中心とするのと差異があり、かつて深原式土器と仮称した(註12)のも、楕円押型文の多さと無文土器の少なさに拠っていた。この点については後述する。

さて、楕円押型文土器についても山形文と同様に外・内面の文様により a ~h の 8 つと、他に特殊な原体を有す i 及び胎土に滑石を含む k に分けた。表 6 にその出土量を掲げているが、外面に楕円文、内面にも楕円文を施文した b が 3 層に138点、4 層に56点、同様に内面に沈線文の c が 3 層197点、4 層49点、内面に沈線文と楕円文を施文する d が 3 層32点、4 層 4 点出土している。これらのうち d とした土器は、同様の文様の組合せをもつ山形押型文の d と比べて

計

原

値

測

				// ·	4.1.	H 1							
anto pei oss		丌	形	甲型	文			楕	円 :	押 型	文		
一波長な	3		層	4		層	3		層	4		層	計
いし直径	<del></del>	——— 外面	 内面		外面	内面		外面	——— 内面	-	外面	 内面	
(cm)		<u>Угш</u>	L 3 hert	<u> </u>	УГЩ	1 1 bm		<u> 7 ГДД</u>	1.114	<u> </u>	<u> УГРЩ</u>	1 3 14	
0.3							1						1
0.4			1				6	3	5	3		1	19
0.5	3			3			4	2	1	7	4	3	27
0.6	2		,				16	4	2	3	4	2	33
0.7	8			15			18	5	5	6	3	6	66
0.8	15	1		10		1	10	3	2	6	1	6	55
0.9	22			2			24	4	5	4			61
1.0	5			2			31	1		9	1	1	50
1.1	2	1	1	ĺ			21	1		5	2		33
1.2	1						5	1		2	2		11
1.3	1				1		2						4
1.4				-			3			1	1		5
1.5	2						1			1			4
1.6												1	
計	61	2	2	32	1.	1	142	24	20	47	18	19	369

出土割合が極めて小さい点注意される。しかし,楕円押型文内の層位的割合ではbが3層6.2%,4層8%,同様にcは8.9%と7%,dが1.4%と0.6%と比較的一定した出土割合をもつ。言い変えれば楕円押型文土器では文様組成は層位的にほとんど変化しないと言えよう。

次に山形文・楕円文の原体について考えてみたい。前頁表は山形文については一波長、楕円文では一粒子の径の計測値である。明確に計測できる369点のみを任意に抽出した。 3層の山形押型文土器では一波長が0.9cmの土器が22点と最も多く、次いで0.8cm15点, 0.7cm 8点の順になる。最大は1.5cmに達する。 一方、4層では0.7cmが15点, 0.8cmが10点と3層に比して一波長が狭くなっている。次に3層の楕円押型文では0.9~1.1cmと粗大な楕円文が中心にになっており、1.2cm以上のものも少量ながら4層より多く出土している。 4層ではあまり集中した箇所はなく0.5~1.0cmの間に万遍なく出土している。全体的には、従前言われていた様に時期的に古い土器ほど一波長が狭く、 一粒子が小さい事が裏付けられる。 なお、 計測値外・内面は器面の外と内面の文様であるが、外面より内面の計測値が小さい方が多く数えられる。このことは、器外・内面に異なった原体を施文する場合、内面の原体の彫刻が細かい事を示している。特に4層出土の楕円押型文に顕著にみられる。

深原遺跡における押型文土器と押型文土器に共伴するⅡ~Ⅵ類土器については表 4 に示す通 りである。これを層位別に分け,かつ他の遺跡と比較したのが次頁表である。このうち,押型文 土器と無文土器の関係についてみると、深原遺跡3層は楕円押型文土器が全体の61.7%、次い で無文土器が23.8%,山形押型文土器10.4%で押型文土器は全体の73.3%を占める。4層でも 楕円押型文土器62.5%,無文土器20.8%,山形押型文土器11.6%と3層とほぼ似た出土量であ る。この他に少数の撚糸文・縄文・条痕文土器を伴出するが,特に4層では縄文土器の出土を 見ない。これに対して押型文土器を主体とする早水台・田村・稲荷山・成仏遺跡等の東九州の 土器組成について見てみよう。早水台2層(昭和28年調査分)では,総数8,904点の遺物が出 土し、無文土器が59.3%と過半数に達する。次いで山形押型文28.0%、楕円押型文11.1%とな り、全出土量に対する押型文土器の割合は39.3%を占めるにすぎない。3層も同様な結果が出 ている。また、2・3層とも縄文土器の出土がなく、撚糸文土器が割合多く出土する。次いで 田村式の標式遺跡となった田村遺跡をみると,無文土器56.6%とやはり過半に達し,次いで楕 円押型文28.1%, 山形押型文8.7%となる。 しかし, 楕円押型文が山形押型文を凌駕している 点は深原・成仏岩陰と類似性が見られる。次に早水台1式よりも古いとされる土器を単純に出 土する稲荷山遺跡でも無文土器が73%を占め、山形押型文15.2%、楕円押型文は10.2%の割合 である。格子目押型文については全体に1%内外の出土量を持つにすぎない。このように東九 州の押型文期の土器組成は基本的に無文土器を主体としている特色がある。一方,西・北部九 州の遺跡では長崎県岩下洞穴V層では無文土器が押型文土器を凌駕しているが、その差は比較 的少ない。佐賀県白蛇山岩陰9層では無文土器がほとんど伴なわず,押型文土器では山形押型

各遺跡の土器出土数とその割合

	مضنتتمه				<del>,</del>							
	圛	割合	1.8		2.5	4.3	89.8			5.7	0.2	100
4	4	出土数	∞		11	19	395			25	<b>—</b>	440
	圓	割合	11.5		16.9	28.4	64.9	0.5	0.5	5.4	0.2	100
斑	က	出土数	91		134	225	515	4	5	43	2	794
크		割合	15.2	0.4	10.2	25.8	73.0	0.3		0.4	0.5	100
船		出土数	954	78	633	1, 615	4, 577	20		28	59	6, 269
¥		割合	8.7	0.8	28.1	37.6	56.6	1.8		2.0	2.0	100
田		出土数	34	က	110	147	221	7		8	8	391
-	圈	割合	25.9	0.4	10.2	36.5	61.7	1.8				100
和	3	出土数	296	13	315	1, 124	1,897	54				3,075
长	国	割合	28.0	0,2	11.1	39.3	59.3	1.4				100
파	2	出土数	2, 494	20	066	3, 504	5, 276	124				8, 904
	圈	割合	11.6	0.1	62.5	74.2	20.8	0.4		1.0	3.6	100
適	4	出土数	129	FI	969	826	231	4		11	41	1, 113
	圏	割合	10.4	1.2	61.7	73.3	23.8	1.0	0.1	1.2	0.6	100
账	က	出土数	373	42	2,214	2. 629	852	36	5	44	22	3, 588
掐	/		型文	型文	型文	盐	報報	器	器	器	便	111111
劕		器	发	田 七	<b>エ</b>	2	×	* *	×	旗文	8	Лп
		#	크	卷	棒	₩.	無	鰲	饠	₩	4	但

※ 割合は%で示している。

文が楕円押型文より多く出土し (註13),他にツメ形文・隆帯文,最下層に貝殻圧痕文土器が少数みられる。また、深原遺跡同様に新幹線関係の遺跡として調査された福岡県春日市原遺跡では無文土器が多く、次いで楕円押型文・山形押型文という出土量を示している (註14)。西・北部九州の各遺跡では原遺跡・岩下洞穴 V層が無文土器が多く、深原遺跡・白蛇洞穴では無文土器が押型文土器に比べて少ない。全体的には東九州に比して、無文土器の占める割合が少ないところに西・北部九州の押型文期の組成の特色があろう。時期的には稲荷山遺跡を除いてほぼ同時期の早水台・田村式に当り、従ってこの東九州と西・北部九州の押型文期土器組成を一応地域差として把えておきたい (註15)。また、山形押型文と楕円押型文土器との関連では時期的に古い方に山形押型文が多い傾向が看取できよう。また、縄文土器は田村式以降になって伴出し、撚糸文土器は早水台1式以前に遡る。

九州早期の編年は長崎県福井洞穴の調査以来細石器を伴出する爪形文土器と、従来、最古の 縄文土器とされた押型文土器の間を埋める 土器群の様相が岩下洞穴, 泉福寺洞穴 (註16) 等の 調査により次第に明らかになりつつあり,他方では押型文土器の細分及び押型文土器以前の土 器の検出が東九州を中心に進められている。 大分県成仏岩陰 (註17) では3層に 早水台式の尖 底押型文土器と尖底無文土器, 4層では3層の土器群に円底の無文土器が伴出し, 5層ではす べて円底無文になるとされ,小型の石鏃が伴出する。また,橘昌信氏は大分県二日市洞穴の報 告で4層出土の押型文土器の内面施文に注目され,内面の原体条痕を欠如するb類土器を稲荷 山遺跡において単純に出土する土器群とし「稲荷山式」を提唱している (註18)。この土器は早 水台式より古式の形式とし、川原田洞穴で出土したいわゆるベルト状施文の押型文により類似 するとしている。つまり、二日市洞穴では第4文化層に早水台式、稲荷山式が、第7文化層よ り円底無文土器の出土をみ、第9文化層では条痕文土器が断片的に出土している。この条痕文 土器は岩下洞穴 IX 層出土の土器と対比が可能と思われ、今後、第5・第9文化層及びそれ以下 の調査が期待される。一方,西・北部九州では佐賀県伊万里市白蛇山岩陰 9 層で, 貝殻圧痕文 ・ツメ形文土器が押型文土器と共伴し、同じく西有田町盗人岩洞穴では押型文土器の下部に櫛 目文土器が単純に出土している (註19)。この櫛目文土器に類似する資料はやはり佐賀県西海津 海底遺跡でも出土している (註20)。また,長崎県佐世保市岩下洞穴 VI 圏では,爪形文土器・条 痕文土器が押型文土器と伴出し、西・北部九州は東九州と異なった様相を呈している。

そこで白蛇山岩陰・盗人岩洞穴・岩下洞穴の押型文土器について、その時期を考えてみたい。白蛇山岩陰 9 層の土器組成は山形押型文50%,楕円押型文27%,ツメ形文 9%,以下隆帯文・貝殻圧痕文・ハケ目文の順となる。上層の 8 層には押型文を欠き,下層の10層は無遺物層,11層は先土器時代の石器を出土する。押型文土器は口縁部の外反をほとんど見ず内面の施文が少ない点早水台 1 式ないし稲荷山に近い時期が与えられよう。盗人岩洞穴 4 A 層の押型文土器については不明な点が多いが,田村式よりは古い土器群であろう。また,この 4 A 層でも櫛目文土

器を出土している点は見逃がすことができない。岩下洞 VI 穴層では、 V層に多く見られた内面の沈線文 (原体条痕を含む)が無くなるようで、かつ、8層にベルト状施文の土器の出土を見るところから、稲荷山遺跡の土器群に近いと思われる。こうした、西・北部九州で押型文土器に共伴ないし先行するとされる貝殻圧痕文土器、櫛目文 (又は貝殻文) 土器、爪形文土器間には施文具、施文方法 (いずれも口縁部に平行に、数段にわたって施文する)に類似点がみられるのである。また、伴出する押型文土器の観察から、稲荷山遺跡ないし川原田 VI層の時期に伴行すると思われる。従って岩下区層の条痕文土器、成仏洞穴 5層・二日市洞穴 7層より新しく位置づけられよう。東九州においては、大分県直入郡政所遺跡出土の尖底の貝殻文土器が田村式と共伴している (註21)。この事から東九州でも西・北部九州と類似する資料が出土する可能性が強く、さすれば、押型文期の土器の様相もより明確になろう。

## おわりに

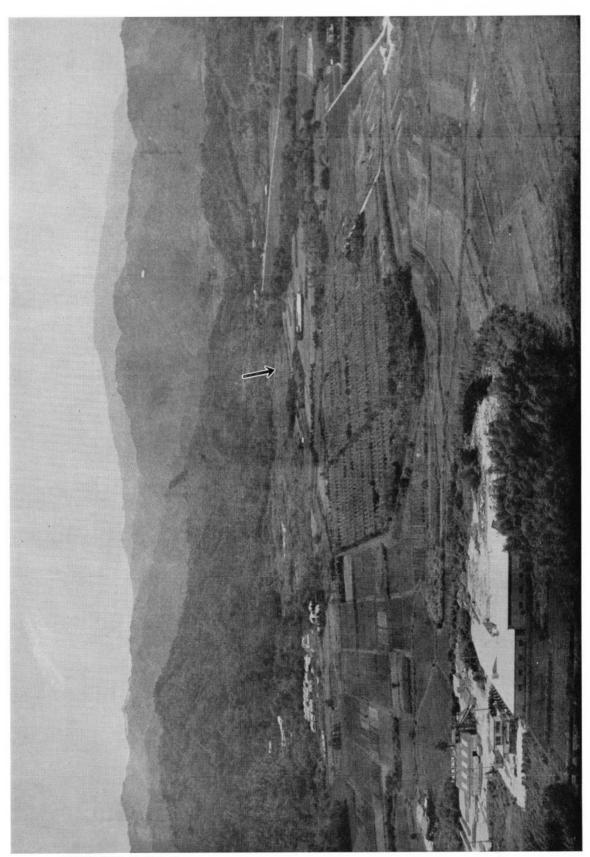
深原遺跡は北部九州の縄文時代の希薄な地域にあって、32基の石組炉跡・円形竪穴遺構等の遺構や多量の押型文土器を主体とする土器・石器が出土し、早期以降、晩期まで引き続き生活が営まれた大遺跡であることが判明した。縄文早期の主体を占める押型文土器は楕円押型文を組成の中心とし、無文土器・山形押型文土器の他格子目押型文・撚糸文・縄文・条痕文土器を伴出し、石器では多量の石鏃・搔削器をはじめ、尖頭状石器・石斧・礫器・磨石・石皿・環状石斧・異形局部磨製石器等ほとんどすべての器種をみる。層位的には3層・4層から出土し、時期的には器形及び文様構成から早水台1式と田村式併行に分けられるが、層位的な分離は不可能で、主体的に田村式併行の土器群が上層の3層に多く出土したと言えるのみである。しかし、土器の組成では早水台・田村遺跡が無文土器を主体とする差異がある点、地域差を含めて今後の問題点としておきたい。押型文土器では、この他に平底の底部が3層上部から2点出土し、いわゆるヤトコロ式に含まれる資料と考えられた。また、胎土中に滑石を多量に含む赤茶褐色の土器が出土した。従来、胎土に滑石を含む土器は曽畑・阿高・並木・南福寺式等の土器に顕著であるが、この楕円押型文(I類一3・j)に滑石を含む一群が時期的に下るものか否かは速断できない。今後の資料の増加を待ちたい。

以上,深原遺跡の主体をなす押型文土器を中心に述べてきたが,前期に属すIX類沈線文土器や後期の精・粗製土器,また,石器についても大まかに分類しただけであり,派生する問題点は少なくない。後日に期したい。

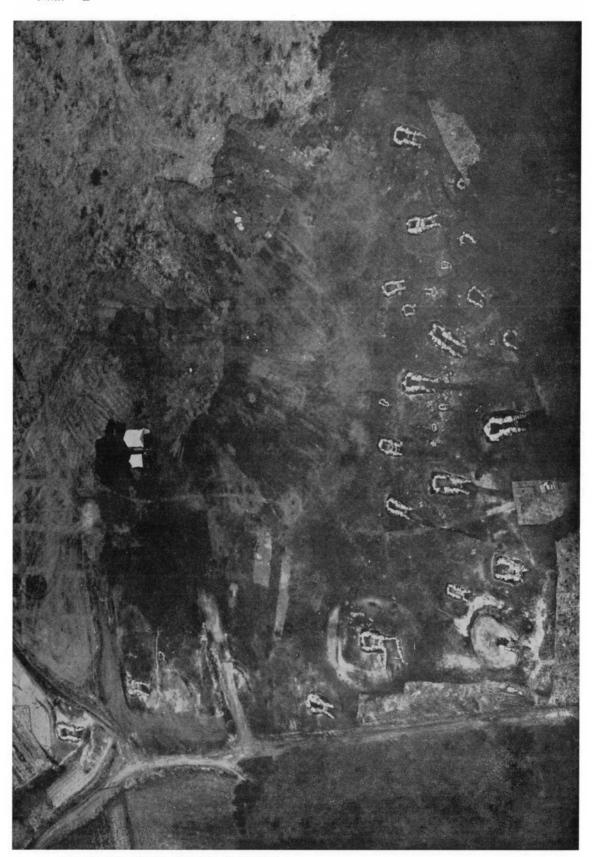
- 註 1 木下修「X 第43-1,43-2地点(深原遺跡)の調査」『昭和48年度山陽新幹線関係埋蔵文化 財調査概報』福岡県教育委員会 1975
- 註2 八幡一郎・賀川光夫「早水台」『大分県文化財調査報告』3 1955

- 註3 副島邦弘『5. その他の遺構と遺物―若八幡宮古墳」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』2 福岡県教育委員会 1971
- 註4 麻生優「岩下洞穴の発掘記録」佐世保市教育委員会 1968
- 註5 橘昌信「大分県九重町二日市洞穴の調査(第1次~第3次)」『九重町文化財調査報告』2 1978
- 註 6 賀川光夫・橘昌信「稲荷山遺跡緊急発掘調査」『大分県文化財調査報告』20・21合輯 1970
- 註7 長崎県教育庁文化課「いさはや一九州横断自動車道建設・諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化 財発掘調査報告会資料」 1978 長崎県教育庁文化課副島和明氏の御教示による
- 註8 木下修「IV 第33-1地点(原遺跡)の調査」『昭和50年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報』 福岡県教育委員会 1976
- 註9 賀川光夫・羽田野一郎「大分県大野郡朝地町田村遺跡調査報告」朝地町教育委員会 1960
- 註10 賀川光夫「大分県川原田洞穴一九州地方の洞穴遺跡」『日本の洞穴遺跡』平凡社 1967
- 註11 賀川光夫「九州東南部―縄文文化の発展と地域性」『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』河出書房新社 1965
- 註12 註1に同じ
- 註13 森醇一郎「白蛇山岩陰遺跡」『佐賀県立博物館研究書』1 1974
- 註14 山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第10集に掲載予定。
- 註15 深原式の名称は、混乱を招くので一応撤回しておく
- 註16 麻生優・白石浩之「泉福寺洞穴の第六次調査」『考古学ジャーナル』116 1975 その他,各年 毎調の報告に拠る。
- 註17 坂田邦洋「縄文時代に関する研究,成仏岩陰遺跡の調査」国東町教育委員会 1972
- 註18 註5に同じ。
- 註19 佐賀県教育委員会「盗人 岩洞穴遺跡一西有田町 縄文遺跡(本文編)」所収『佐賀県文化財調査報告』18 1969
- 註20 佐賀県立博物館「九州の原始文様」 1977
- 註21 註11に同じ。

# 図 版



深原遺跡遠景 (北東から)



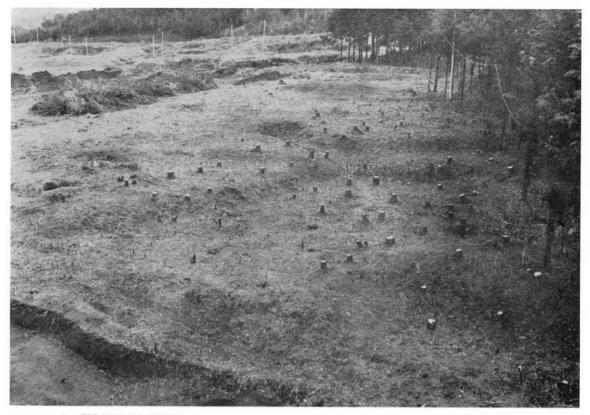
観音山古墳群中原支群と深原遺跡(南東上空から)



1 観音山古墳群と深原遺跡(東側上空から)



2 調査前の遺跡(北東側)



1 調査前の遺跡 (南側)



2 予備調査中の2号墳(昭和46年度)





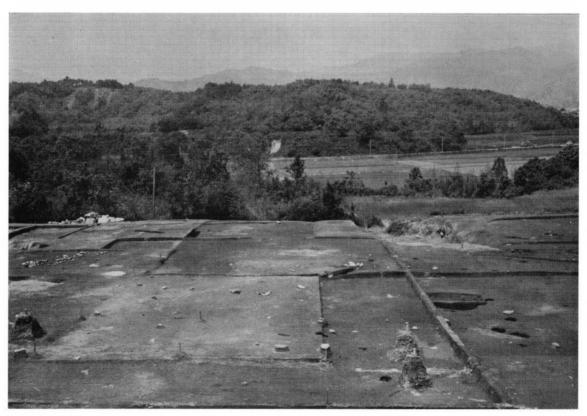
1 深原遺跡全景(北から)



2 深原遺跡北側全景(東から)



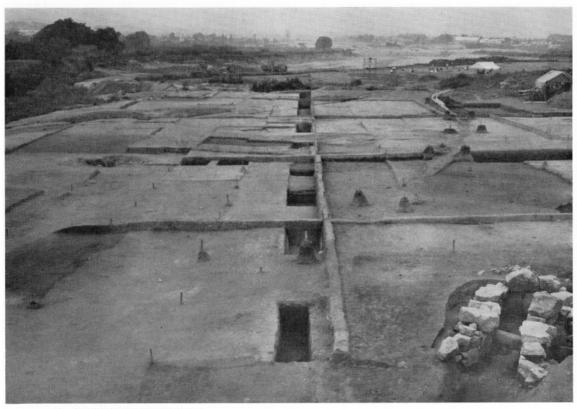
1 深原遺跡北側全景(南から)



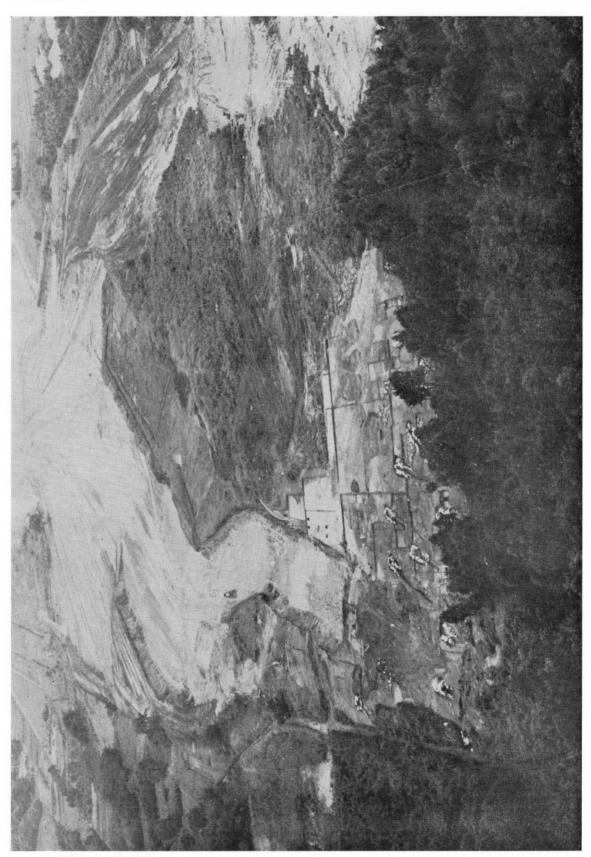
2 深原遺跡中央部全景(東から)



1 深原遺跡全景 (調査終了時)



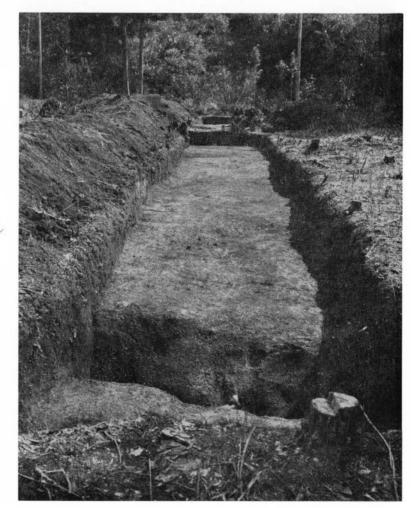
2 深原遺跡全景 (調査終了時)



破壊される深原遺跡



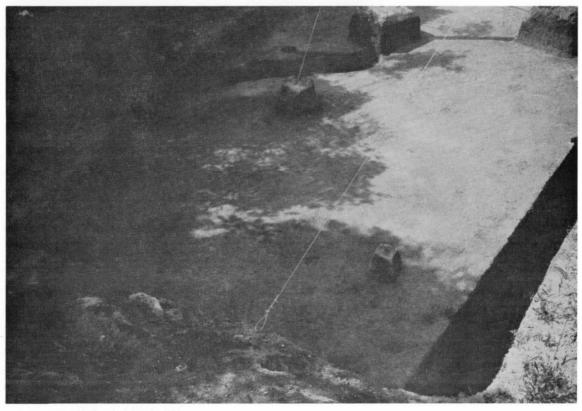
1 第43-2 地点全景



2 第43-2 地点南北トレ ンチ全景



1 第46-1地点西側全景



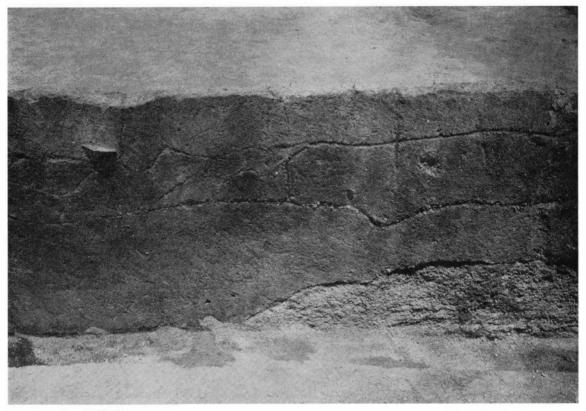
2 第46-1 地点南側全景



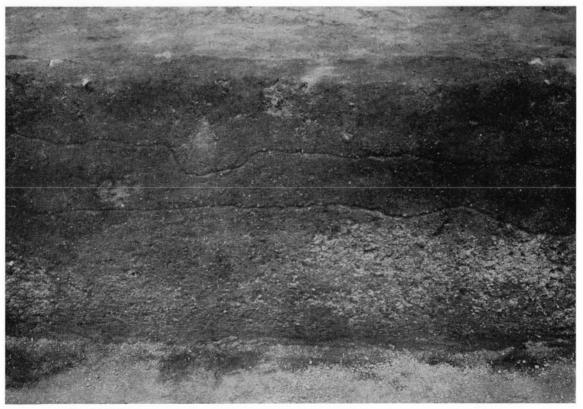
1 発掘調查風景



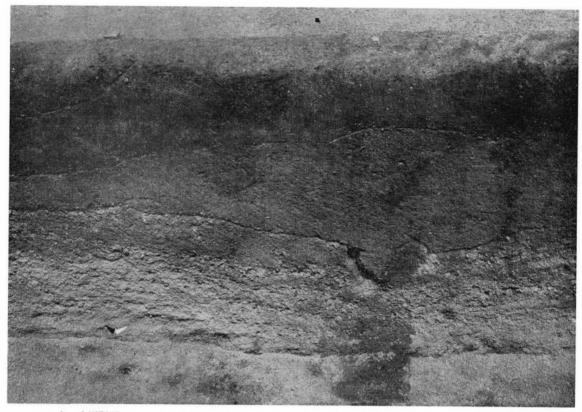
2 発掘調查風景



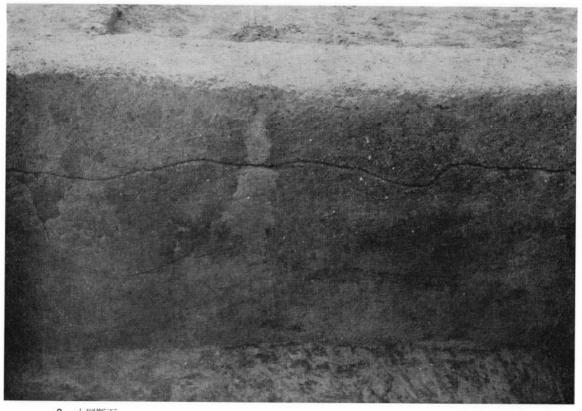
1 土層断面



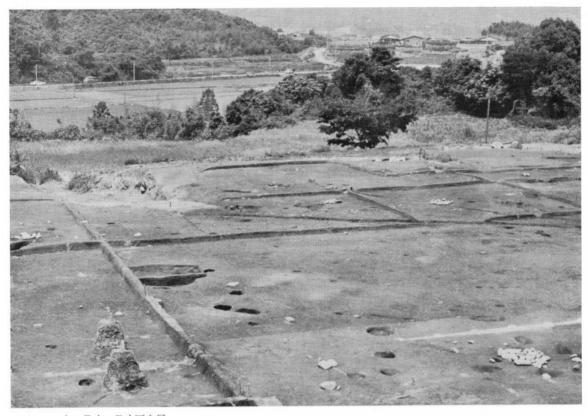
2 土層断面



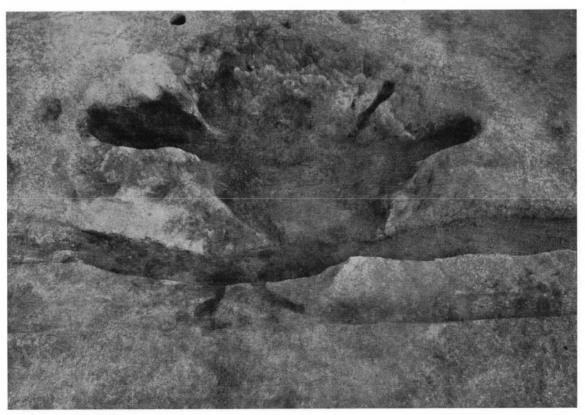
1 土層断面



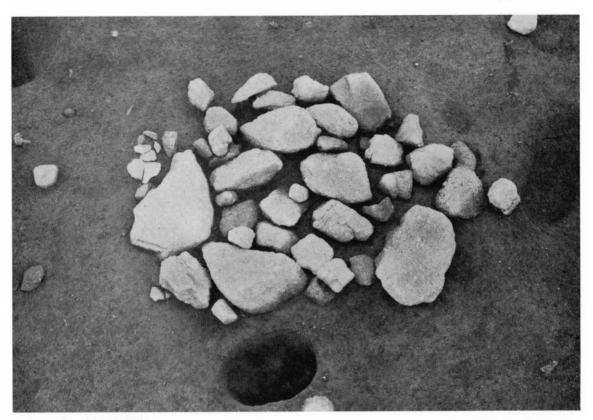
2 土層断面



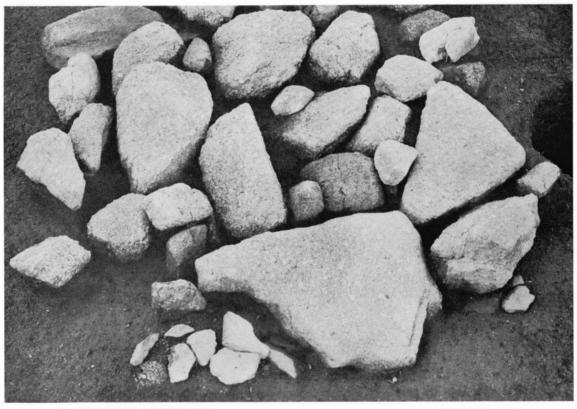
1 E 4 · F 4 区全景



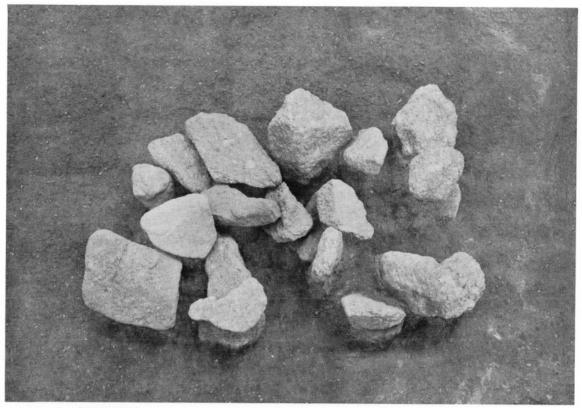
2 竪穴遺構



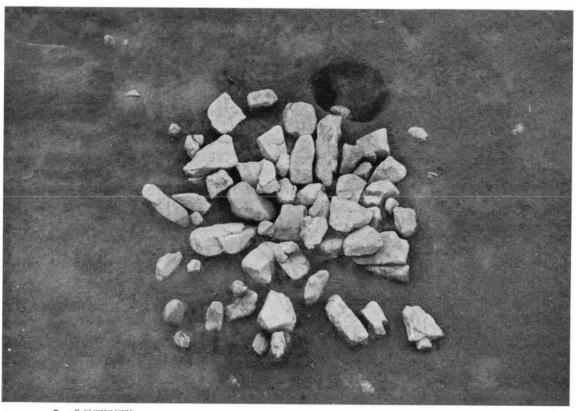
1 1号石組炉跡



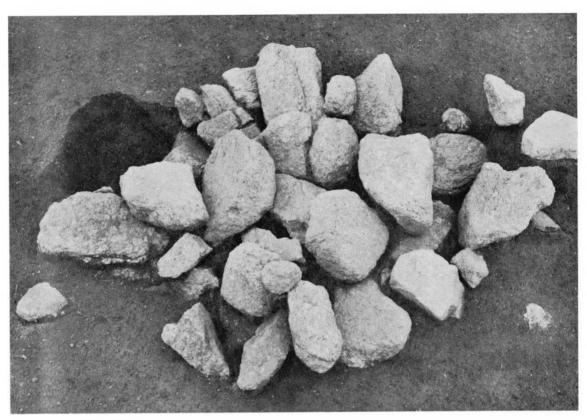
2 1号石組炉跡と土器出土状態



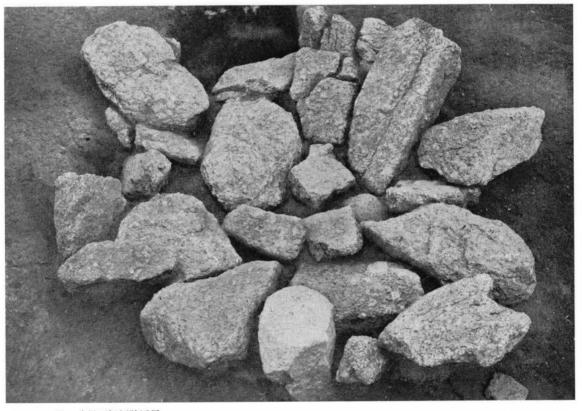
1 2号石組炉跡



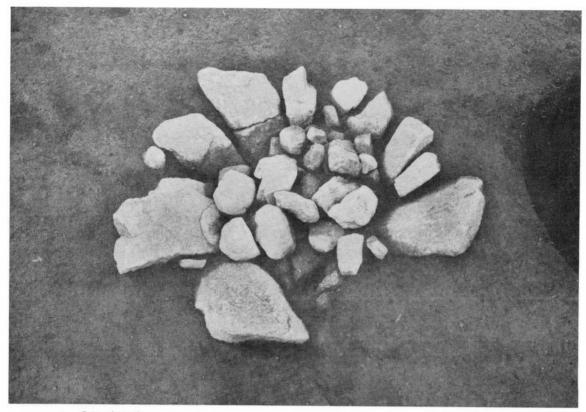
2 3号石組炉跡



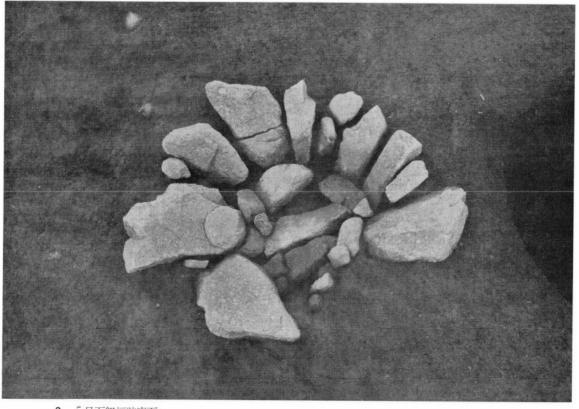
1 4号石組炉跡



2 4号石組炉跡近景



1 5号石組炉跡



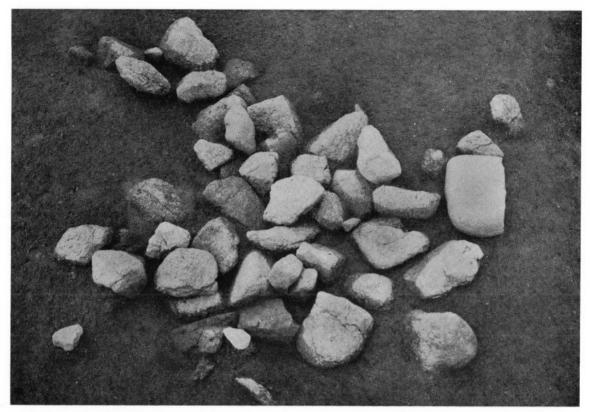
2 5号石組炉跡床石



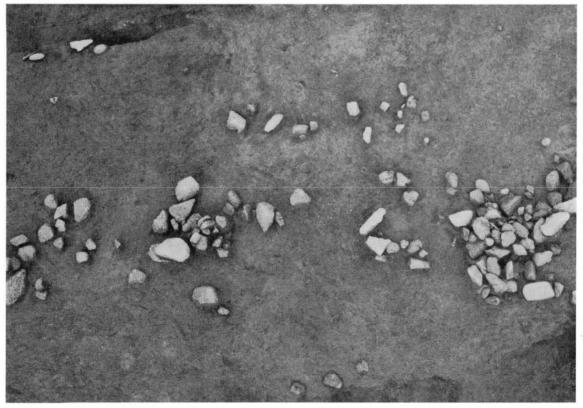
1 6号石組炉跡



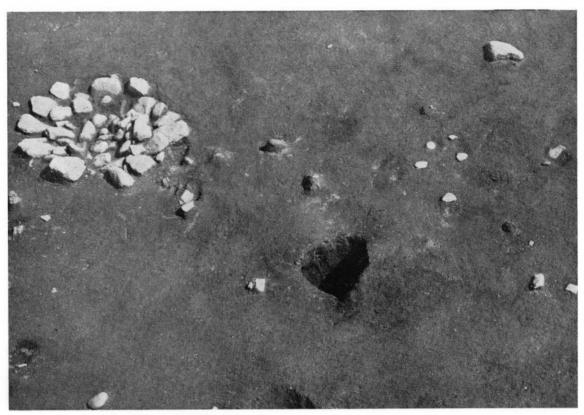
2 7 · 6 号石組炉跡



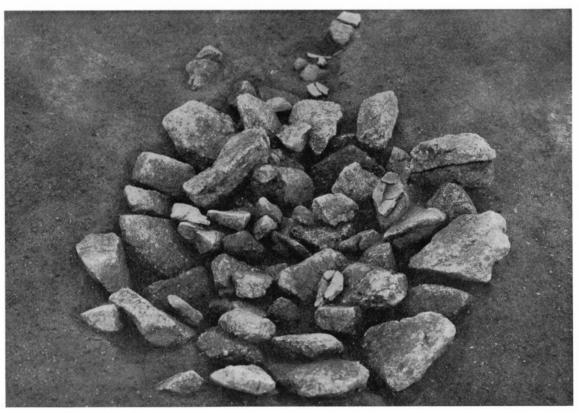
1 8号石組炉跡



2 9·8号石組炉跡



1 11号石組炉跡と遺物出土状態



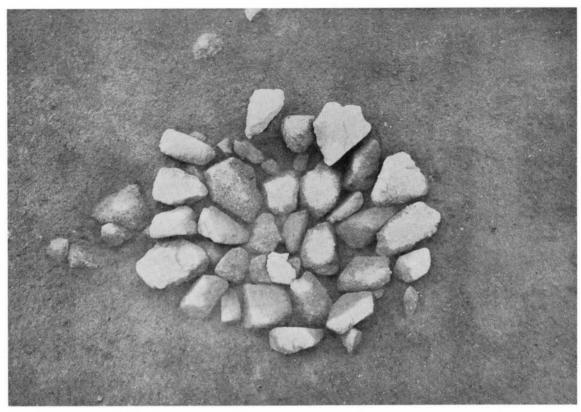
2 11号石組炉跡



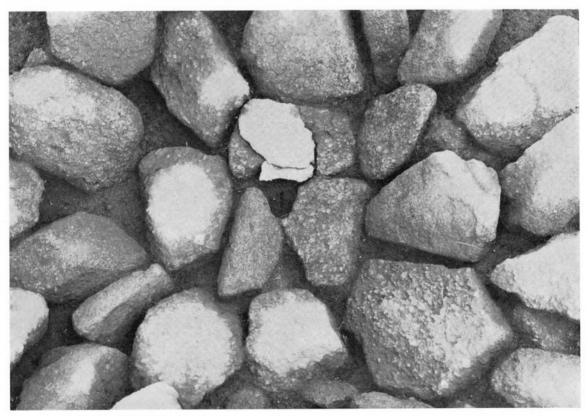
1 11号石組炉跡とピット状遺構



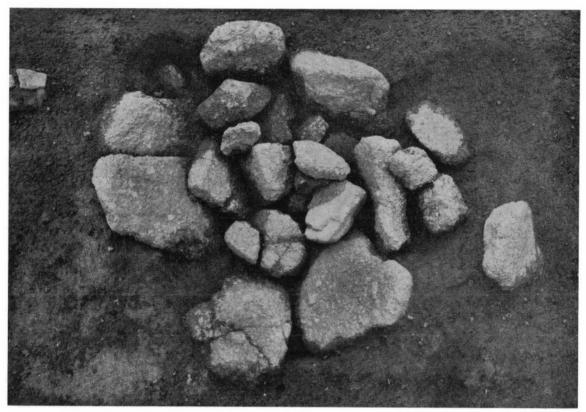
2 11号石組炉跡内押型文土器出土状態



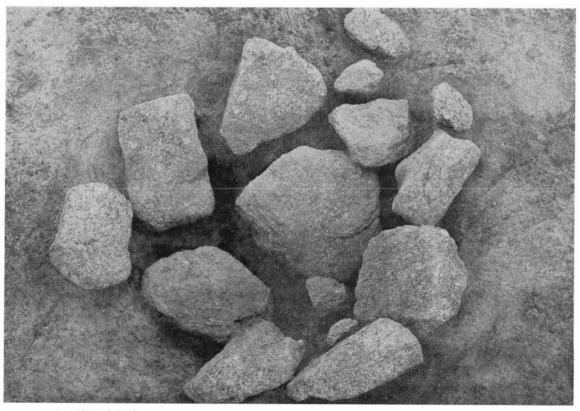
1 11号石組炉跡



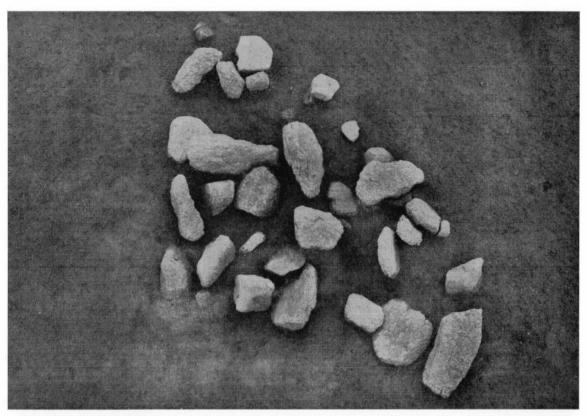
2 11号石組炉跡床石



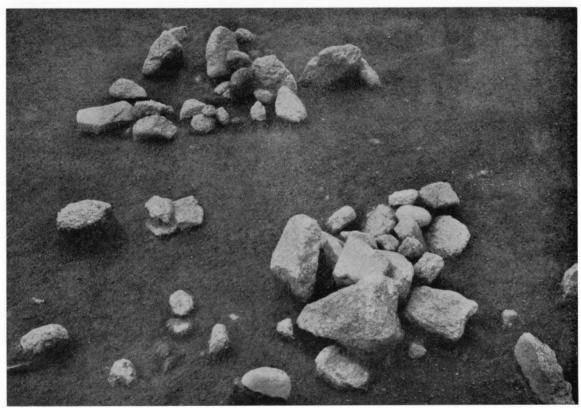
1 12号石組炉跡



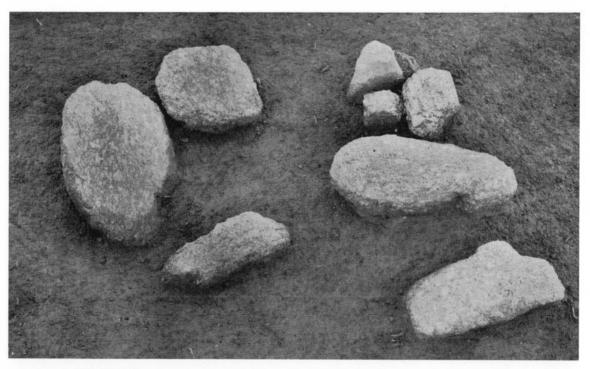
2 13号石組炉跡



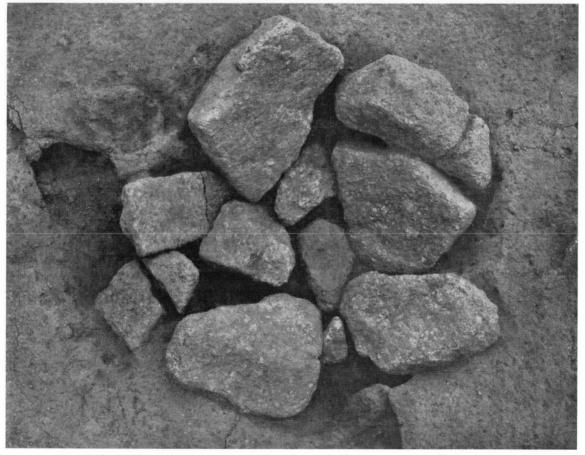
1 14号石組炉跡



2 16号石組炉跡

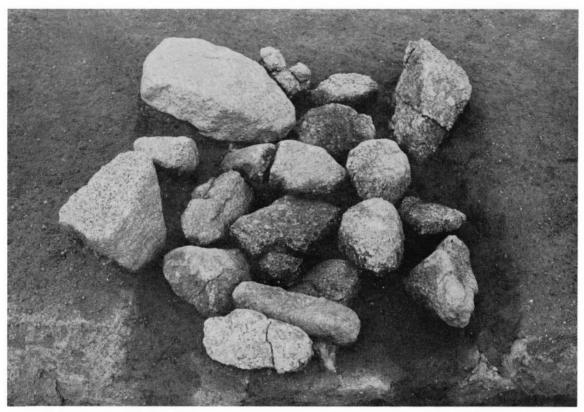


1 17号石組炉跡



2 18号石組炉跡





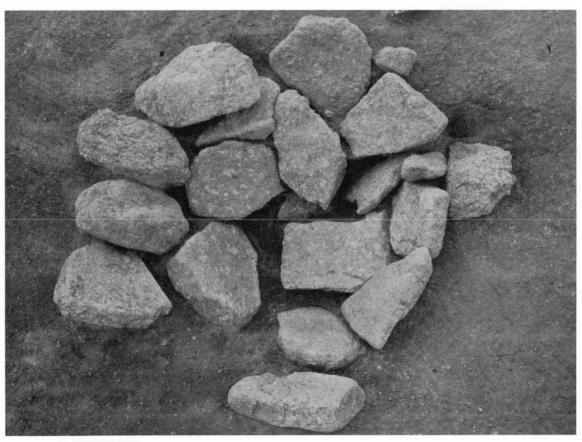
1 19号石組炉跡



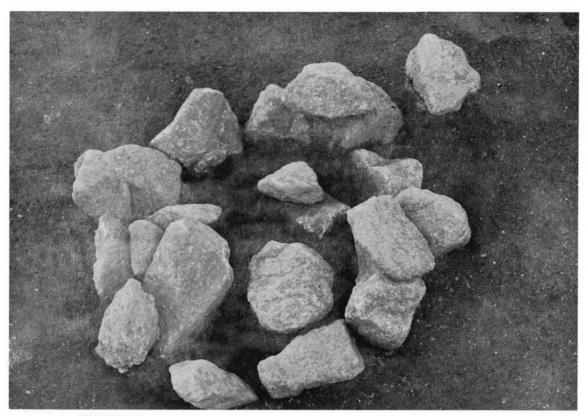
2 20号石組炉跡



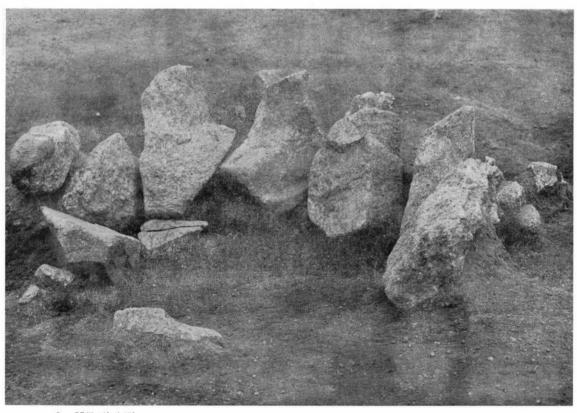
1 21号石組炉跡



2 22号石組炉跡



1 23号石組炉跡



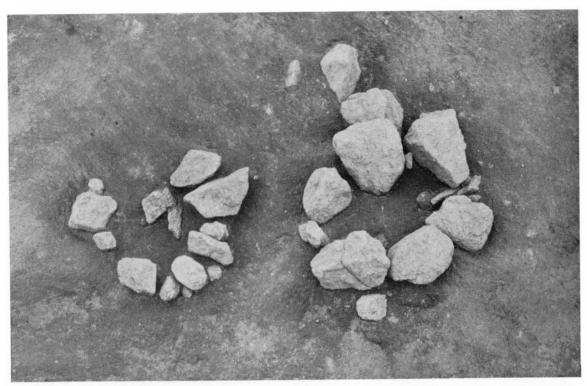
2 25号石組炉跡



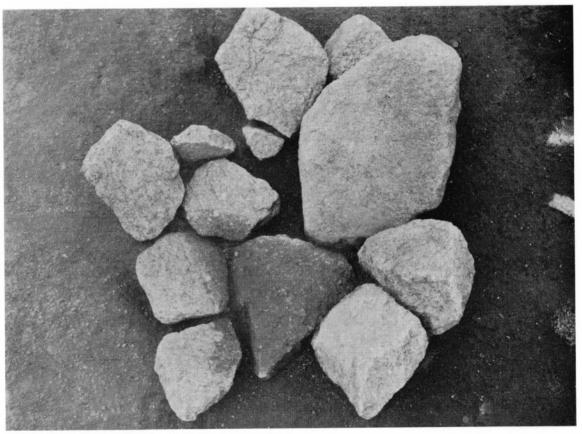
1 25・27・26・22号石組炉跡 (東から)



2 25・27・26・22号石組炉跡(南から)



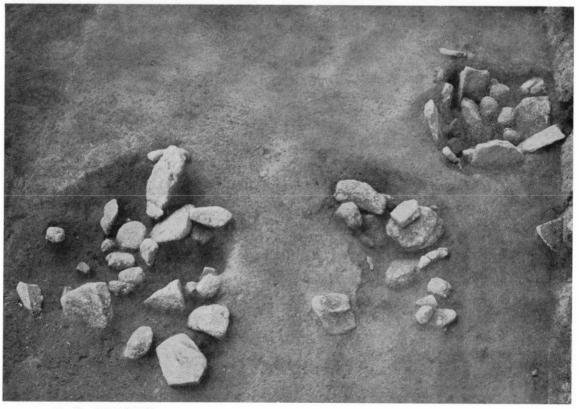
1 27 · 26石組炉跡



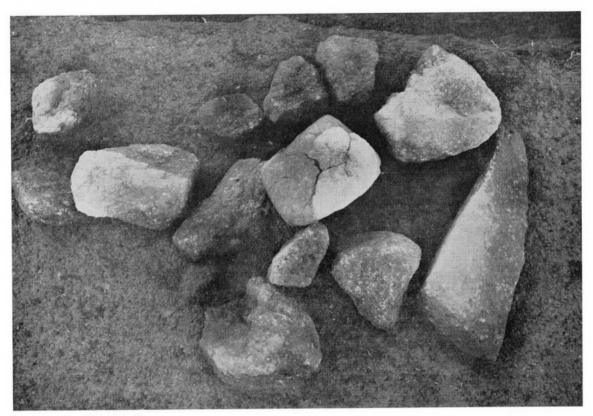
2 28号石組炉跡



1 29号石組炉跡



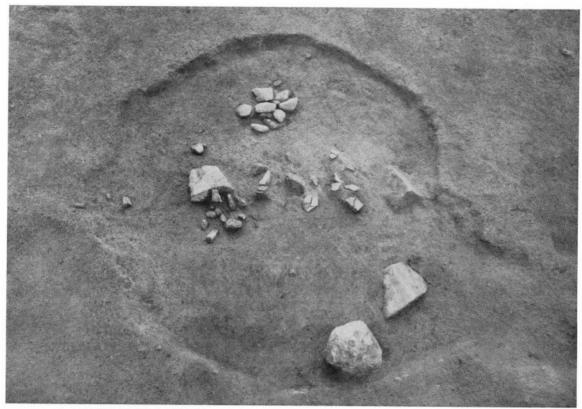
2 30·29号石組炉跡



1 31号石組炉跡

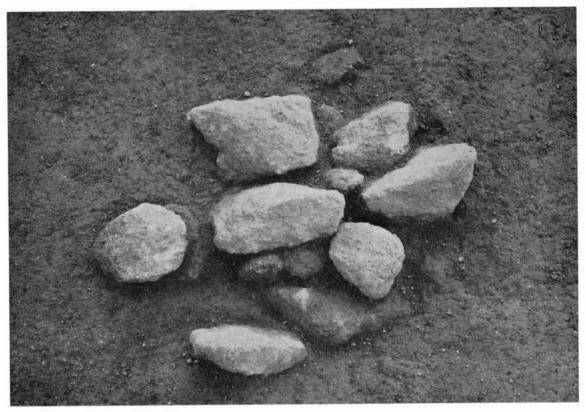


2 32号石組炉跡

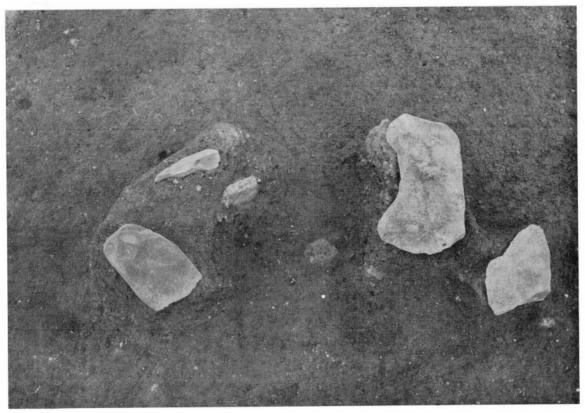


1 円形竪穴遺構全景(東から)





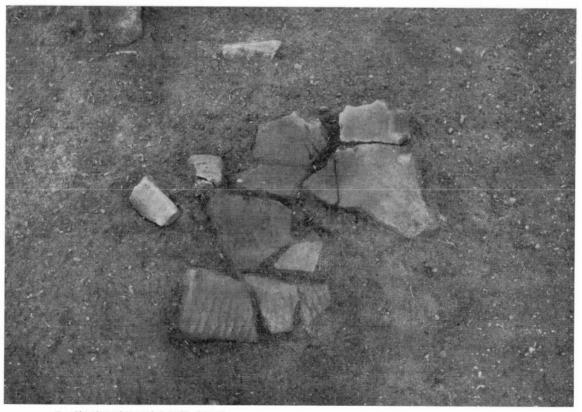
1 円形竪穴遺構内石組



2 円形竪穴遺構付近の剝片出土状態



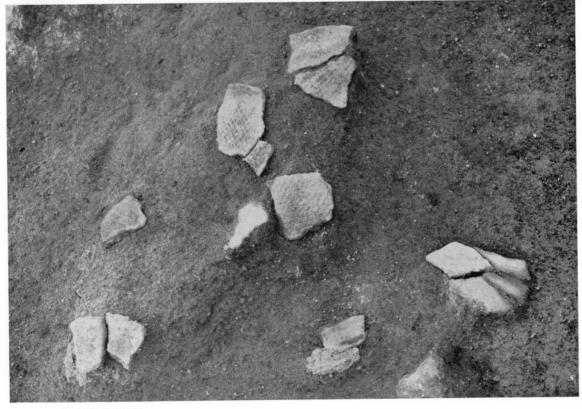
1 山形押型文土器出土状態



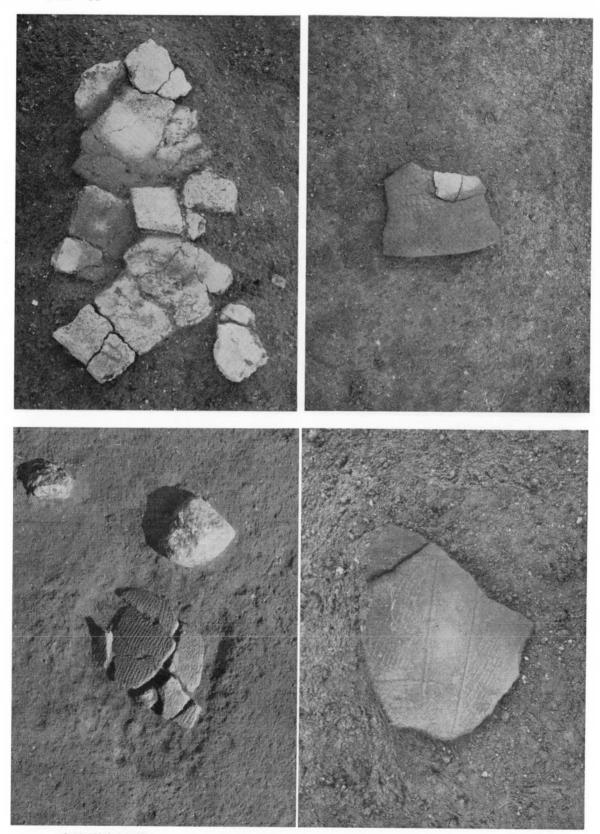
2 楕円押型文土器出土状態(裏面)



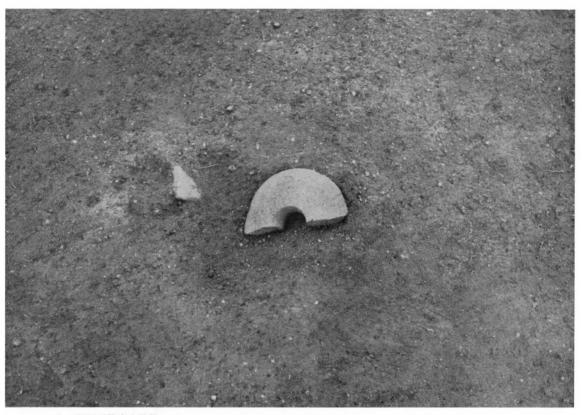
1 遺物出土状態



2 遺物出土状態



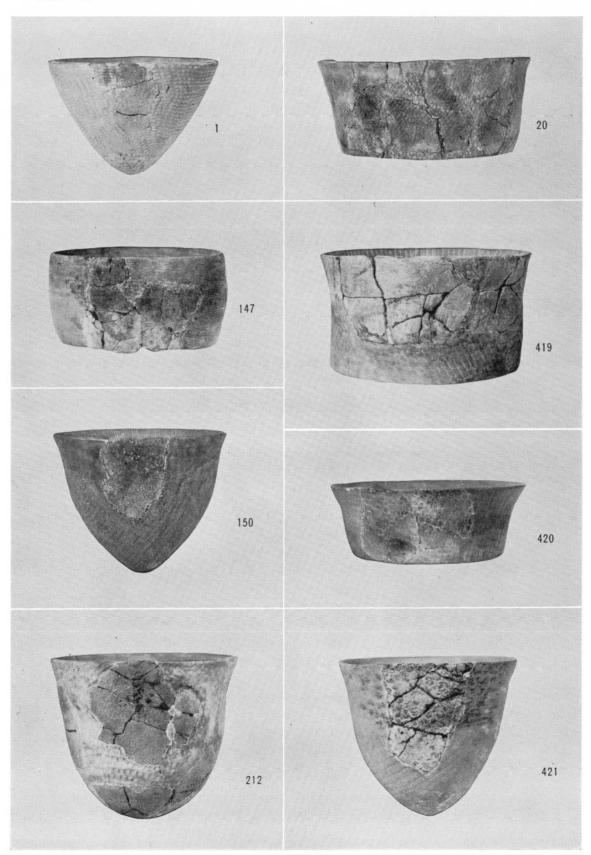
各種遺物出土状態



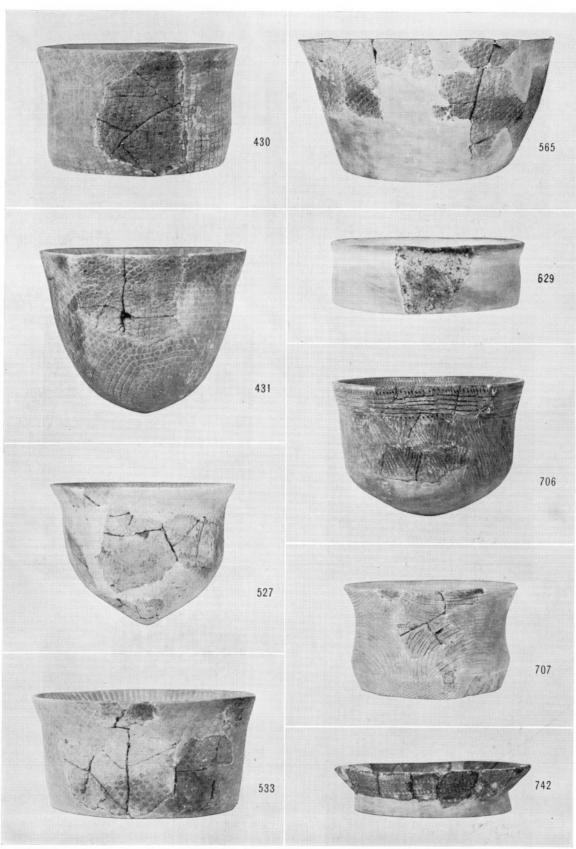
1 環状石斧出土状態



2 9号石組炉跡付近石器出土状態



出土土器 1



出土土器 2





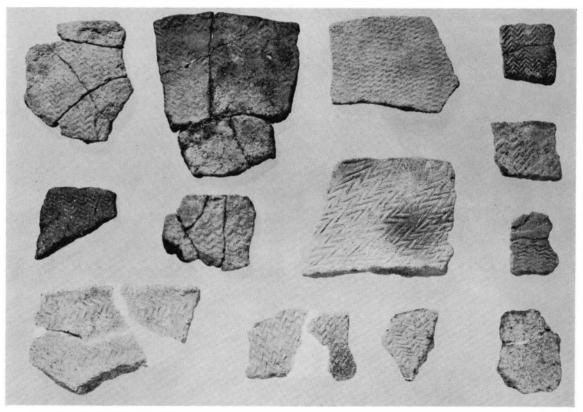




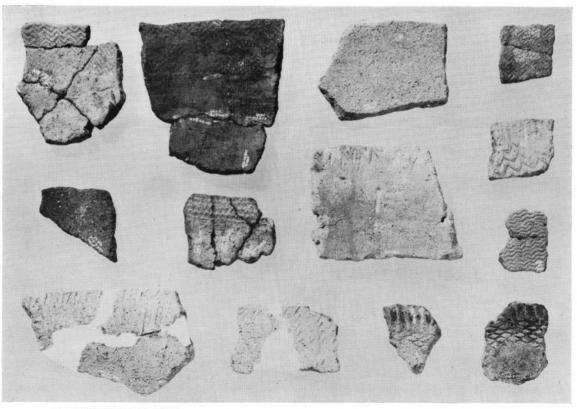




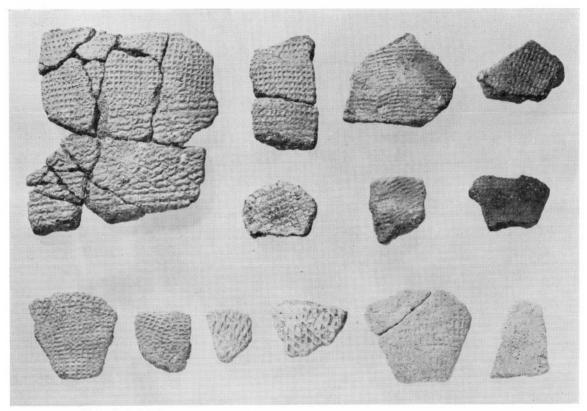




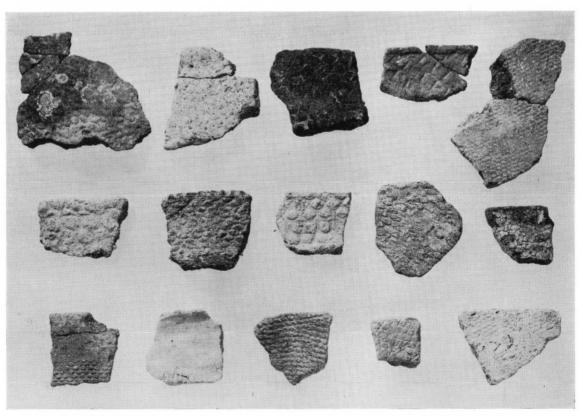
1 山形押型文土器(外面)



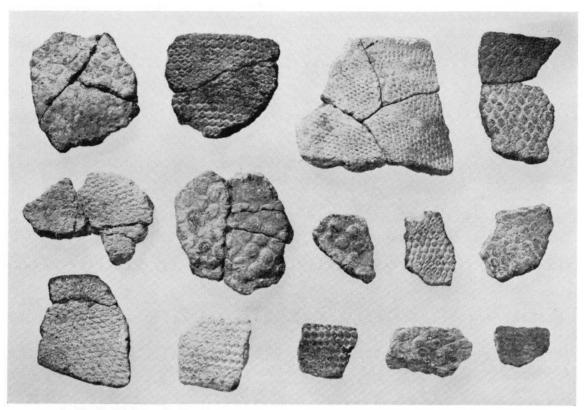
2 山形押型文土器 (内面)



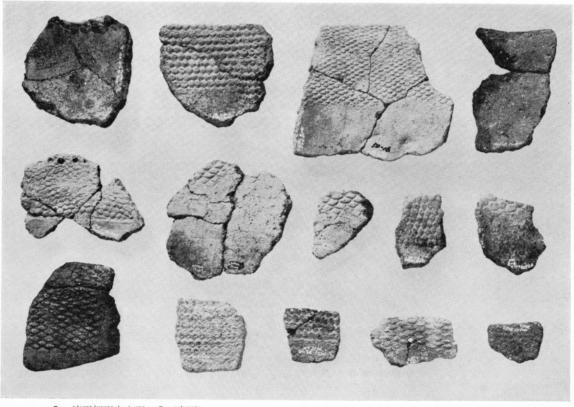
1 格子目押型文土器



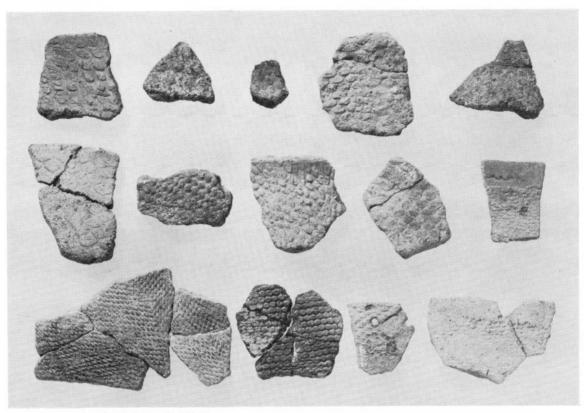
2 楕円押型文土器 1



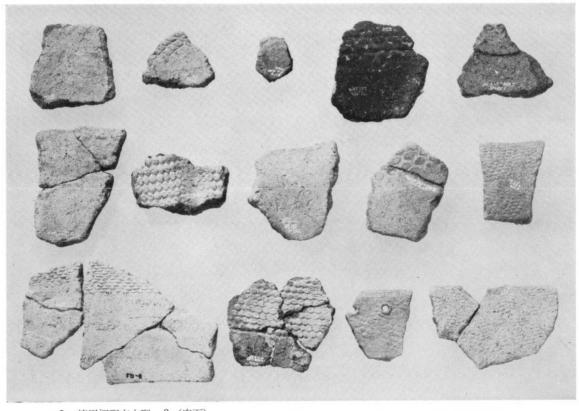
1 楕円押型文土器 2 (外面)



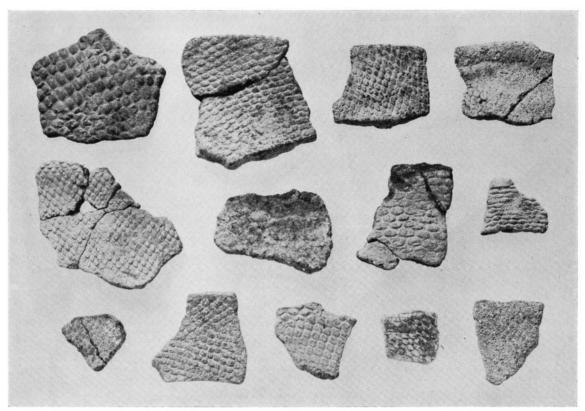
2 精円押型文土型 2 (内面)



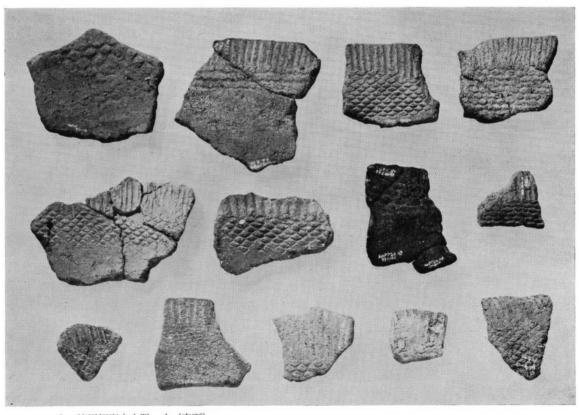
1 楕円押型文土器 3 (外面)



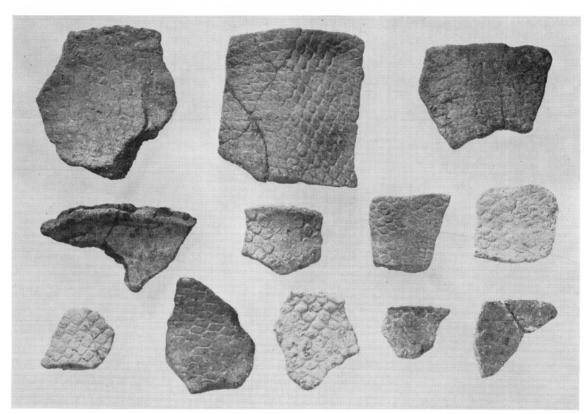
2 楕円押型文土型 3 (内面)



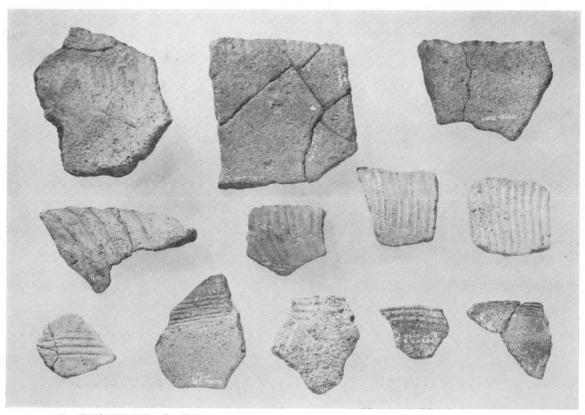
1 楕円押型文土器 4 (外面)



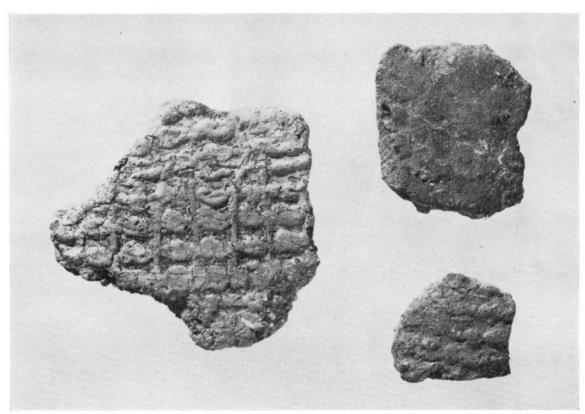
2 楕円押型文土器 4 (内面)



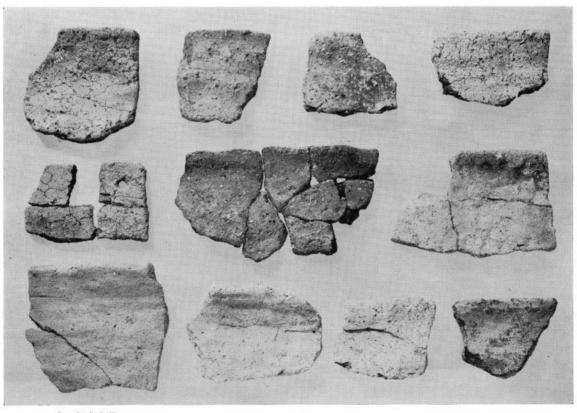
1 楕円押型文土器 5 (外面)



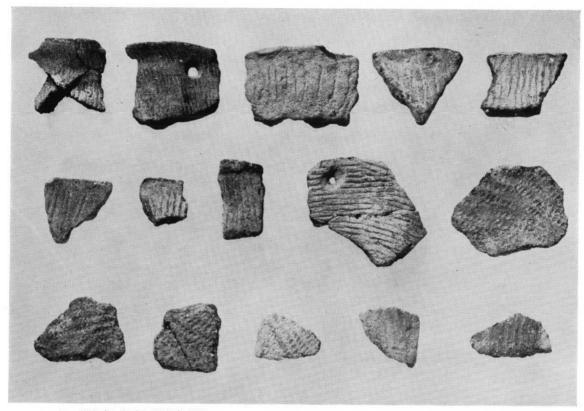
2 楕円押型文土器 5 (内面)



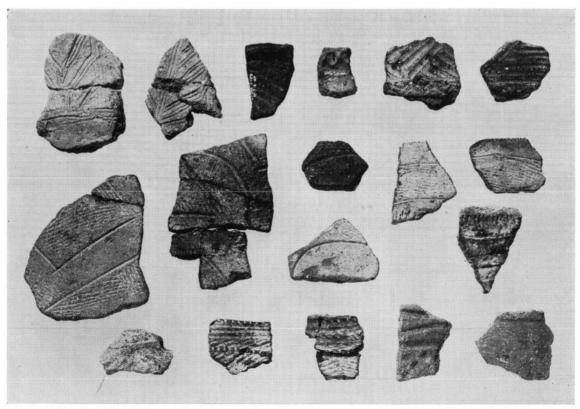
1 楕円押型文土器 6



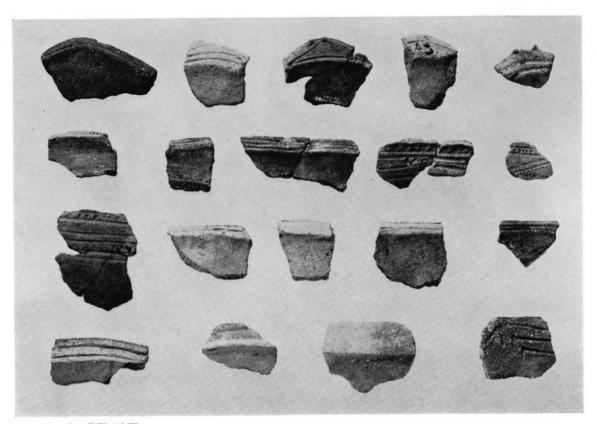
2 無文土器



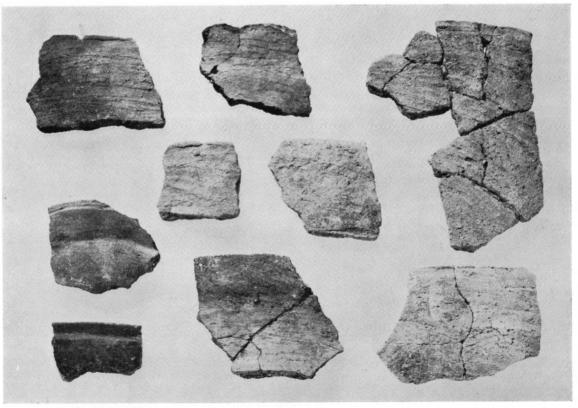
1 撚糸文・縄文・条痕文土器



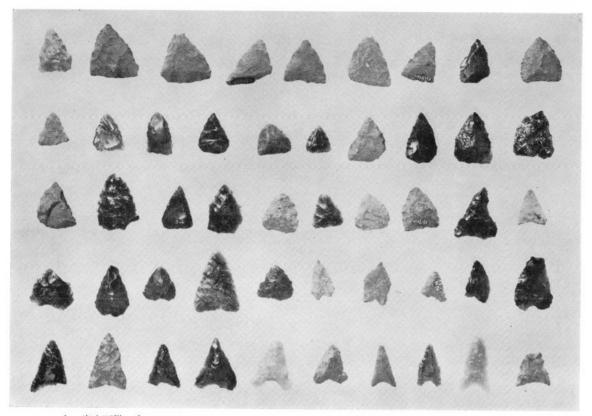
2 前・中期の土器



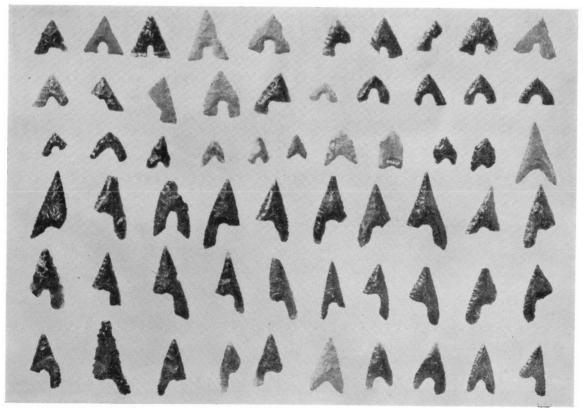
1 後期の土器

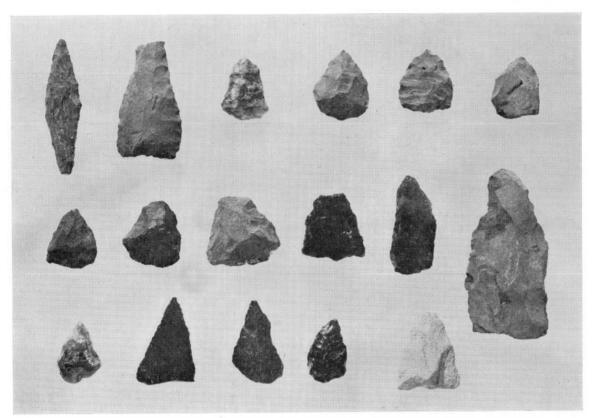


2 後・晩期の土器



1 出土石鏃 1

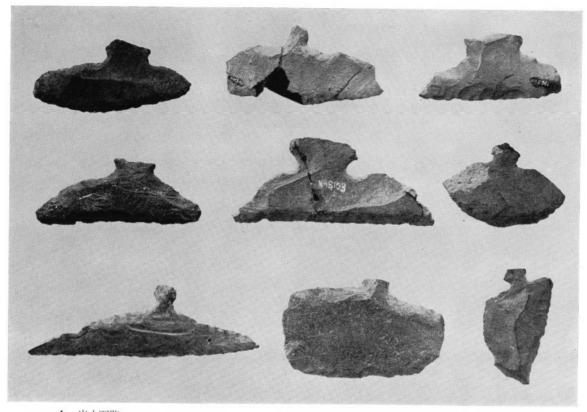




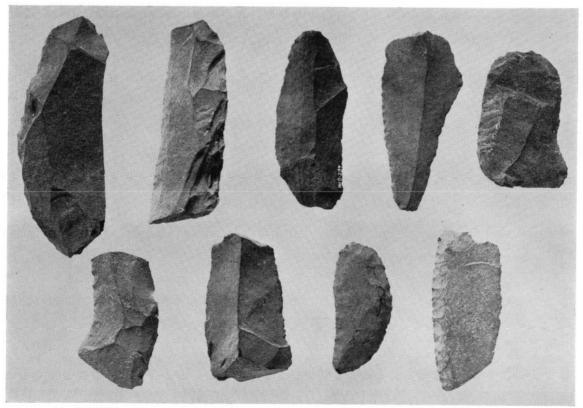
1 出土尖頭状石器



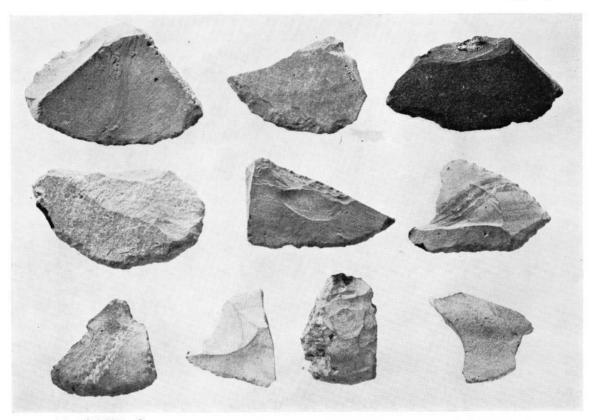
2 出土異形局部磨製石器 (実大)



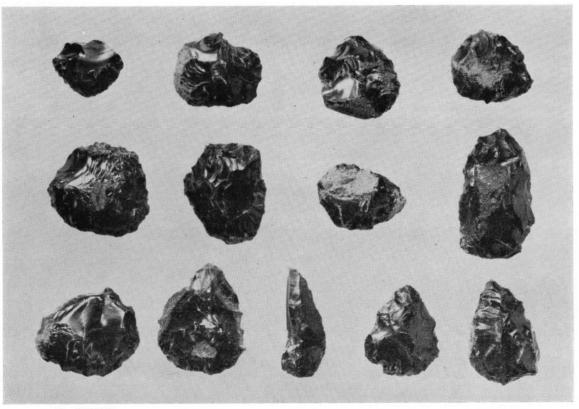
1 出土石匙



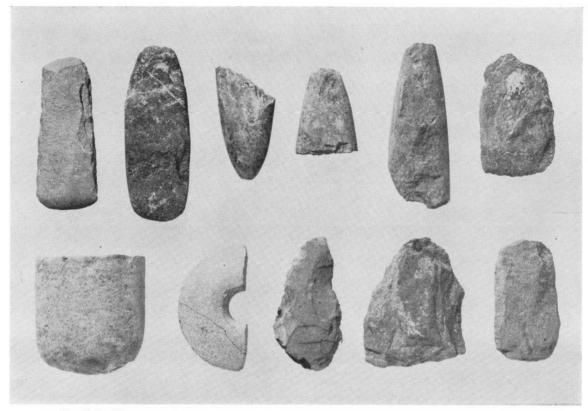
2 出土削器 1



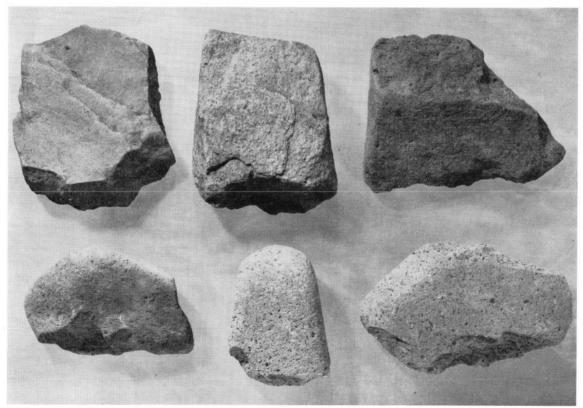
1 出土削器 2



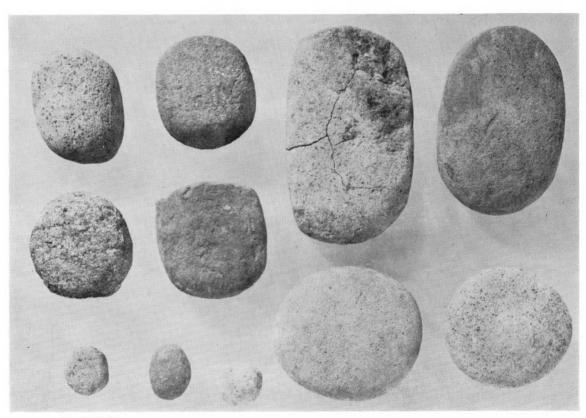
2 出土搔器



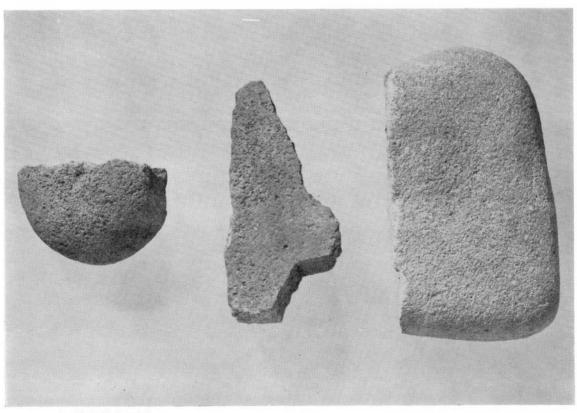
1 出土石斧



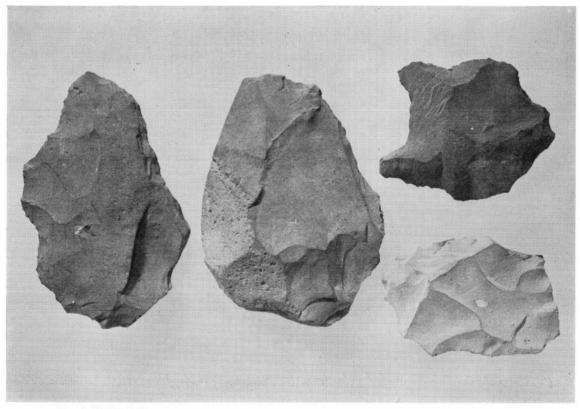
2 出土礫器



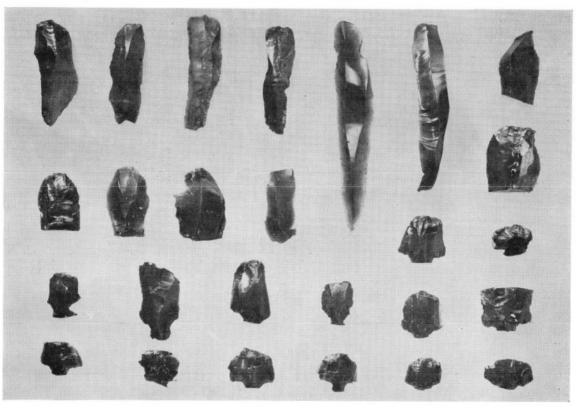
1 出土磨石



2 出土凹石・石皿



1 出土削器・剝片



2 出土刃器・つまみ形石器



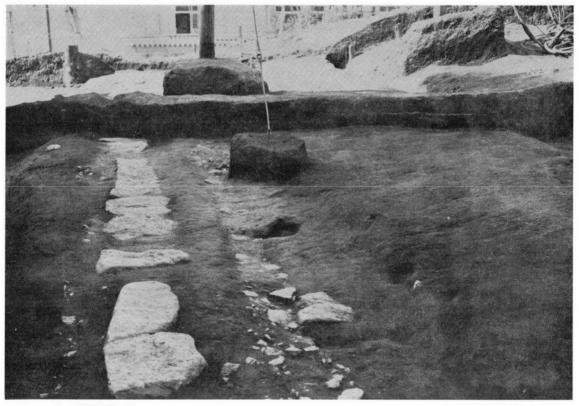
1 溝状遺構全景



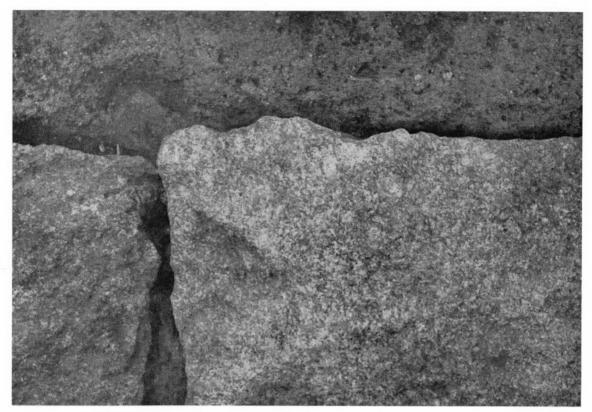
2 溝状遺構土層堆積状態



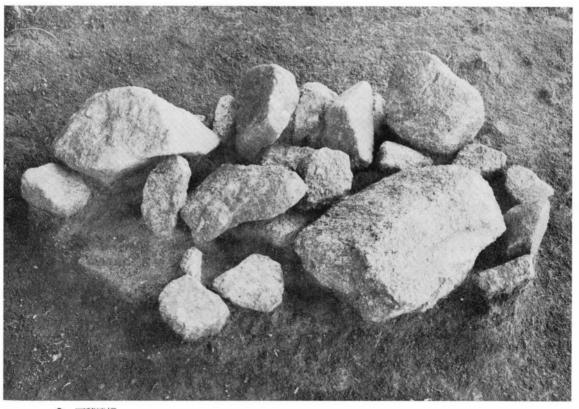
1 石畳遺構全景



2 石畳遺構近景



1 石畳遺構くさび痕



2 石積遺構

## 務教南 所育筑 蔵事後

## 山陽新幹線関係 埋蔵文化財調査報告

第 8 集

昭和53年11月30日

発 行

福岡県教育委員会福岡市中央区西中洲6-29

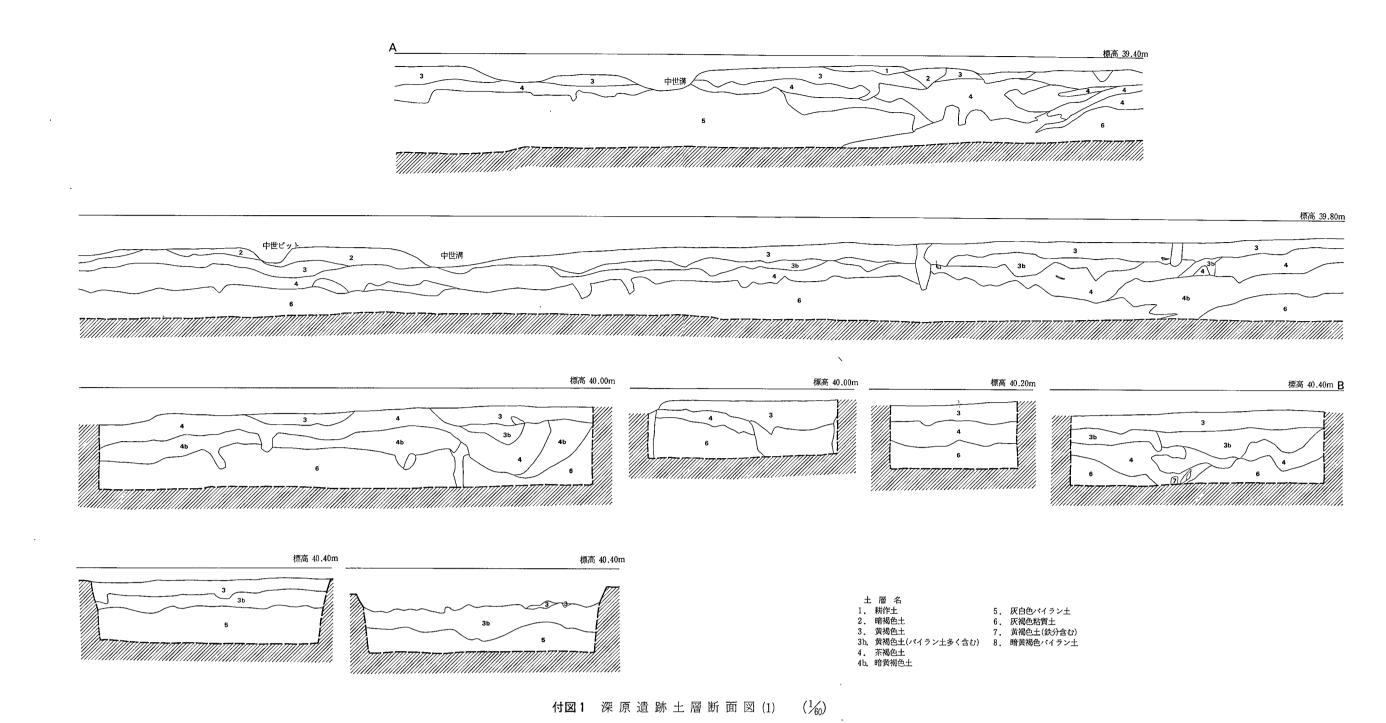
印刷

福岡印刷株式会社福岡市博多区那可142

## 山陽新幹線関係 埋蔵文化財調査報告 <sup>第8集</sup>

付 図

1978 福岡県教育委員会



FE C. 2000

FE C.

付図2 深原遺跡土層断面図(2) (1/60)



, f<sub>e</sub>-

. .